

熊本大学五高記念館叢書 第七集

昭和期の第五高等学校

調査報告(五)

熊本大学五高記念館



五高創立六〇周年 本館前緑門

一九四七（昭和二三）年一〇月一〇日撮影

郡家徳郎氏寄贈

刊行にあたって

熊本大学五高記念館館長 三澤 純

第五高等学校を含む旧制高等学校は、一九五〇（昭和二五）年に、最後の卒業生を送り出して、六〇有余年の歴史に幕を閉じました。その最終段階で入学された方たちも、皆さん、現在九〇歳を越えられています。本調査報告書で聞き取りを行わせていただいた八人の方たちは、一九四五年から一九四八年までに五高に入学されており、激しい戦争と厳しい戦後混乱期をかくぐってこられた経験をお持ちです。

この時期に入学された方たちの特徴として、本調査報告書は、それまで均質であった入学生が大きく変化していることを指摘しています。それまでは旧制中学校を卒業し、（途中で浪人したとしても）その後、旧制高校に入るというシンプルなルートであったものが、戦時体制の大波の影響で複雑に変化しているのです。

例えば、五高の最後の卒業生の一人であり、戦後は日本近現代史研究の大家となった大江志乃夫氏（一九二八―二〇〇九）は、東京府立第四中学校を経て、熊本陸軍幼年学校・陸軍予科士官学校・陸軍航空士官学校（在学中に敗戦を迎える）を経て、一九四七（昭和二二）年に五高に入学されています。ちなみに大江氏は、新制熊本大学が一九四九年一月に開学記念式典を開いた際、五高在校生代表として挨拶をされています。

こうした入学生の経歴の変化は、例えば履歴書などの史料を分析しても分かることですが、そこに当事者の「語り」が加わることで、よって、まるでモノクロ画像がカラー画像に転換するように、そこから読み取ることができる歴史情報は一気に拡大することになります。五高記念館では二〇〇九年から継続的に、卒業生への聞き取り調査を行っており、その対象者は総数八五人にも達します。

オーラルヒストリー実践の第一人者である大門正克氏は、その豊富な経験をまとめた『語る歴史、聞く歴史』（岩波新書、二〇一七年）の中で、次のように述べています。

仮に、既存の「日本の歴史」に個人の歴史をあてはめて、それを通史とするのであれば、通史に個人の歴史を叙述する意味はない。それでは、個人の歴史はあくまでも既存の歴史を説明する手段になってしまうからである。あるいはまた個人の歴史を積み重ねるだけでも通史にはならない。（同書一七六ページ）

薄田千穂研究員の労作である、本調査報告書に収められた一つひとつの「聞き書き」は「個人の歴史」の中身が、戦中・戦後の「既存の歴史」と突き合わせられ、さらに精緻な検討が加えられて、「既存の歴史」が塗り替えられるような、斬新な成果が産み出されることを期待して、擱筆させていただきます。

昭和期の第五高等学校 調査報告(五)

目次

刊行にあたって……………	三澤 純
はじめに……………	薄田千穂
一 戦後の第五高等学校……………	薄田千穂 4
二 聞き取り……………	
香月 正義 (昭和二〇年理科乙類七組入学)……………	8
若杉 史夫 (昭和二二年理科二組入学)……………	19
福山 博隆 (昭和二二年理科三組入学)……………	27
矢野 元暎 (昭和二二年理科四組入学)……………	35
田阪 耕一 (昭和二二年理科四組入学)……………	42
毛利 邦郎 (昭和二二年理科一組入学)……………	62
間宮 勇雄 (昭和二三年文科一組入学)……………	67
米田 豊 (昭和二三年理科三組入学)……………	67
三 戦後の第五高等学校関係資料……………	
1 『習学寮報』……………	79
2 「私の『統習学寮史』補遺」……………	89
むすびにかえて……………	薄田千穂

はじめに

熊本大学五高記念館研究員 薄田千穂

本書は、二〇一九年（令和元年）及び二〇二三年（令和五年）に実施した聞き取り調査、戦後の第五高等学校に関する資料をまとめたものである。

聞き取り調査は八人の方々を掲載した。入学年は、一九四五（昭和二〇）年、一九四七（昭和二二）年、一九四八（昭和二三）年で、すべての方々が戦後の五高生活を経験されている。

敗戦により日本全体が大きな転換期を迎える中、戦時教育体制の崩壊、教育制度の改革、インフレ等の影響を受け、個々の境遇は大きく変化した。五高に入学する生徒の履歴も、一九四五（昭和二〇）年の七月入学生とその後入学生とは様相が異なる。生徒の数だけ違う経験があり、これまでの基礎知識が通用しないというこれまでにない緊張感があった。しかし、聞き取りを進めるにつれ、その中に流れている変わらないものがあることも実感できた。

戦後の第五高等学校に関する記述は、『五高七十年史』『続習学寮史』『熊本大学習学寮史』にある。また、二〇〇九（平成二一）年に五高記念館が実施した「戦中・戦後の第五高等学校に関する調査」の際に、『習学寮報』復刊第二号（田阪耕一氏寄贈）、「私の『続習学寮史』補遺」（兼川晋氏寄贈）をご寄贈いただいた。いずれも戦

後の五高の様子を知ることが出来る貴重な資料である。前者三冊は印刷物となっており、閲覧できる環境にあることから、本書では、後者二点から抜粋して掲載した。

謝辞

今回、聞き取り調査内容を掲載した香月正義氏、福山博隆氏、矢野元映氏、田阪耕一氏、毛利邦郎氏、間宮勇雄氏、米田豊氏には、聞き取りに時間を割いていただき、原稿校閲等でもやり取りをさせていただいた。若杉史夫氏は、聞き取りの後、原稿確認の前に逝去された。ご冥福をお祈りし、掲載をご承諾いただいたご家族に感謝したい。

なお、COVID-19のパンデミックの間、東京の五高卒業生の方々と交流を保つことができたのは、東京龍南会の世話役をされている本田俊哉氏のご尽力のおかげである。これまでの聞き取りも氏のご尽力に助けられてきたことを特記する。

二〇〇九年から二〇二三年まで、のべ八五人の方々に聞き取り調査を行ってきた。いずれの方も五高のためならと、快く時間を割いて下さった。語られる体験は等身大の記憶として鮮やかに浮かび上がり、心に迫る経験をさせていただいた。原稿化できないまま、鬼籍に入られた方も多く、力不足をお詫びしたい。これまで調査にご協力いただいたすべての方々に心から感謝を申し上げます。

一、戦後の第五高等学校

薄田千穂

本項では、戦後の第五高等学校について、基本事項を記述する。

一九四五年時点で高等学校に適用されていたのは、文部省令第二十七号「高等学校規程」(一九四三年四月一日施行)である。この規程では、高等学校の課程は二年であったが、勅令一〇二号(一九四六年)により、三年に復された。その後、文部省令第十八号(一九四六年四月一日施行)により一部改正が行われ、文科、理科に設けられていた外国語の選択による甲類、乙類の区分は廃止されている。法律第二十六号「学校教育法」(一九四七年)により「高等学校規程」は廃止、高等学校は一九五〇年に閉校した。

入学については、一九四五年には、通常通り三月に入学試験が行われたが、中学校の勤労動員から抜けられない事態が生じており、入学式は七月となった。但し、浪人生は五月に入学しているとのことである。一〇月には軍関係学校、外地からの引揚者の転入試験があり、一月に年度二回目の入学式が行われた。一九四六年三月は、例年通り入学試験が行われたが、軍関係学校出身者の入学制限問題により入学が延期、一〇月入学となった。一九四七年には通常のカジュアルに復している。なお、一九四八年度一年生は、学制改革により一九四九年三月に高等学校一学年修了で高等学校の課程を終

わり、一九四九年度の五高は三年生のみとなった。

成績については、試験の落第点は六〇点未満で、落第点の科目数、評点によっては進級できないことがあった。それに関しては、規程には具体的な明記がない。また、同じ学年を二回落第すると除名になった。成績発表は、落第点の教科に赤丸がつけられた一覧表が、教室本館の中央階段両脇に掲示される。このため、落第点を「赤丸」、成績発表を「赤丸発表」と通称した。戦後は青丸、黒丸と称される点数も存在したという証言が多数寄せられているが、規程は確認できていない。

学校行事については、一九四六、四八年に五高七高対抗戦、ボートレースが開催されている。一九四七年については、詳細がはっきりしない。また、一九四七年は五高開校六〇年に当たることから、記念式典をはじめ、音楽会、演劇会、映画会、美術展、運動会、習学寮の公開などが行われた。祝賀行事は翌年の六一周年にも開催された。

五高の寄宿寮「習学寮」は、本館の北側に設けられていた。建物は四棟あり、一、四寮と称してそれぞれに惣代がいた。炊事、運動、衛生などの部が設けられており、惣代が各部署員・班長と共に運営に当たるという自治制度がとられていた。原則として一年生が入寮し、多くは二人部屋であったが、一九四三年から一年生が全員入寮することになり、一九四四年に四寮新館が増築され、一、三寮は三人部屋となっていた。戦後は全員入寮の原則がなくなり、縁者が熊本市内に在住している場合は入寮できず、通学となる場合もあった。

一、戦後の第五高等学校

五高最後の年である一九四九年は、三年生が卒業し、一年生が修了して、習学寮は三年生の一学年のみとなり、一旦寮を出た生徒が戻って入寮するというケースもあった。

一九四五～一九五〇年の主な出来事は以下のとおりである。

一九四五（昭和二〇）年

八・一五 ポツダム宣言受諾を発表

午後一時より講堂にて詔書奉読式、三日間臨時休業

九・二九 授業再開

一〇・二 軍系学校生徒の転入試験、三一 合格者発表

一一・二二 運動会開催

一一・一二 旧陸海軍転入学徒拒否事件

一一・一六 入学式

一九四六（昭和二一）年

一・一三 御真影奉還のため、浅井東一教授等が上京

二 高等学校が三年制に復す。

三・一 龍南学徒報国団を解消し、元の龍南会に復す。

予算会議が行われる。

六・一五 ボートレース

六 食糧難により一学期終了

四寮新館を条件付きで教授住宅とする。

七・一四 五高対七高野球戦が二〇年ぶりに復活

一二対一一で五高勝利

九・七 外地転入学生の試験並に身体検査が行われる。

九・九 合格者決定

九・三〇 新入生入寮

寮生誓詞復元、揭示

九 下宿難のため四寮別館を開放

一〇・九～一〇 開校記念行事

演能、レコードコンサート、映画、記念式典

一〇・一二 教員適格審査協力委員選挙

一〇・二九 寮生大会で食糧休暇の要望を可決

一一・三 日本国憲法公布

一一・四 添野元校長逝去

一一・一〇～二四 食糧休暇

一九四七（昭和二二）年

一・三一 生活課を解消し、生徒課・厚生課を設ける。

二 新館居住の田崎・森教授によるストーム敢行

三・二九 教育基本法公布、即日施行

三・三一 学校教育法公布

四・二一 入学式

四・二二 熊本市内の新制中学九校で開校式

四 習学寮規約大幅改正。

一、惣代は総代、幹事は委員。

二、運動、弁論部を廃し農耕、生活、寮報部を新設

八部制となる。

三、風紀委員を設置

- 五 寮外生に外食制
 - 九・二三 熊本に綜合大学を建設する相談会開催
 - 九 自炊所の新設
 - 九 総代選挙、立候補制となる。
 - 一〇・一〇 創立六十周年記念祭 松隈健彦、佐々弘雄講演
 - 一一・一一 『習学寮報』復刊第一号刊行
 - 一一 昭和二三年度総代決定、運動部復活
 - 一九四八(昭和二三)年
 - 二 生徒大会を開いて龍南会を解散、生徒自治会を結成
 - 三・二二 五高最後の合格発表
 - 第一高女から四人合格 初の女子五高生
 - 四・一一 入学式
 - 四・二〇 学制改革により熊本県下三四の新制高校が発足
 - 四・二四 習学寮新入寮生大晩餐会
 - 四・二五 習学寮野球対寮マツチ 三寮優勝
 - 五・二三 水前寺野球場で野球対七高対抗戦
 - 一対〇で五高勝利
 - 五・三〇 文理科対抗ボートレース
 - 五・三一 十三代校長竹内良三郎任命
 - 六・二六、二七 授業料値上げ反対スト
 - 九・二〇 『続習学寮史』刊行
 - 一〇・一〇～一二 六十一周年記念祭
 - 一〇 『習学寮報』復刊第二号刊行
 - 一〇・二二 習学寮総代選挙
 - 一一・三〇 習学寮規約改正
 - 一二・九～一九 大学法案反対無期限スト
 - 一九四九(昭和二四)年
 - 二・一七 卒業式、一学年修了式
 - 四・二二 習学寮各部委員選挙
 - 五・九、一〇 大学法案反対スト
 - 五・三一 十四代校長河瀬嘉一任命
 - 五・三一 熊本大学へ包括される。
 - 六・一五～一七 第一回新制大学入学試験
 - 習学寮に受験生宿泊
 - 九・一 熊本大学第一回入学式
 - 一九五〇(昭和二五)年
 - 三・二五 第五高等学校課程終了式
 - 一九五三(昭和二八)年
 - 習学寮解散
- 『五高七十年史』『続習学寮史』『熊本大学習学寮史』『私の『続習学寮史』補遺』より作成

二、聞き取り

凡例

- 1、氏名、五高入学年、クラス、卒業年、聞き取り調査を行った年月日、聞き取りの内容を掲載した。
- 2、聞き取りの内容をまとめるため、見出しを設定した。順番は内容に応じて並べかえた。
- 3、聞き取りの際に使う年号は概ね元号であることから、本項では元号を使用した。
- 4、学校名については略称を記載したところがある。(例)第五高等学校↓五高、熊本中学校↓熊中
- 5、戦争の名称など、歴史用語は、語り手の言葉通りに記載し、統一は行なわなかった。
- 6、個人名の後の()は、五高在籍年、クラスである。
- 7、聞き取り、原稿作成・編集作業は、五高記念館研究員薄田千穂が行った。なお、作成した原稿は本人・家族に確認・校正をいただいている。

語句等説明

クラス名 高等学校の課程には文科、理科があり、それぞれ第一外国語の選択により、英語の甲類とドイツ語の乙類に分かれた。昭和二一年文部省令第十八号により、甲乙の区分は廃止されている。**習学寮** (しゅうがくりょう) 五高の寄宿寮。昭和一八年から終戦までは一年生全員が入寮するという規則となっていた。戦後は、熊本市内に自宅、縁者があるものは、原則としてそこから通学となっていた。建物四棟は一寮→四寮と称し、それぞれに惣代が選ばれて、委員、班長とともに自治が行われていた。

武夫原 (ぶふげん) 敷地西側の運動場の通称

東光原 (とうこうげん) 正門東側の運動場の通称

武夫原頭 (ぶふげんとう) 五高の代表的な寮歌。明治三八年に東京帝国大学在学中の卒業生、恵利武より寄贈された。「武夫原頭」を歌いながら踊るダンスを「武夫原ダンス」と呼んだ。

エッセン 食料、食事のこと、ドイツ語の *essen* からきている。

ドツペル 落第すること、ドイツ語の *doppelt* (2倍の) を動詞化した単語

ストーム 旧制高校では、寮歌を歌い、踊ったり騒いだりすることをいう

香月 正義

昭和二〇年理科乙類七組入学 昭和二四年卒業
二〇二三年四月一二日聞き取り

五高入学前

福岡県嘉穂郡穂波村の三菱飯塚鉱業所の社宅で生まれました。飯塚は当時エネルギー主力の石炭の町で、労働者があふれていました。私らが通っていた楽市小学校は、一クラス五三人、六年は一二クラスもあり、六〇〇人ぐらいいました。私が目指した中学校は嘉穂で、明治三五年に嘉穂郡立の中学校として設立された福岡県では五校目の歴史ある学校です。昭和一五年、小学校を卒業して受験した時、受験者数六一四人合格者数二六四人、二・三倍の競争率でした。この時は受験に失敗、翌昭和一六年に再受験、受験者数六五三人合格者数二六〇人、二・五倍の難関を突破し、一年遅れで入学しました。

私は、小学校のときから剣道をやっていました。中学一年の冬に行われた寒稽古の納会で、紅白の勝ち抜き試合がありました。そこで、相手チーム二四人全員を倒し優勝をしたのです。

それがもとで、先輩からも先生からも目をつけられ、「剣道部に入れ。」と再三勧誘されるようになりました。私は小学校の頃、ある大会の決勝戦で私が負けたばかりに、優勝旗をもらえなかったことがあるのです。その苦い経験があるものですから、剣道だけは

したくないと思って、ずっと逃げていました。ところが、三年生になって、剣道の山本先生から、「もう部に入らんでいいから、練習だけでもしてみんか。」と言われ、断われなくなって、「はい。」と答えたなら、もうおしまい。結局剣道部にはいらされてしまいました。

中学校に入学したのは昭和一六年でしたが、その年の一月八日には太平洋戦争が勃発しました。三年になった頃から動員も多くなり、稲刈り奉仕のほか、夏休み返上で大刀洗飛行場に動員されたり、大分海軍飛行場では掩体壕作りをしました。昭和一九年、四年生になると、板付九州飛行機工場に動員され、零式水上偵察機作りに関わり、飛行機の胴体と羽を固定する翼結金具を造っていました。セーパーという機械を使っていたが、熟練工並にうまくありませんでした。しかし、機材のジュラルミンが無くなり、飛行機が作れなくなりました。そのあとは、特攻隊が突入し爆発するための部品の信管を作るようになりました。近くの板付空港から離陸する飛行機で特攻機はすぐ見分けがつきます。「私たちが作った信管を装着したあの飛行機が突っ込むんだな。」と思うと何とも言えない気持ちになったことを覚えています。

動員当時の食生活ですが、主食の米は一人一日一合の配給で、それでは食べ盛りの私達には話になりません。そのうちに、栄養失調で脱落する者が増えて来ました。それも体格の良い者が多かったように思います。時々帰省すると、母が白いご飯を食べさせてくれるんですが、腹いっぱい食べてもすぐに下痢をしてしまう始末。もう体が受け付けない。そんな哀れな状態でした。

私が中学三年のとき、父が炭坑の落盤事故で急死しました。そのときの所長は父と同じ旧熊本工業専門学校出身でした。恩給受給資格が生じるまであと一年か二年足らなかったそうです。あまりにも気の毒と思われたのか、特別見舞金を出してくれました。それが昭和一八年。そのときもらったのが五万円でした。その頃の五万円というのは、とてつもない額でした。

入学試験

当時は、戦争中ですから、男子はみんな兵隊に行かなければなりません。軍国少年に仕立て上げられていた私の憧れは陸士（陸軍士官学校）か海兵（海軍兵学校）でした。しかし、私の体格は基準に満たず受験さえ出来ませんでした。あきらめていたら海軍兵学校予科があり、無理を承知で出願しました。案の定、身長だめ、体重・肺活量だめと三つ駄目があったところで、将校の試験官に呼び出され、「香月君、兵隊になってお国のために尽くそうというのいいが、お国のためになるのは、兵隊ばかりじゃない。君は、別の面でお国のために尽くすようなことを考えてください。」と体裁よく不合格を宣告されました。それでは、医者それも外科医になろうと決め、五高の医進コースにあたる理乙を受験することにしました。もちろん学科試験はありました。当時の生徒はみんな動員されていますから、授業なんか全然受けていません。特に英語は敵国語と云うので私の学校では三年の一学期までは、まともに授業がありました。その後英語の時間は軍事教練に振り替えられていました。全国その

様な状態だったのでしょうか。それで、英語の試験はありませんでした。試験の内容は、物理、化学、数学、国語（現代文、古文）の問題が出題されていたと思います。これで筆記試験は終わり、翌日は大病院で身体検査、三日目は面接と三日間の入試が終了しました。ところが、その直後、陸軍航空士官学校が生徒募集をしていることを知り、調べてみると体格基準がかなり引き下げられ、身長が一五五cm以上となっていましたので、即入試に飛びつき、一次試験に合格。その後、適性検査があることになっていました。ところが、その適性検査の日と福岡県中等学校武道大会が重なってしまいました。剣道の山本先生と、担任の蓑田先生に呼びだされ、私には一三歳下の弟がいたんですが、「君は一人息子同然だし、五高にも合格している。航空士官学校もいいけど、そこはちょっと我慢して、試合に出てはどうか。」と言われ、直方市の鞍手中で行われた県大会に出場、これで軍隊と縁が切れ、五高入学へと運命の舵が切られたのです。

昭和二〇年には、アメリカ軍が鹿児島から宮崎にかけて上陸するという作戦だったそうです。日本軍は海岸線で爆弾を持ってた壺に潜み、上陸用舟艇に突入する作戦だったと後で知りました。海軍予科練の学生は皆その要員だったらしいです。おそらく陸軍も同じだったろうと思います。戦争があと一、二年延びていたら、適性検査欠席者全員が呼び出され、特攻作戦に組み込まれたらと思うます。しかし当時は戦争末期で航空機による特攻攻撃の全盛期でした。それで、航空士官学校合格はもちろんうれしかったけど、出来

れば二〇、いや二四、五才までは生きていたいのだと心ひそかに思っていたことも事実です。それが今、九五歳になりました。そう言った元をたどれば、嘉中の受験に失敗したことに始まります。一年遅れたお陰で、勉強にゆとりが生まれ、剣道に夢中になれ、その剣道のお陰で航空士官学校と縁が切れて五高へ入学できたわけです。当時は、学徒動員発令中で中学生以上の学生は皆動員されています。上級学校の入学を従来通りの四月にすると、銃後の労働力が足りなくなります。それで入学を四月と七月に二回に分けて行っただけです。私は、七月入学組でしたので、六月の終わりに、動員先の寮を出て熊本へとやってきました。

私たちが入試に来た頃、武夫原の国道側沿いに松並木がありました。空襲で数本焼け、後に松くい虫が大発生したときにすべて枯れたそうです。美しい巨大な松並木が今でも目に焼き付いています。

五高入学 終戦前

五高入学のため、七月に五高の正門を潜り受付に行くところに入った先輩が私の顔を見て、すぐに「香月君かね？」と聞かれたんです。「はい。」と答えたら、「じゃ、寮に行きましょう。」と言って、寮に連れていってくれました。どうしてわかったんだろうと思ったら、事前に名前と写真とで調べていたらしいです。びっくりしました。それと、もう一つ、ものすごいバンカラでしたね。私らは、戦争中でもあり丸坊主で、服装もきちんとしていました。だから、五高生みたいなバンカラを見ると、はじめは異様な感じがしました。けれ



五高正門（昭和18年頃）

ど、そのしぐさといい、実に優しく、礼儀正しくてまたびっくりしました。上から来るような威圧感は全くありませんでした。入寮後の話ですが、先輩は、絶対に下級生に、「こうせえ、ああせえ。」と命令はしません。例えば、「こういうときには、こうするよ」というような表現です。全く同等の取り扱いです。掃除でも上級生が率先してやっていました。「掃除をしておけ。」と命令されるようなことはありません。全部自分で黙って掃除をしていました。それを見て私たちも掃除を始めたものです。これが、五高生の最初の印象で、先輩はすごいと思いました。

入学してから間がないころだったと思いますが、私が入っていた一寮で、寮生全部が集まって、森鷗外の短編「高瀬船」を読んで、安楽死の功罪について討論会がありました。そのとき、理乙の授業は大体自然科学が大半で、浅井教授から植物学を習っていたせいもあったのか、理乙は、「安楽死はいかん。」という意見が多かったと思います。寮生は五、六〇人いたと思いますが、同じ意見は、一二、三人で、少数派です。残りは、「安楽死はいい。」という意見でした。

討論が進んでいって、「では、特攻隊も安楽死の一種ではないか。」ということになり、「それなら、特攻隊も悪いのか。」というふうな話が進んでいきました。戦争中でしたが、私らは、「いかん。」と言った以上、「やっぱいいかん。特攻隊はよくない。」という論旨になつてしまったわけです。その時代では、とんでもない論旨でよくも憲兵の踏み込みがなかったものだと思います。五高に官憲が入ってくることはありませんでした。聞くところによると、その頃、師範学校には入ってきていたらしいです。あの戦争中にもかかわらず、いかに五高というキャンパスに自由が厳然と守り抜かれていた証だと思います。

私たちは七月に入学して、夏休みの時期でしたが、ずっと授業があつていました。その授業の中に教練がありました。八月一五日までに、一回か二回ぐらいでしたが、ゲートルはしているけど、靴を履かないで、草履を履いている生徒がいました。中学校では考えられません。配属将校も別に何も言わなかったですね。教練の教官も五高生に一目置いていたんです。「この連中は、ゆくゆくはえらい特別なやつになる。」というような感じですよ。聴くところによれば、他の専門学校と合同演習があると、五高生がいつも先頭を切つて頑張つたそうで、やっぱリーダー格だったらしいです。よそに出て行き、やるべき時はきちんと役目を果たす、それが強烈に印象に残っています。

八月九日、午前の講義が終わり、唐芋だけの昼食を待つ間、習学寮一寮二階の部屋に戻り、半裸状態で賀来隆典、假屋園璋と三人三

様に寛いでいました。その日はカンカン照りの青空でした。突然ピカッと太陽より強い光が走りました。私はとつさに段下の入口のフロアに身を伏せ、五秒十秒と息を殺し次に起こる事態を待ちました。何の変化もありません。やおら頭を持ちもたげて室内を見ると他の二人も部屋の片隅に身を伏せていました。

「今のは原子爆弾じゃないか。」と三人の意見が珍らしく一致しました。と云うのはその三日前広島に投下された「新型爆弾」は「ピカドン」と云われていましたが、投下の翌日、化学の講義で新型爆弾（当時大本営発表ニュース記事での呼び名）とは原子核爆弾でそのメカニズムや驚異的な破壊力の話を聞いた二日後の事だったからです。その日の内に長崎に原爆が投下されたことを知りました。

終戦

八月一五日朝、「寮生は一時になったら講堂に集合せよ。」という



講堂（昭和21年頃）

連絡が入りました。「何のことだろうか。」「えらい重大ニュースだな。」と思いつつも講堂に行つたんです。みんなが集まったところで、校長が終戦の詔勅をその場で読みあげました。確か、玉音放送じゃなかったよな気がします。「自分の間、休校にするから、それぞれ自宅で待機しておきなさい。」ということになり

ました。それで、みんな、三々五々、自宅に帰っていききました。寮を出る前にみんなが集まって、「アメリカの兵隊が来たら、投げ飛ばす。」とか「敵が上陸して来たら戦う」という者もいて、意気軒高な休校入りでした。

戦争が終わったあと、五高の銃器庫から、私たちが、小銃や機関銃を第六師団の銃器庫に運びました。熊本城の今の城彩苑の辺に、赤レンガの銃器庫があつて、そこまで納めに行ったのを覚えています。結構たくさんありました。中学校の三八式歩兵銃に比べたら、実戦に使われそうなりっぱな銃でした。九九式もかなりありました。九九式歩兵銃は短くて軽く、三八式は明治三八年に採用された銃でしょうから、昔の火縄銃と同じ位重かったです。

戦後の物不足時代の学生生活

入学して一年生になったものの、教科書、補助教材、文具等の販売は何もありません。後日、理乙の生徒にドイツ語の辞書が販売されただけです。講義では語学（英語、ドイツ語）系でタイプ打ちのガリ印刷のテキストが配られ、それ以外の講義は教授の講義と板書だけです。従って筆記具が必要になりますが、その鉛筆もまともな物はありません（当時の鉛筆は芯が弱く、すぐに折れて使い物になりません）。今のボールペンもないので、私は父が残した万年筆を使いましたが、インクの出が悪くもたもたしている内に講義を聞き落したり講義について行けず書き漏すことがしばしばでした。更にノートも品薄で、紙質が悪く色黒のザラ紙で消しゴムを使うとす

ぐに破れました。五高を卒業した兄がいる者は兄さんのおさぎりの数学の教科書を持っていて、それは羨ましい限りでした。結局在学中に購入した教科書類は一、二冊だったと思います。洋服も哀れなもので、マントや学生服は、父のトンビや洋服を母が仕立て直してくれたものを着用し靴はズック（スニーカー）もなく私は、下駄と親父の登山靴を履いていたと思います。とにかく食物も何もない時代でした。

教室・成績

私のクラスは一年七組で理乙でした。座席があいうえお順で、賀来隆典、香月正義、假屋園璋と、「カ」のつく者が三人いました。私らの席は玄関側の窓際で屋外がよく見えました。本館の一番東側に、ちよつと出っ張ったところがあるでしょう。一年生のときは一階でしたが、二年生と三年生の理乙はこの教室でした。だから、あそこは特に懐かしいですね。

成績発表は特異で、廊下に全校生徒の成績が貼り出されるんです。赤点は六〇点未満。それが五つか六つあったら落第。四〇点だったら青丸、もつと下だったら、黒丸です。青丸一つは赤丸二つに相当する。黒丸は赤丸三つか四つに相当する。さらに、平均点が六〇点を割ったら、文句なしに落第です。私は低空飛行で、赤丸が一つ消えれば三年に進級出来る瀬戸際に立っていました。そこで目を付けたのが物理です。あと二、三点で合格点に達します。ラグビー仲間立花芳郎が「香月、二人で頼みに行こうか。」と言ってくれたので、

一緒に高橋教授のところに行ったのですが、「もう一年するとね、もつとよく分かるようになりますよ。」と言われ、それはそうだと反対出来ず、遂に「そうですね。」と引き下がり落第、二年生をも一度繰り返すことになりました。

寮生活

先輩の態度もそうだけど、「こうしなさい。」とは絶対言われなかった。何でも自由出来るがその裏には自主性、自律性が絶対に必要だと徹底的に仕込まれていたように思います。寮の経営・管理も全部生徒がやっていたようですし、食糧難がひどかった頃ですが、食堂もちゃんと生徒で管理していました。夜中に寮でストームしても、先生は一切何も言われませんでした。ありがたいことでした。一年生の頃に、試肝会というのがありました。肝試しです。上級生が、夕食後暗くなったころ、ろうそくに火をともして怪談をするわけです。それが、また上手でもうプロ級でした。そのあと、夜中に五高の周り、白草原あたりを回るわけです。だから余計怖かった思いがあります。

とにかく町の方々から、かわいがられましたね。五高生は一目置かれていたんですかね。昔は子飼まで電車が来ていました。線路の上で陸（か）ボートをしていたんです。陸ボートとは、電車の線路の上に縦に並んで座って寮歌を歌いながらボートをこぐ真似をするのです。すると、運転手はあきらめて、運転席のガラス窓を下ろし、終わるまで待っている。今なら道路交通法で大変です。



インターハイ九州予選 福高に勝つ (昭和21年10月12日)

ラグビー部

占領政策の一環で武道は全て禁止となり、剣道も出来なくなりました。そんな折、寮対抗のラグビー大会が企画されました。元気を持て余していたのか、私は寮の同室の賀来と二人で試合に参加しました。それがもとでラグビー部の先輩となる宇野憲治（昭和一八〇二二年理甲）さん達が再三回ってきて、身長一八〇cmの賀来に入室を迫りました。これで彼もついに入室することになり、私も彼のおまけみたいな形で入室しました。柔道をして立花芳郎も武道禁止で一緒に入室し、後に主将を務める同輩となりました。ところで、入室したものの、私は走るの不得手でしたが、とにかく真面目に

毎日練習しました。体格に優れた者は当りが強く、背の高い者はジャンプで高く跳べます。でも、私は誰よりも早く地上のボールを拾え、素早さでは誰にも引けをとりませんでした。ラグビーは色々な人間が集まって、その特長を生かせるポジションがあるのが面白いし、更にすばらしいのは、ラグーマンの精神とも云うべき「One for all, All for one」（一人はみんなのた



五高ラグビー部（昭和22年2月）

めに、みんなは一人のために」と云うスローガンです。これは集団で事を進める際の基本で、戦場であれ、社会生活やグループ活動には欠かせない精神である様な気がします。チームゲームの最たるラグビーは、どんなに優秀な選手を揃えてもこの精神がないと試合には勝てません。勝つために、皆が体を張ってボールを奪いトライ出来そうな選手に

ボールを渡すのです。トライは全員の努力の結晶であって、一人の手柄ではないのです。トライをした本人は勿論喜びますが、俺がしたと言う様な自慢はしません。川原正昭（昭和二〇年〜二四年理三）が、いつも言っていました。「なんで、あの食べ物がないときに、一番きついラグビーをしたんだろうか。」と。理屈じゃない何かがあったんでしょうね。この頃、五高に時々出てきて、練習を見てくれたのが、中村和さん（昭和九年〜一四年文甲一）です。

私たちが二年の正月、京都大学の農学部でインターハイがあり、私たちは九州代表で出場しました。試合の前日、東大対京大の定期戦を西宮に見学に行きました。その帰りの電車の中で一

人の紳士から声をかけられました。「五高生ではないか？」はいと答えると、何用かと聞かれたので、試合のことを話すと、「そうか。しっかり頑張れよ。」と五〇〇円を差し出し、激励してくれました。先輩とは実に有り難いものだと思います。

試合は、一回戦の相手が学習院だったんですが、奇しくも同じ白のユニフォームだったんです。これはいかんということで、私たちは先輩がいる京都大学のラグビー部のユニフォームを着ることになりました。ところが、一着足りない。それで私が別色を着ました。目立つわけです。この試合は勝つところだったのですが、最後になって、引つ繰り返されてしまいました。引き上げる途中、学習院の応援をしていた貴婦人が、「その小さいの、頑張ったわね。」と褒めてくれたんですが、からかわれた気がして、何とも言えない思いです。

試合が終わると帰りの切符を買いに京都駅に並びました。長蛇の列に半日以上並び、九州に帰郷する組の十数枚をやつと手に入れて、満員の列車に一二時間立ちっぱなしで帰りました。

その頃、熊本のアーミーとどこかのネービーとアメリカンフットボールの試合が、八景水谷の駐屯地でありました。五高が進駐軍にバスケットの練習場として体育館を開放していたからでしょうか、競技が似ているラグビー部が招待され、内心しめた喜んだものです。きつとエッセン（食べ物）が出、甘い物も食べられるかも期待していました。すると、迎えに来たのがトラックでした。二〇数名が荷台に乗り、普通は入れないキャンプウッドに始めて入りまし



五高ラグビー部（昭和23年2月）

だが、場内の整理整頓された美しさにびっくりしました。やがて試合が始まったんですが、楽団がいるし、応援の派手なこと。特に驚いたのがチアリーダーです。女性が足をはね上げたりするところなんて見たこともなかったので、これは全然文化が違うなど痛感したものです。我々にはポップコーンが配られました。そんなことが記憶に残っています。

昭和二三年の春にキャプテンの立花をはじめ賀来、小野等の同僚が五高を卒業していきました。ドッペった（落第）私は、他よりは一年長くラグビーをやっているという理由で、五高最後のキャプテンになりました。五高で部活動を統括していた団体を龍南会と言いますが、各部活動の予算編成は生徒がするんです。ラグビー部は、実績があつたにもかかわらず、予算が少なく、ユニフォームが四、五着買えるくらいでした。「もっとラグビー部に回せ。」と言ったけど、結局どうにもなりませんでした。その話は別にしても、龍南会の予算編成も、生徒がちゃんと切り盛りしていたということですが、ドッペったため、四年間ラグビーをしたのが縁で、五高ラグビー部



五高ラグビー部のコーナーフラッグ

最後のキャプテンをしたことは光栄の極であります。

これはその当時のコーナーフラッグです。残っているのは一枚だけです。珍しいでしょう。当時ラグビーはラ式蹴球といったんですね。五高ラグビー部のOB会を「東原会」と言います。中村和さんが、熊本県ラグビー協会の第四代会長となられた時、私も事務長として八年近く協会運営に関わりました。今ではワールドカップの国際試合まで誘致できる協会となっています。こうみでくると、戦後のラグビーの草分けは五高ラグビー部にあつたのでしょうか。

戦後のアルバイト

私が昭和二〇年一月五高受験で訪れた熊本市の電車賃は四銭でした。円ではなく銭が通用した時代です。翌二一年末の物価は、父が亡くなった昭和一八年当時の二五〇〇〜三〇〇〇倍に高騰していたと思います。この猛烈なインフレを抑制するための預金封鎖と新円切り替えの政策で我が家にあつた七〜八万円の貯えも一年半で完全に吹っ飛んでしまいました。五高では二年生になると寮生活から下宿生活になります。値上り続ける下宿代が払えず、ついにクラスメイトの賀来のお父さんが経営されている病院の病室に潜り込み自炊生活、更に色々なアルバイトを始めました。勉強に集中できず、これが崇つて三年へ進級できず落第、二年をやり直す羽目となつてし

まいりました。生活に困っていた母からは学校を辞めてくれと泣きつかれ、それなら担任の浅井先生から勧めていただいた奨学金もらったので就学も考えましたが、借金を極端に嫌う母が厳しく反対し、どうにもならず結局大学受験を断念。しかし石に齧り付いても五高だけは絶対に卒業しようと肝に銘じ本格的な苦学を始めました。

まず最初のアルバイトは魚屋さんです。近くの魚屋で、朝、暗いうちから市場に行きました。時にはトラックに乗って、百貫港に行つて、船が着いたらトラックに魚が入ったトク箱を積み込み、熊本の市場で下ろします。そこで競りが始まって、終わったら、ふぐの皮むきです。氷水の中に手を突っ込んでね。真冬なんか本当につらかった。爪が紫色になっていました。

夏になったら紺屋町の製氷会社に行つて、氷のブロックを大体三本か四本リヤカーに積んでくる。ところが、リヤカーの車輪がタイヤなしの鉄輪で重いです。夏なんか、暑くなるとアスファルトがちよつと溶けます。そうするとさらに重くなるんです。氷を運んで来たら、半分は切つて冷蔵庫に入れます。そして半分は各家庭に配る。昔の冷蔵庫は今みたいな電気じゃなくて、アイスボックスですからね。その氷だけの利益が五、六〇〇円位はあっただろうと思います。その後は魚の販売、魚の配達で仕事が終わるのは夕方でした。そういう仕事をして、私の賃金は一日一〇〇円でしたが精一杯働きました。それで店では大事にしてもらいました。もちろん学校には行っていました。

下宿代が払えず友人の賀来の病院の病室に潜り込んだことは前に

述べましたが、鹿兒島の大口中出身の假屋園と二人で潜り込みました。その病院は五福町にあったのですが、無料で病室を貸していただきました。その假屋園はものすごい勉強家でした。それで「お前は勉強しろ、俺が飯は作つてやるけん。」と自炊にも精を出しました。賀来のご両親からは本当によくしてもらいました。しかしいつまでもこのままではいけないと思い、二、三ヶ月後、自炊でよく野菜を買いに行き、顔なじみになっていた橋本という八百屋さんの屋根裏で下宿を始めました。その奥さんが昔の市場の近所に住んでいたらしくて、豆腐屋を始めようとしていたんです。それで、私は、「どんな仕事でもするから下宿代は勘弁してくれ。」と交渉して、その息子さんと二人、リヤカーで白川まで砂利を取りに行き、土間にコンクリートを打ち、機械ではなく人力で石臼を使って豆腐づくりを始めました。それからの私の生活は、朝三時半起床、七時半まで働き、朝食を掻き込むと、五高まで約四軒、電車賃が無いので、速足で登校、講義を受け放課後はラグビーの練習、夕方帰ると翌日の仕込み作業、八時頃やつと自分の時間となる毎日、夜二時間勉強するのが精一杯でした。一方級友たちの話題は進学先の大学が多くなり、東大だ、やれ九大だ、いや京大だと話が弾みます。それを聞くにつれ、私の心は沈むばかり。その苦しみを癒す方法として活用したのがラグビーでした。とことん肉体を痛めつけ、その苦しさで、心のもやもやを忘れさせていたものです。勉強家の假屋園は、相変わらずふんどし一丁で屋根裏で頑張り、彼が座っていた畳が腐る程でした。

卒業後

母は父が亡くなった後、父の姉がいる旭志村伊荻に疎開していました。私は卒業後直ちに旭志に帰り、豆腐屋を始めました。また、役場の農地委員会の臨時職員として一筆調査をしました。そのころは、食糧難の時代で、米は自由に売り買いできず、政府が買い上げて配給していました。農地の広さによって、市町村の供出量が決まったんです。そこで、明治五、六年頃の田畑の地図と現在の耕地を一筆一筆照合する調査でした。その頃、旭志中学校の英語の先生が結核で倒れたので、校長さんがやってこられ、学校に遊びに来て英語を少し教えてくれないかと頼まれました。五高入試で述べた通り、私たちが英語の授業を受けたのは中学校三年の一学期頃までで、その後は英語の授業は軍事教練に振り替えられました。それで、四修で上級学校に進学して一番苦労したのが英語でした。私も五高に入学できたのはよかったが、一年のとき、和田先生から「君はこれくらい英語がわからんか、帰って炭鉱夫になつたらどうか。」と揶揄され、頭にきて席をけって寮に戻り、一週間講義に参加せず、中学校のリーダーを読み返した苦い経験がありました。でも、当時英語を勉強した人は田舎には見当たりません。それで乞われるまま遊びのつもりで学校に行きました。それから二か月ぐらいたつと、ちょっと面白くなってきました。校長さんから、資格を取り、先生にならないかと勧められました。そこで、教育委員会に免許申請に行ったら、「教科は何がいいですか。何でもいいですよ。」と云われるのです。五高を出ているからということなんです。今

考えたら、数学を取ればよかったんですけど、英語と理科の中学、高校の教員免許の二級、それと、小学校の仮免許をくれました。だから、今考えてみたら、免許の出し方は新制大学卒と同じでした。更に教員採用試験も受けました。村長さんは就職が決まるまで、役場におれば良いと云われましたが好意を謝し、役場務めは辞めました。四月に採用されたのは戦争未亡人だったようです。私は六月に採用され、晴れて英語の教員になりました。もともと英語が苦手だったので、逆に英語に弱い生徒をどう指導したらいいかわかっていました。又、教育実習もしていないし、しがらみもないので型破りなことができました。例えば、米国のフリーズ博士提唱のオーラルアプローチを英語の授業に活用してみました。（この教授法とは、子供が言葉を覚える過程―赤子は母親の発する言葉を先ず聞く、次に真似をして意味が分かると口を使って意思を伝える。やがて小学校で初めて目を使って文字を読み、次に手を使って文章を書くようになる。つまり耳、口、目、手の順序で言語を自由に操れる様になる―）というものです。

英語教育では入門期が一番大切で、教科書は使わず、絵を使って単語を数多く覚えさせ、次いで色々なパターンを教え、二学期に初めて教科書を開くといった具合です。生徒は文が読めれば意味は分かるのですから、その先は楽なものでした。また、「好きこそ物の上手なれ」と云う諺があるように、英語も好きになれば成績も上がります。一年生は皆んな英語に興味があります。オーラルアプローチで、先ず聞くことから始めれば皆んな無理なく授業について来ます。

更に英語を好きになる対策として英語の歌が非常に有効であることに気付きました。昭和三四年頃広島で行われた西日本英語研究会で「興味関心と英語の学力」という研究発表をしましたが、その中で「英語を好きにさせる方法の一つに英語の歌が有効だ。」と力説しました。その会に講師として、文部省から宍戸良平先生が出席されていましたが、翌年の英語の教科書の表紙裏には、英語の歌が載るようになったようです。また、運動会では、騎馬戦にラグビーとバスケットを組み合わせたチャンピオンゲームを創案したりと、生徒と一緒になり存分に学校生活を楽しみました。私のような若造のすることを広い心で許してくれた校長先生や同勤の先生方には感謝の他はありません。その初任の旭志中学校に一年、隈府中学校に二年勤めました。濟々巒校長の坂本先生から第二高校の教員に推薦して頂き、創立二年目の第二高校へ。第二高校ではラグビー部を立ち上げて、最終的には県の高体連で優勝しました。第二高校に一四年、甲佐高校に七年、そして、最後に多良木高校に校長として赴任しました。退職後、文徳高校に一二年勤め、七二才で退職しました。

五高について

私にとっての五高は、自由と自主・自律の精神をセットにして体に沁み込ませながら、自由に創造的な発想を育くませ、更にバンカラスタイルで人間の虚栄を捨て、真理を追求する気概を助長し、如何なる境遇にあっても五高出身と云う自尊心を与えてくれた学び舎でした。



左、立花芳郎 右、香月正義

若杉 史夫

昭和二二年理科二組入学 昭和二五年卒業

二〇一九年九月一二日聞き取り

戦時

大分中学校卒業です。終戦時は中学四年生でした。中学三年生の時から学徒動員に行きました。動員先は、大分の第一二海軍航空廠です。授業はなくて、みんな朝から晩まで工場で働きました。一般の工員の初歩の作業を手伝いました。そういう工員たちがみんな戦争に兵隊で引つ張られて行くんです。それで、我々が主体で戦闘機を修理して、整備して、前線に送るということをやっていました。昭和二〇年の空襲で私が働いている工場も爆撃されました。外に出たら工場が全部やられてしましてね。たまたま低い山の付近にあったんで、山にトンネルを掘って、トンネル工場を造って、トンネルの中で仕事をしました。空襲で死んだ人もいます。

中学校の同級には幼年学校（陸軍幼年学校）、予科練（海軍飛行予科練習生）に行った人もいます。幼年学校は少なかったですが、予科練は多かったです。予科練へは、中学校から何十人と引つ張られていくようなときでしたからね。戦争中のことを考えると、ほんとにね、何のためにあんなことをしたんだろうと思えますけど、戦災で死ななかつただけ、ありがたいと思っています。

五高入学

大分中学校は、大分県では一番中心の中学校でした。大分県全域から受けられましたから、県下の田舎からでも、優秀な人たちが集まってくるような学校でした。大分師範学校附属小学校や、中心部の知識階級の子弟が多い小学校からは大体半分ぐらいが来ていました。私が行っていたのは南大分小学校で、大分市のちよつと外れの、市内でも農村地帯にありました。だから、そもそも大分中学校を受けるのが、男子一〇〇人中一〇人ぐらいでした。それから入学できたのが半分ぐらいです。難関でした。

一学年は三〇〇人で、旧制高校には全部で二〇人ぐらい進学しました。当時は、一高が一番優秀だったんですけど、入学したのは二、三年に一人でした。我々の学年の時は誰も一高を受けませんでした。当時東京に行っても食料もなかったからですね。五高には、成績上位の七、八人が行くんです。他の中学、臼杵や佐伯は大体二人か三人でした。だから、大分県で将来東大に行こうと思ったら、まず大分中学に入って、それから五高に行けと言われていました。みんなナンバースクールに行きたかったんですね。土地の名前がついた佐賀や福岡、高知とかは、ナンバースクールより格が下だったんです。そういう感覚はありました。旧制高校の次は熊本工業専門学校とか大分経済専門学校とか、専門学校です。旧制の高等学校や専門学校に入るのが一〇〇人弱、あとは大分師範学校に行きました。大分師範学校の二部に行って、中学や女学校の先生になるんです。師範学校は月謝も安いし、しかもほとんど間違いなく郷里で就職できる。

当時は、官立の学校に落ちたら師範の二部に行く人が多かったのです。それから、中学を出て就職する人も結構いました。当時は、みんな大学に行くような時代ではありませんでしたからね。

我々の頃は終戦直後でしたから、昭和二十一年の時に、陸軍士官学校とか海軍兵学校からの転学者をある程度受け入れなさいいけないんで、ごたごたしたらしいです。入学も、結局一〇月になりました。だから、まともな入学試験は、我々二年からだったんです。といっても、二二年と二三年と、二年で終わりでしたが。

試験の監督は入れ替わり立ち替わりでした。試験問題は、国語と数学が主体じゃなかったかと思います。物理や化学があったかは、よく覚えていません。当時、国語と数学が、理科と文科の中心の教科でした。論述のようなものはありませんでした。試験は一回で、二次試験はなかったと思います。

試験で熊本に来たときは、大分中学校から五高に来て下宿している先輩が帰省していて、空いている所に泊めてくれたんです。そういう人が多かったですね。遠くから縁故もなく来る人は旅館に泊まりましたけど、ごく僅かでした。

私の叔父は生野薫といって、大正元年に五高に入学しているんです。その当時は、中学校からの推薦入学があつて、大きい中学校には二人ぐらいの枠があつたそうです。叔父は、その推薦入学で無試験で入っているんです。けれど、当時、習学寮でチフスが流行っていて、大正二年三月に亡くなりました。親類連中がみんな「残念、残念」と言っていました。だから、私が中学を出る時に「五高を受

ける。」と言ったら、「おまえは試験受けるのか。頭が悪いんだな。」と言われました。私の頃はそういう制度はもうなかったんですけどね。それで、私が入学したとき、親戚がみんな喜びました。

授業 勉学

私にとっては旧制高校イコールドイツ語でした。一年の一学期に



藤井外與教授

ドイツ語文法を学ぶと、二学期から早速シュトルムの『みずうみ（インメンゼー）』を原書で講読する授業がありました。藤井外與さんがドイツ語の先生で、授

業は先生が作ったプリントのテキストでした。そのプリントをもらって、自分で辞書をひいて予習をしていました。当時はどの授業もそうでした。ドイツ語の先生では滝沢尋一さん、田崎篤次郎さんがいました。田崎さんは面白い先生で、個人的に心酔しているような人もいましたね。田中辰二さんから、俳句を中心に日本文学を教わりました。あだ名はエロタツといました。

私たち理甲二組のクラス担任は、毎年替わりました。一年は天野昌久先生、地質学で、二年は藤井先生。藤井先生は東京のお宅にお

じやましたことあります。担任は通信簿のチェックする係のようなものだったと思います。私は特に先生に相談に行ったことはなかったです。当時、先生たちも、自分の家に生徒を呼んで食事でもしながら話を聞くなんでいう、そういう雰囲気ではありませんでしたね。

旧制高校では、ドイツ語を初めて勉強しますから、日常生活でも何でもドイツ語を使いました。落第したというのは、「ドツペッタ」と言いました。「ドツペル」は、「二重になる」、ダブルのことです。要するに二重になるという、落第という意味です。

一年が終わる時に、落第しそうな友達のために、成績の嘆願に行ったことがあります。私は、三、四人の先生のところへ行きました。ドイツ語の先生のところにも行きました。効果はどうか分かりませんが、友達の顔を立てるようなことだったと思います。先生の方も、なにしろ我々が最後で、落第させても後がなくて、卒業できませんから、その辺は、みんな甘くしてくれたんですよ。授業では厳しくても、点をつける方は甘かったですね。それで、みんな卒業しました。

私の印象では、旧制高校とは西欧の文学・哲学・歴史に親しみ広く世界の文明を知る所でした。そのためにいろいろな本を読みました。図書館に通ったり、古本を買ったりしました。旧制高校生がよく読む本がありました。西田幾多郎の『善の研究』は、バイブルでしたね。読むだけで、感想を述べ合ったりはしませんでした。そういうグループもあったようですが、私は理科でしたからね。

学校行事

六〇周年が一年生の時あたりにありました。記念の運動会がありました。あの頃が、もう五高の終わりでした。



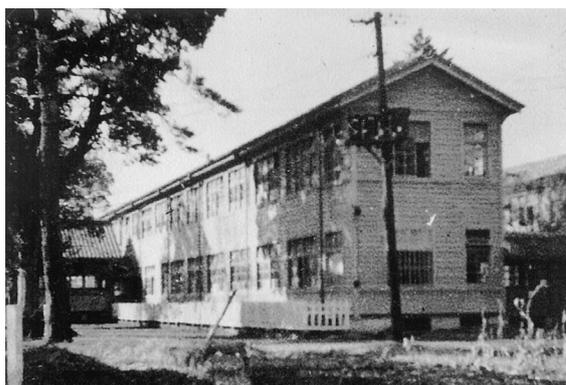
ボートレース理科応援団（昭和22年）

ボートレースの応援団を仕立てて、みんな一緒になつて、大きな太鼓を引いて街中を練り歩いたこともあります。太鼓の上には応援団長が立って、寮歌を歌ったりしました。そういうのが好きな人がいました。私は太鼓の後について歩きました。町の人も一緒に応援してくれました。五高生というと、本当にかわいがってくれました。

習学寮

五高入学後は習学寮に入りました。一年生は原則として全部入寮ですが、地方が優先で、自宅から通える人は通うということで、熊本市内の人は入れませんでした。だから、旧制高校の寮生活に憧れていても寮に入れなくて、残念がっている人が多かったです。プライベートで潜り込んでという人は、あまりいなかったです。市内の人は家から通うということは、徹底していました。食料もないしね。

寮は大体三人部屋で、四寮だけが四人部屋でした。部屋は八畳で



習学寮（昭和21年頃）

した。布団は押し入れに入れて、部屋に出ているのは机と本棚ですが、本棚を持ってくる人は、あんまりいませんでした。本棚といっても、今のようなのじゃなくて、机の上ちょよつと置くだけのものです。

入学式のあとに寮の歓迎会がありまして、惣代が、紙をぱつと広げて歓迎の檄を読んできました。寮の委員はちゃんと決まっています、炊事委員とか、風紀取り締まりの委員などがありました。それは二年、三年がやっているわけです。特に炊事委員が一番幅を利かせていました。食料を握っているというので、多少は役得もあつたようです。一年生の時は、とにかく寮に入れたうれしくて、二年生、三年生の委員の教えを承ってやっていました。当時は電力不足で、そのうえ進駐軍優先でした。進駐軍の泊まっているところには電力をふんだんに供給するけど、一般市内には電力制限がありまして、みんな不便していました。特に習学寮は、夜になると電気つかないんです。七時か八時ぐらいまでは、普通に電気がついていますが、九時、一〇時は、公的な電力供給は終わりにして、本人の勝手にやることだから、自分の照明は自給自足をしろと

いうことですね。廊下も同じでした。それで、二色のちよつと大きなろうそくに火を灯して、それで勉強していました。ろうそくは自分で買ってくるんです。ドイツ語では、例えば住むのをレーベンとか、死ぬのがシュテルベンとか、動詞に「ベン」がつくんです。それで、ろうそくで勉強するのを、ロウベンと言っていたんです。みんなほとんどはロウベンですね。それで、目が悪くなりました。私も、元々目が中学校の頃から少し悪かったので、ますます悪くなりました。

寮の食事にはご飯などはありませんでした。朝がすいとんのみそ汁だけで、昼間は、お皿の上にさつまいもが二切れか三切れ。それだけです。夜になって、初めて少しご飯が出ましたが、配給が僅かでしたから少なかつたです。大きなお皿に薄くのっているだけでした。食べてもすぐお腹がすいて、唐芋を食べに行きました。クラブがあつたんですよ。特に五高専門というわけでもないんでしょうけど。五高生が自分の親戚みたいに行くところでした。あとは、みんな、たまに家に帰って食料を持ってくるわけですね。それで、帰ってくる、「エッセンがあるぞ」と声かけるんです。それで、みんなが「それ」って喜んで食べに行くという。だから、お互いに郷里に帰ると、握り飯だとか、たくさん作って寮に持ってきて、みんなに提供しました。エッセンは、ドイツ語で食料です。五高の校内にあった集会所にはよく行きました。食べるものも、何かあつたと思えます。

寮の行事はなかつたです。戦後は食料難ですから、動くのも大変です。寮の食堂で芋を食べて、二階の自分の部屋まで行くと、もう

お腹すいている。食べるものがないわけですから。私は家への手紙に、お腹がすいて二階の階段は手すりを使わないと上れないというようなことを書いて、出したことがあるんです。そういう状態でした。どこでもみんなそうでした。

それでも、毎晩寮では、元気に寮歌を歌って騒ぎました。お腹すいているけど、そういうエネルギーはあったんです。寮歌指導はほとんど毎晩ありました。五高では、一年ごとに寮歌を、二つか三つ作るんです。それが明治の頃から昭和二〇年頃までずっと続いているから、寮歌集に載っているものだけでも五〇ぐらいあるわけですから、寮歌の他に、部歌がありますね。サッカー部とか野球部とか。そういうのを全部覚えるわけですから、毎晩、寮歌演習があるんですよ。ほとんど覚えました。その上、よその高等学校の寮歌も、多少覚えました。例えば、七高と五高とで、しょっちゅう対抗戦をやっていたんですね。「北辰斜めにさすところ」という七高の寮歌も覚えなないと、敵を迎え撃つために、歓迎の寮歌を歌わないといけないとかね。といっても、覚えたのは、一高と三高と七高ぐらいです。

当時は、みんな弊衣破帽でね。私の帽子も同級生に、はさみでぐちゃぐちゃに破られて、破帽にされました。

寮生活をして、寮歌を覚えて、旧制高校の気風というのか、そういうのになじむというのが楽しかったです。「剛毅木訥」は、寮に掲げてありました。華美なふるまいをしないとね、「剛毅木訥仁に近し」です。

街には出ました。上通には、しょっちゅう。よく有名な喫茶店があったと聞きますけど、いろいろ食べた飲み飲んだりした覚えはないんです。古本屋をのぞくぐらいなことでした。街から五高への帰り道には歌を歌いながら歩いて帰りました。

熊本の街は、元々叔父が五高で縁があったこともあって、昔から親近感を持っていますから、懐かしいです。街の人たちも、五高にあったかい気持ちを持ってくれました。それは先輩のおかげでしょうけど、ありがたいですね。

下宿

二年生になると、今度一年生が入ってくるから、寮を出ないといけないんです。寮の委員をやっている人は残っているけど、あとは原則として下宿しなければなりません。私は、最初、学校の守衛をしている人の家の二階に下宿させてもらいました。守衛さんの家が、黒髪の学校の近くで、割合近いところにありましたね。家は二階家で、二階に二部屋あって、そこに入りました。ご飯は守衛さん夫婦と一緒にみんなで食べるという安い下宿でした。そこに一年間いました。

三年生になって、五高の職員で、外国人教師館に家族で住んでいた牧奈良市さんから「うちに空部屋がある。」と声がかかりました。牧さんは大分の人で、私が五高に入学するというので、紹介してくれた人がいるんです。それで、挨拶に行って、顔なじみになっていました。それで、時々晩ご飯に招待されたりしていました。そこに



外国人教師館外観（昭和12年頃）

は小さい子供がいて、勉強教えたりしていました。そういうことで、外国人教師館に住むことになりました。

外国人教師館は戦争が終わって外国人の先生が帰国されたので、空いていました。官舎ですから、大きくて広いです。天井も高かったです。一棟が二つに分かれていて、半分は小山直之先生、半分は牧さんが住んでいました。一世帯で全部使うのはぜいたくだというんで、二世帯で入っていたんです。小山先生の方はどういうふうになっているか知らないんです。外国人教師館はもう一棟あったと思いますが、そちらの方に行ったことはありません。

この時は、ご飯は寮の方で食べていました。三年生の頃、昭和二四年ぐらいになると多少食料事情も良くなっていて、寮で食べられるようになっていました。

牧さんはその後もずっと熊本に住んでおられました。牧さんの家族と一緒に、阿蘇に旅行に行ったこともあります。平成九年に手紙が来ましてね、そのとき、彼は九〇歳だったんです。「もう九〇に

なるから、余命いくばくもない。」と書いてありました。もう二〇年前になります。今、私が九〇歳ですから早いものです。

進学 就職

当時、東大に入る率は、一高の次が五高だったんです。大体、毎年一〇〇人ぐらい入りました。文科は、クラスの半分が東大に行きました。理科は一割か二割で、私のクラスからも五、六人入りました。高等学校の中では一高、三高、五高という順番ですが、三高からは京都大学への進学が多くて、東大にはあんまり行かないんです。ですから、東大に行くのは、一高の次は五高。そういう順番になっていました。

私は大体、上位の方にいたもんですから、あんまり勉強は苦勞しませんでした。私は元々医者になろうかと思っていたんです。当時、生活難、就職難ですから、医者でもやらなきゃ食べていけない。けれど、理科の三年になって、医者になってもしょうがないなと思って、東大の法学部を受けたんです。五高を卒業していれば、何学部でも受けられたんです。理科から法科を受けることは、誰にも相談しないで自分で決めました。珍しいキャリアなんです。私の一年先輩で東大の法学部に行った松尾浩也さんは理科で、理科の中でもトップだったんです。後に東大の法学部長になりました。

東大を受ける時は、九州から東京まで行く急行は一日に一本しかありませんでした。ですから、特急に乗るために、一晚徹夜で並びました。九州から東京まで二四時間かかりましたから、受けに行く

ときは、握り飯を朝、昼、晩三食分持つていきました。東京でも、食料不足ではありませんでしたが、下宿屋ではご飯は食べさせてもらえませんでした。交通難でもあるし、食料難でもあるし、東大は懂れの的ではあったけど、実際には受けに行くにもなかなか大変でした。

入試科目は、学部によって違いました。法学部は、語学と、政治とか経済とかの論文です。自分で文科の連中が勉強しているような本を買ってきて、全部独学でした。それで、法学部に受かったものですから、文科の連中が、「理科の若杉が法学部に入っているよ。」とみんなびつくりしたらしいです。でも、文科の連中は、半分ぐらいは東大に入りました。元々旧制高校は、文学的、文科的なんですね。例えば語学は、英語でもドイツ語でも、週に五時間とか、ドイツ語なんか一〇時間ぐらいやりました。それから、本も、大体理科も文科も同じものを読んでいます。

私は、大学を卒業してすぐ信越化学に入社しました。当時は小坂順造さんが社長でした。非常に見識が高く、一会社の利益とか、そんなことにこだわらない、天下国家を論じる方で、経済界では有名でした。それで、小坂順造さんの顔を一回見たいものだと思って、会社訪問に行ったら、順造さんはちょうどいなくて、当時副社長だった小坂徳三郎さんと話をしました。昭和四〇年代の自民党の若手議員ではトップで、大臣もやったという人です。その人と話をしたらなかなか面白い人で、「じゃあ、この会社を受けてみようか。」と思って、受けて入ったんです。そこで六〇歳で副社長になりました。六七歳までやって、常任顧問になって、それを五年間やりまし

たから、七二歳までこの会社にいたんです。化学業界では、この四、五年、ずっと利益がトップの会社です。化学の先端を行くような分野をやっていて、特に半導体は世界でトップです。

その後は、社会保障関係の審議会で経済界代表の委員をやりました。例えば、年金審議会、医療保険審議会、社会保険審議会です。今は、全国年金受給者団体連合会、社会保険協会の会長をやっています。社会保険協会の会長も、たまたま私の五高の三年先輩が、厚生次官を辞めて会長をやっていたんです。それで頼まれて、先輩に頼まれればしょうがないというんで。その二つは、もう十何年もやっています。

同窓会

卒業は我々の学年が最後です。それで、昭和二五年卒業生の同窓会を龍尾会といいます。私は理科の二組ですが、私のクラスは、家族旅行を二〇年間毎年やっていました。だから、非常に仲がいいんですよ。私は、年金審議会の委員を長くやっていましたから、厚生省の関係の年金会館の宿泊をいつも手配していました。全国に一〇〇か所以上あるんです。そして、水田宗昭君が道順の下見をして、「今度はあそこに行こう。」と、例えば宮崎、鹿児島、熊本と三県回ったり、四国を全部回ったり、そういう旅行を大体二泊三日ぐらいで、二〇年間続けました。それは、みんな奥さんが楽しみにしていました。

横浜で、湘南五高会もやっていました。湘南五高会ではいつも寮



湘南五高会 (2017年11月11日)

歌を一〇曲歌います。「それ北韓の白雪に」、「それ北韓の」、「易水流れ」、「野に歓楽の」、「見よ阿蘇の」、「憧れ湛ふ」、「椿花咲く」、「古城のほどり」。それから、「対七高野球行進歌」、「不知火燃ゆる」、「武夫原頭に」が最後です。メロディーは、頭の中に浮かんで見なくても出てくるんですね。

五高について

物もない不自由な時代でしたが、友達に恵まれました。人間として、生きる道を教わったというかね。物はないけども、精神的には恵まれた時代でした。やっぱり、剛毅木訥ですね。人間性を大事にするというのか、いわゆる出世だとか、そんなことじゃなくて、人間として正しく、自分の信念に基づいてやっていくという考え方がありました。時代によって、そういうのも変わってくるでしょうからね。いい時代に、いい教育を受けたという気はします。それはありがたいと思っています。



武夫原で寮歌を歌う (昭和22年頃)

福山 博隆

昭和二二年理科三組入学 昭和二五年卒業

二〇二三年七月二日 聞き取り

五高入学前

生まれは長崎です。小学校の一年生の夏休みに延岡に引っ越して、家は菓子製造業をしていました。小学校卒業後は、延岡商業学校に入学しました。わりあい成績が良かったものですから、「五高という学校があるけれども、行ったらどうか。」と商業学校の先輩に勧められたんです。でも、「簡単には入れないから、まずは熊本中学校に転校したほうがいい。」ということで、遠縁の叔母が熊本にいたものですから、四年生のときに、熊本中学校の編入試験を受けて、夏休みの後に、熊本中学校の四年生に編入しました。それが昭和一九年、終戦の前年です。でもその時期ですから、中学校では学徒動員で勉強なんてできませんでした。最初の動員は、当時の玉名郡伊倉町の飛行場で、滑走路のための整地作業をやりました。終戦の年は、健軍の三菱航空機製作所に行きました。ここでは、「飛龍」という飛行機が作られていて、私たちの作業は飛行機の内装でした。内装は飛ぶのには関係なかったからでしょうね。三月には、健軍も空襲にあって工場が焼けました。それから後は、勤労動員もうやむやになりました。卒業したのは二〇年の三月ですが、卒業式はなかったです。卒業証書をもったのもずっと後でした。終戦前の教育は軍隊教育

に裏打ちされたもので、生徒の自主性や自己のオリジナリティに基づいて行動することは否定されていました。教えられたこと以上は習う必要はない、ただし、教えられた事は、一字一句覚えなければならぬという世界でした。

昭和二〇年八月一五日には、大都会のみならず、熊本も大分も鹿児島も、私が育った延岡も、一面焼け野原になっていました。玉音放送は、たまたま熊本の焼け残った薬局の店先で、通りがかりの数人と一緒に聞きました。その中には、長崎で原爆にあつて、背中一面が赤く焼けただれて、阿蘇の温泉に行くという人がいました。背中には蠅が群がっていました。

その頃の私といえば、七月二日の熊本空襲で、下宿先が焼け出され、戻った延岡の実家も、六月二九日の空襲ですでに焼けていました。最悪なのは、当時延岡に住んでいた家族九人のうち、祖母と弟妹三人が焼夷弾の直撃で焼死していたことです。家族もみんな苦しんでいたんです。

延岡に戻った後は、空襲ですべてを失ってやや心を病んだ父を手伝って、高鍋で旧軍の隠匿物資のおこぼれをさばくという、いわゆる闇商売をやっていました。このままでは仕方がないので、秋頃から五高を目指して勉強を始めました。中学校では、学徒動員で授業は殆どなかったから、中学校の教科の消化は参考書頼りの独学でした。二〇年三月の五高の入試は、内申書のみによる選考でしたので、私のような田舎の商業学校からの転校生は、門前払い同然でした。

二一年三月の入試は、僥倖にも一次試験に通りました。二次試験

の面接で心理学の竹原教授から「君は成績がわるいが、どうする？」と聞かれました。オポチュニストの私は、これを「五高には通してやるが、入ったら勉強しないとだめだ。」と解したので「一所懸命勉強します。」と答えましたが、結果は不合格でした。今思うと、窮状を話して再チャレンジは難しいと答えていたら、通して貰えたのかもしれない。

この一次試験に通らなければ、明治専門学校（現、九州工業大学）に行こうと思っていました。この時、たまたま五高の一次に通っていたから、じゃあ、もう一回受けてみようかということで、それから一年、闇商売の合間に勉強して、二二年の入試に合格しました。このときの入学試験は、一次が筆記試験で、二次は口頭試問と面接でした。入学したクラスは理科三組でした。

アルバイト

入学しても学費も生活費もない。最初の入学金と当座の寮費は、父が高利貸しから調達してくれましたが、家からは全然送金がありませんから、一番ありがたかったのが奨学金です。私はすぐ育英会の奨学金を申込み、割合はやく、確か六月ごろに千円位の支給を受けることができました。それからは、奨学金とアルバイトだけで学業を続けることができました。アルバイトは学校の掲示板上案内が出ているものもありました。

延岡に帰ってもアルバイトはないので、夏休みも、冬休みも、春休みも、寮に居続けてアルバイトに専念しました。夏は、自転車に

のぼりとボックスを積んでアイスクャンデーを売り、冬と春は、石鹸売りの行商です。当時の石鹸は貴重品なので、怪しげな町工場の製品を安い価格で仕入れ、郊外の川尻近くまで遠出し、戸別訪問をして、洗濯中のおかみさんたちに買ってもらいました。石鹸の質は全然よくなかったですが、そのよくない石鹸もあんまりなかったので、わりあい売れました。売りに行くときは先輩から譲ってもらった五高の帽子をかぶっていたと思います。五高生という街中でも大事にされて、石鹸もちゃんと買ってくれました。

石鹸売りのほか、土木とか何でもやりました。それから、競輪の予想屋というのもありましたね。競輪場の近くで売り場があって、競輪新聞を売るんです。そのときに、買う人が予想も聞くので、こちらも知ったかぶりをして答えたりしていました。

帽子は先輩からもらいましたが、制服は着たことないですね。普段は古い柔道着とかを着ていました。ちゃんとしたものは、すぐ質屋に入れていました。質屋は寮の近くにあつて、よく通っていました。お金があるのは奨学金が出た時だけで、なくなると、上着を質に入れてお金を借りていました。五高の頃は、お金がないことが一番でした。

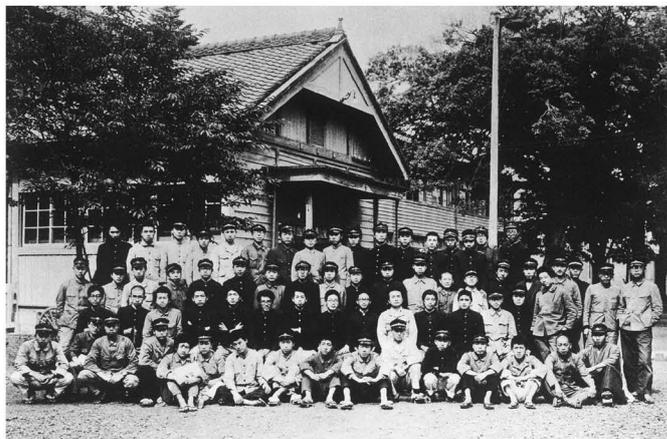
習学寮

習学寮で私は寮史部に所属していました。昭和二三年九月に習学寮が刊行した『統習学寮史』という本がありますが、それを作っていたところです。私たちが入寮する前から編纂が続けられていたも

ので、その時原稿はもうできていました。だから、編集には携わっていません。三年生になったら寮史部の人たちも、自分の試験や勉強が大変だから、去っていくんですね。そうすると、私なんかは寮にずっといましたから、役が回ってくるんです。そのとき、本の制作は最後の段階で、原稿ができ上がったところでの校正と、それを印刷屋に持って行って、最後の取りまとめでした。本の最後のページに、編集後記がありますが、「(部員を代表して福山記)」は私です。(文末に掲載)

その頃の五高の寮を襲っていた一つの嵐は、マルクス主義です。入党している者は多くなかったと思いますが、シンパは寮生の過半数を占めていました。同級生のHは、幼年学校に在学した秀才でしたが、クラスの同人誌に「唯物論的的人生観、世界観」と題して、ユートピアとしての共産社会を目指して、直ちに実践に着手すべきだと語っていました。彼は二年生の時から授業に出なくなり、大学も行きませんでした。私も随分入党の勧誘を受けましたが、五高に入る前に、二年近くの闇商売の経験がある者には、人生がそんなに単純に割り切れるものとは思いませんでした。また、敗戦でせっかく、たなばたで貰った自由を、主義のために放棄するのは嫌でした。

寮歌を教えてもらった記憶があります。それから、飲み会は結構やっていました。安い酒を買ってきては寮の中で飲んでいましたよ。あの頃は、ストームといって飲んで騒ぎましたね。寮歌を歌いながら、廊下とか、寮の中を練り歩きます。その頃、寮には先生も入っていました。だから、先生の棟にストームをかけたっていました



昭和22年習学寮一寮の入寮生(『龍南の青春賦』より)

た。大体三人から五人ぐらいの小さいグループでした。まあ、起こされて迷惑ですよ。

食堂は、朝がおじや、昼は唐芋が二つぐらい、夜だけご飯が出ていました。六人がけの長い机にお櫃が一つ置いてありました。たまたま最初に来た人が、六人分をつぎ分けなければいけません。それにあたるうちよつと嫌ですよ。平等に分け

なくちゃいけないし、自分を多くしちゃいけないだろうしね。おかずはいわしかなんかだったと思います。満腹には全然ならなかったですね。ずっと空腹でした。実家に帰っては、お米やおにぎりをたくさん持ってきていた人もいました。その時は「エッセンがあるぞ。」と声がかかって、みんなで分け合って食べていました。私は、そういう連中から、随分ごちそうになりました。

下宿するとお金がかかりますから、お金がない人は寮にいたと思います。われわれが旧制の最後で、最後の年は下級生がいまいませんでしたから、寮の部屋はゆっくりしていました。

勉学

三年間の寮生活では、寢食を共にする大勢の仲間の刺激で、本を沢山読みました。戦時中の上から儒教的教育の反動で、戦後の若者は、まず自由を満喫していました。五高ではわれわれの身体的、精神的自由を束縛する何者もありませんでした。先生たちとの間も、いい意味で、相互に無関心の関係でした。束縛という教育の本質的一機能を、全く「孤独な個人の読書」に委ねて白紙の中から、自分でこれから生きていく道を探せというものだったと思います。

五高二年の時、太宰治が、玉川上水で情死を遂げるといふ事件がありました。太宰の「斜陽」や「人間失格」は、我々の中で文学好きの者に、繰り返し読まれ、寮の一室で集ってだべる対象でした。太宰には「自分のような者は、生きていて申し訳がない、とかく人生は生きるに値しない、生まれてこなければよかった。」という感慨が貫かれていたと思います。太宰のファンの一人にKがいて、彼は太宰が言う通り、人生は生きるに値しないが、死ぬという踏ん切りもつかないと悩んでいました。彼には独特の風格と話しぶりがあって、彼の部屋には心酔者が集まっていました。その一人は我々が卒業した翌年自殺しました。K本人については、卒業後大学に入っただとは聞いていないし、また、その他の何の消息も聞いていません。私といえばアルバイトに追われていた事と、家族のためにも東大に入るための勉強を放棄できなかったもので、人生の深淵に嵌めることは踏みとどまっていました。

二年生の頃に、隣の部屋の人が自殺しました。同室の二人は気が

つかないで授業に出ているんです。昼ぐらいに部屋に戻ったら、「青酸ガスがたまるから窓を開けておけ。」と、本人が書き残してしました。青酸カリを飲んだんですね。飲むと後でガスが出るということなのでしょう。自殺の原因は分からないです。当時は自殺する人も一人や二人じゃなく結構いました。亡くなったあと、お母さんと妹さんが来て悲しむ様子を見て、やっぱり家族が悲しむから、自殺してはいけないと思いました。彼がなにを悩んでいたのかわかりません。人生は意味がないと思ったのかもしれない。

太宰の小説とは対極的なのは、ニーチェの「超人の思想」だと思います。ニーチェは山を下りて、キリストが大衆に垂訓をたれるように、彼の化身であるツアラストラに、次のように語らせています。「精神の三段階の変化について語ろう。どのようにして精神がラクダとなるのか。ラクダが獅子となるのか。そして最後に獅子が幼児になるのかということだ。精神のたくましさは、重いものを、もっと重いものを求める。ラクダは忍耐強くこれに耐える。第二の変化で精神は獅子となる。精神は自由を我が物にして、己の求めた砂漠の支配者になろうとする。獅子の精神は、新しい創造のための自由を手に入れることだ。最後の変化は幼児だ。幼児は無知である、忘却である。そして一つの新しい始まりだ。永劫回帰である。」彼は精神の貴族で、より困難な道を求めてひとり進もうとしている。これを、冬休みで誰もいなくなった寮の一室で読んでみると、精神が高揚してきて、じっとしていられなかったことを覚えています。後々の私の人生で難問に遭遇した時、この言葉を思い出しました。

今の非常につらい生活に比べて、超人という、そういう憧れがあった、これについてもよくだべっていました。

もうひとつ、人生の節目、節目に思い出すのは、スタンダールの「赤と黒」です。主人公のジュリアン・ソレルは貧しい鍛冶屋の三男です。千八百年代のフランスの身分社会では、平民が上流階級に潜り込むには、軍人か司祭の道しかありませんでした。彼は学問も才能もあって大司祭を目指して努力しますが、家庭教師として住み込んだ上流家庭の令夫人に懸想の果て、刃傷事件を起して死刑となります。スタンダールの心理描写は一流で、ソレルが貧しい生まれという事と身分の差について並々ならぬコンプレクスを抱いていたこと、それを覆う異常に高い自尊心を、まさか想像していませんでした。愛する夫人に傷つけられて凶行に及んだと読めます。私にとっても、コンプレクスと自尊心の相克、それをバネとして、戦災でダメージを受けた家族を含めて、一応人並みの生活に這い上がるうと四苦八苦した際に、「赤と黒」には身につまされる思いがありました。

授業では、国文学の田中辰二先生の授業は面白かったですね。「エロ辰、エロ辰」言っていました。英語では、一年生の最初が、アラン・ポーの『黒猫』、『アッシャー家の没落』、それを訳していきました。英語の授業は程度が高かったです。担任は一年の時は数学の先生でした。

私たちは旧制高校最後の学年で絶対落第できないから、みんな必死です。特に語学はハードでした。僕らの二年前は、戦争の関係で推薦入学のせいか随分落第が多かったです。推薦入学で来ているの

は、どんどん落第する。私は、わりあいこつこつ勉強する方だから、あんまり落第の目に遭うとかいうようなことはなかったです。

大学



九州大学時代の福山氏

五高の理科を二五年三月に卒業しましたが、目標とした東大応用化学に入れず、九大の機械工学に入りました。その年の六月に朝鮮戦争が勃発し、博多湾の北岸の雁の巣飛行場から、米軍輸送機が昼夜を分けず、戦場と往来するようになっていました。

この米軍基地は、九大の箱崎から近いところにあり、仕事が山のようでありました。働く人は、間接雇用といって、政府が一旦間に入って雇用するんです。だから公務員と一緒にですね。学生の身分を隠して、職業安定所で志願しました。仕事は、通訳、経理クランク、建築のドラフトマン等をやりました。

基地には、テントが幾つかあって、そこにパイロットが大体六人ぐらい入っていました。もちろんアメリカ人です。三交代でしたから、飛行する時間が来たらパイロットを起すんです。それが通訳の主な仕事でした。だから、私の仕事も三交代だったんです。ちょっと都合が悪いときは、知り合いに代わってもらいました。基地の事務所に勤務していて、他の時間は何にもすることないから、アメリカ人と話をしてるだけでした。だから、ものすごく割がいいアルバ

イトですよ。通訳の夜勤明けに、連続して野戦用テント宿舎の清掃ボーイの仕事もしていて、ともかく寝る時間を惜しんで仕事をこなして、実家に仕送りをしていました。職業に貴賤はないと日本では言いますが、欧米ではそうではないとアメリカ人が忠告するので、ボーイは一月でやめました。結局、工学部の授業は半年ほどしか出席せず、翌年四月に新製の経済学部に入学しました。元々、本をたくさん読んでいたから、どっちかといえば、興味・関心は文系の方にありました。

経済学部は、誰かが授業のときにレポートを取ってガリ版で刷ったのを売ってるんです。それを買って試験だけ受ける。出席を取ることにはなかったからです。かなり有名な先生はいました。五高の先輩の向坂逸郎とか、マルクス経済学の高橋正雄とか。だけど、彼等の授業というのは、ほとんど世間話なんです。先生たちが、「どうせ九大生だから、あんまり勉強するやついなだろう。」ぐらいのことだったんでしょう。あんまり勉強しなかったですね。やっぱりアルバイトの方が忙しかった。

二八年七月の停戦まで三年間、基地従業員として半年働き、次の半年は失業保険をもらって授業に出ることの繰り返しでした。

二九年三月に大学を卒業しました。この間、基地で生の英語を身につけたことが、のちの人生で英語に係わる仕事をするのを運命づけたと思います。

就職

大学を卒業した時は、同い年の人よりも四年遅れていたんです。高校入るのに二年、学校の制度が旧制から新制に変わって二年。卒業してから八五歳になるまで五九年間、最後の自営業として公認会計士事務所の運営を含めて、四つの職場を経験しました。一つの職場での経験年数は、最短一〇年、最長一七年です。同じことをやっていると、退屈する。新しい仕事をやりたくなる。その点、私は極めて運が良かった。また、それぞれの職場では極めて恵まれた経験を重ねるとともに、人生の師と敬う人や、外国人を含めて、生涯の友人にも出会いました。その経験と人脈が次の職場で役立ちました。

最初は国家公務員試験に受かって、国税庁に採用されました。最初、三か月ぐらいが東京です。それから、初めの二年間は名古屋の税務署で、次の四年間は熊本の本国税務局です。それから、東京の国税庁の本庁に移りました。ここでの貴重な経験は旧大蔵省主計局で、非居住者と外国人に対する抜本的税制改正のための法文作成に参加したこと。そのあとでアジアとアフリカの数ヶ国の税制調査のため、三ヶ月間の出張を命じられ、帰途にはヨーロッパの主要都市を訪れる機会に恵まれました。アジア経済研究所の委託調査です。エジプトのカイロに一月、南アフリカに一〇日ぐらい、あと、マレーシアとシンガポール。帰ってから、収集した資料を基にして出版物を作りました。

次の職場は米国のメージャの石油会社の日本子会社で、オイルショックにぶつかり、急騰した原油の価格と為替の変動を、いかに

関連会社の日本の製品価格に反映させるかなど主に企画の仕事に携わりました。そのあとで、一年間のニューヨーク勤務を命じられ、家族同伴でアメリカンライフを楽しみました。

三番目の職場は大手の監査法人で、丁度バブルの真つ盛りの時、国際税務の責任者として、海外がらみの企業の買収、合併の案件に携わりました。最後に独立して、公認会計士事務所を開きました。外国の税務専門の弁護士と組んで、国と国とをまだがる税務案件を処理するため、相手国の課税当局と交渉するのが仕事でした。仕事は八四才まで続けましたが、部下の方から、年金も入るしやめようというのでやめました。

自然科学の分野では、日本は欧米に追いついたと思いますが、社会科学の分野では、まだまだ差が大きい。私の専門とする税の理論やプラクティスでは、アングロサクソンのそれは遥かに進んでいます。彼らの税法は、もちろん成文法ですが、もともと、コモンローの国ですから、成文法の規定が、現在の経済の実態に照らして合理的でないと思えば、納税者は積極的に提訴し、裁判官も新ルールを作るのに躊躇しません。彼らの社会は極めてオープンで、新ルールの作成の際には、多くの専門家や利害関係者が意見を述べ、それが記録に残ります。日本では、いったん法律となったものは、経済の実態にそぐわなくとも、役所は無理やり法律の字句通りに押し通そうとしますし、裁判所も、ほとんど、新しいルールは作りません。日本の税法は、権威主義で、いたずらに難しく書いてあるので、弁護士からも敬遠されていますし、税法の改正についても、法案が難解の

ため、大勢の人がオープンに討議するのに適しません。私の余生は、日本の税の世界を、いくらかでも、アングロサクソン流のものに、すなわち、形式よりも個々の経済的実質を重んじ、税法を、大勢の人のオープンな討議の対象にできるものにする、という夢をいくらかでも実現することです。

五高で得たもの

五高時代は貧乏でしたけど、町中で五高生は、かわいがってもらいました。その後、社会に出ても、五高を卒業していると言うと、一応、尊敬してくれました。五高だと一目置かれました。それは、どこの職場でも同じでした。

最後に、五高から得たものは何かといえば、「何についても貪欲な好奇心を持ち、かつ、心の中に、常に何らかの火を燃やし続けるという心構え」です。私は、人生は好奇心を抱き、それを満足させるためのプロセスだと思えます。うまくいった時の達成感は、それを味わうだけでも生きがいを感じます。

永遠の地平線を求めて。(片桐記)

寮庭の柘榴が今年も亦真紅に色づき始める。

「とうとう、まる一年寮史も發刊が後れてしまった。」とポツンと柘榴の口からつぶやきが漏れる。やうやく完成した寮史を前に、我々の胸に去來する思ひは一入深いものがある。寮史の生みの親片桐氏が卒業した後、部員は若冠二年生のみの池水(委員長)、富岡、河畑、福山の四人となった。原稿は昨年中に早く脱稿したものの、何分尨大な仕事で、多少の印刷所の犠牲を強要するものであるからか、印刷は遅々として進まなかつた。熊本印刷所に原稿を預ける事、五つ月、遂に一日延しの返事に業を煮やし、再び先輩藤井利七氏に御頼みして、田崎町の藤井紙工店に印刷所を變更したのが、彼岸櫻が一輪二輪とほころび始めた春休みの頃であつた。

幸ひ藤井紙工店の方々の理解ある協力に意外に早く進捗し、校正を始めたのが五月それから夏休みの終途續いた。紙工店の方で特に御世話になつた工場長藤田實雄氏、

五高生びいきの河内山さん(原稿が面白いと一人よく力んでゐられた人懐こいをちさん)、よく寮へ校正を持って、はるばる印刷所から一里余の道を來て呉れた、メガネをかけたほつべたの赤い可愛いクナーベ、女の足ではるばる通つて來て戴いた明い感じの店のメツチエン達に心から有難うと御禮を述べたい。

印刷の途中にも困難は思ひがけない時によく起つた。資金難はともすれば寮史を暗に屠らうとする誘惑を生じた。印刷費が定まらず一喜一憂したり、又考へこんで歩いて居ると田崎の踏切で汽車の中の赤や青のケバケバしい色彩がはつと強い印象を投げ掛けて過ぎた時であつた。

併しそれも印刷所の理解で解決出來た。寮の方でも高尾、喜井の二總代には相當心配して頂いた。

七月中には完成の豫定で、六月末より先輩の豫約を受附けたが、時々激励の手紙や寄附には感激したものだつた。向昨夏の寄附者には再び御禮を述べさせて戴く。

六月末より一年委員加藤憲一郎、河津一

哉、橋本豊光の三君が協力して呉れる事となつた。

寮史内容として不備の点が多く、殊に部史の一部の不体裁は史料無かつたとはいへ誠に申譯けない。

寮歌集も一部省略した事を附記せねばならない。

更によりよき寮史の完成を期待し、その一礎材として我々の拙き寮史を習學寮に捧げたい。(部員を代表して福山記)

[457]

矢野 元暎

昭和二二年理科四組入学 昭和二五年卒業

二〇二三年七月一〇日 聞き取り

五高入学前

終戦前

生まれたのは東京です。小石川伝通院という家康の母の菩提寺があります。その前あたりです。小学校一年生のとき、京都の北白川小学校に転校しました。銀閣寺のある校区です。卒業後は京都第一中学校に入学しました。今は洛北高校になっています。

私の父は、東京でタクシー会社をやっていました。京都では製薬会社に勤めていました。戦争になってからは、上海あたりで軍需物質の輸送なんかもやっていたようです。熊本県の山鹿付近にある稲田村にあった鉾山にも少し関係していたらしいです。それで、熊本に縁故はなかったのですが、熊本で果樹園でもしたら、これから先食糧には困らないだろうということで、果樹園を買って一家で引っ越してきました。一種の疎開だったのかもしれませんが。

私は、鹿本中学校の二年生に転入しました。疎開してきた転校生が何人かいました。言葉が違うこともあり、かなりやられました。私は転校に慣れていきますから、少々つるされても何ともなかったですね。転入してから一年も経たないうちに、勤労動員に行かされてあまり授業はありませんでした。三年の後半ぐらいからは、ほとん

ど動員ばかりでした。

最初は、泗水町の花房飛行場という陸軍飛行場で、掩体壕を造るために土方をやりました。掩体壕は、飛行機を空襲から守るための格納庫ですが、ここでは、堤防を造って中へ飛行機を入れるというものでした。周りを囲うだけで屋根はなかったんですが、延焼は防げます。そんな急造りのものでした。毎日、もっこを担いで土を運び、堤防を造りました。夜は隈府町の寺に泊まりました。朝出て、土方をして、また帰ってくる。そういう生活でした。食糧事情は、よくなかったですね。それが大体、昭和一九年あたり、終戦の一年前だったと思います。

昭和二〇年になってからは、福岡県大牟田市の東洋高压工業へ動員に行きました。海軍の爆薬工場だったと聞いています。大牟田にいたのは半年ぐらいでした。そのあいだに終戦になりました。ですから、中学時代の勉強は二年生の後半ぐらいまで、あとは勉強なんかできませんでした。

終戦後

終戦の年は中学校四年生でした。終戦後、全国的にストライキがはやっていました。戦争中の反動のようなもので、要するに、戦争中の教育について、学校の先生をつるし上げるといふ趣旨です。動員の反動もあったと思います。先生が絶対という時代じゃなくなっていたから、スト騒ぎをして困らせてやれというような感じだったんです。時代が変わったということでしょうね。みんながやると言うけど、「ストをやるやつばかりじゃ面白くないから、私は反対

だ。」と言ったら、反対意見は私一人だったんです。それでリンチに遭いました。殴られて口が切れ、ひどいありさまになりました。学校は混乱して、ストライキの首謀者と、反対した私を急遽繰り上げ卒業させたんです。卒業証書をやるから学校から出ていけというわけです。やっぱり学校としては、両方追い出した方が無難ですよ。だから、さっと追い出されちゃった。いいかげんなものです。だから、中学校は五年制なんです、私は四年生で卒業したことになります。

そのとき、勉強もしてないのに厚かましくも五高を受けたんです。中学校ではずっと動員で、語学なんかほとんどやってないものですから、見事に落ちました。そのころ、山鹿に九州大学の応用化学の教授が疎開してこられていました、奥さんが英語に堪能だったんです。その方に英語を習いました。一年後、本来なら卒業する年であつた五年生にあたる年に、再度五高を受け、合格して昭和二二年に入学したわけです。鹿本中からは私の年次では、私を入れて五、六人が合格しました。

五高入学

それで、やっと五高に入りました。クラスは理科四組です。戦後まもなくのことですから、幅広い年令の人が一緒になっていました。生年かというと、大正一五年から昭和六年までいました。私は昭和四年生まれです。経歴も様々でした。年長組には、陸軍士官学校・海軍兵学校を出た人たちが、六人ぐらいいたと思います。昭和四年、



昭和24年2学期末 理科4組

校では語学は立派にやっていました。

これは、四組の第三学年の時の写真です。クラス全員います。本当に年齢が様々です。私は前から二列目の左端です。学生服は着ていません。こんな軍隊服みたいなものを着ていたように思います。その後、山鹿の五高の先輩からマントと帽子を譲ってもらいました。帽子は、大分破けていましたが、そういうものが値打ちがありました。

習学寮・下宿

習学寮には最初の一年間入りました。寮のよかったことは、理科・文科を問わず、いろいろな友達ができたことです。それは大きな財

五年生まれは、大体三分の一が陸軍幼年学校と海軍兵学校予科針尾分校（現在、長崎県佐世保市のハウステンボス）を経由して、中学校に復学して、五年卒業後に入学したという人でした。大体そんな構成でした。年齢差があつてもすぐに仲よくなりました。陸軍士官学校や海軍兵学校は、私たちのように勉強してないのとは違って、特に海軍兵学

産だったと思います。私が入ったのは第二寮でした。同室は理科四組の明石郁生君で、非常に勉強家でした。寮ではストームで騒いでいた記憶があります。寮の行事は大したものはありません。山鹿の実家から食料を持ってきて、みんなで分けて食べたこともあります。それでもアルコールは街中で飲みました。焼酎とか、アルコールを割ったようなお粗末などぶろくのようなものがありました。まだ二〇才になっていませんでしたが、年長組に誘われて出かけていました。たばこも吸っていました。格好つけて、長キセルをわざと背中に差したりしていました。まあ、若気の至りですね。それについて、なにか言われるようなことはなかったです。

そのころ、寮で共産党の人が寮生を勧誘していました。中にはシンパになった人がいて、その人たちが中心になって各部屋を回っていました。私は「何を言ってるのか。」と相手にしませんでした。だけど、成績がよくておとなしい人は、しょっちゅう来られると勉強の邪魔になるでしょう。だから、「入るよ、入るよ。」と言って、早く追い出そうとしていました。それで入党した人は、結局ほとんどすぐ退会したような何かわけの分からない状況でした。だから、そうやって左翼になった人間で、本当に残ったのは何人もいないと思います。

二年生のときには、私の妹が熊本女子大学に入学しましたので、一緒に上通に面した井上家具の二階に下宿しました。そこにまた奇遇がありました。私たちが入ったところは、鳥井若菜という尺八の

先生の稽古場だったところでした。吉田晴風という有名な尺八奏者で作曲家がいます。宮城道雄と親交があった人です。鳥井若菜はその師匠です。名前の若菜は、「若菜」という曲からつけられたそうです。吉田晴風の伝記『吉田晴風の一生』に、明治四〇年ころに五高の仏教青年会主催で東北地方の大飢饉の義援金を募集する救済慈善演奏会を聞いたということが書いてあります。そのときの尺八が鳥井若菜でした。三絃（三味線）は長谷検校、熊本市の慶徳校前電停の近くに稽古場の碑が建っています。熊本市が顕彰行事を今もやっているはずですが、曲は、私も舞台で何回も演奏したことありますけど、「残月」という有名な曲です。たまたま、鳥井若菜の稽古場だったところに、私が代わりに下宿人として入ったということです。私は、終戦後に鹿本中学校を追い出されてから、することがなくて、そのときから尺八を始めました。鳥井さんの派とは、全然関係なくやっていましたが、不思議なご縁です。

それから、文科の稲葉君と、小磯橋のたもと辺で下宿していました。それが、半年ぐらいたったと思いますけど、三年生のときは、また寮に戻りまして、卒業までいました。私は、成績が悪かったものですから、多少勉強も真面目にせにゃいかんというようなこともありましたが、ありません。

街

こんな格好して街を練り歩きましたね。皆して街でのし歩いたんです。私は、前列向かって左から二人目で、羽織袴姿です。練り歩



熊本中央放送局前（昭和23年頃）

くんで、そういう凝った格好していました。私は貧乏だったから、制服はあんまりまともに着てないです。ふだんは軍服のお下がりのようなのを着て、大した格好はしていませんでした。

悪いことに、上

通の通りに面した二階の井上家具に下宿してましたから、下から「おい、矢野、下りてこい。」と、声をかけられることが多くてね。そっちの付き合いの方が忙しかった。あちこち付き合い合われて飲み歩いていました。上通に楽器屋があつて、その横丁を曲がったところに、同級の深川君の親類が旅館やつていまして、深川君もしょっちゅうそこへ来ていました。彼はそんなに飲んで歩かなかつたけど、私はとにかく、飲んで連れ歩く標的にされたみたいでした。酒は強かつたんですね。

映画も洋画をたくさん見に行きました。お金がなくて電車に乗らずに上通まで歩いていきました。

部活動

一年生のときはラグビー部でした。文科一組の高橋悠紀夫君がリーダーをしていました。だけど、そのころは道具があんまりなくてね、スパイクなんかなくて。軍靴で代用したぐらいのお粗末なことしていました。ラグビーのまねごとをしたような感じです。福岡まで遠征して、配炭公園（ラグビーの実業団チーム）の強い連中と試合したけど、ぼろ負けに負けて帰ってきたこともありました。福全然歯が立たなかつたような感じでした。二年生、三年のときはほとんどやっつてないと思います。

先生・勉学

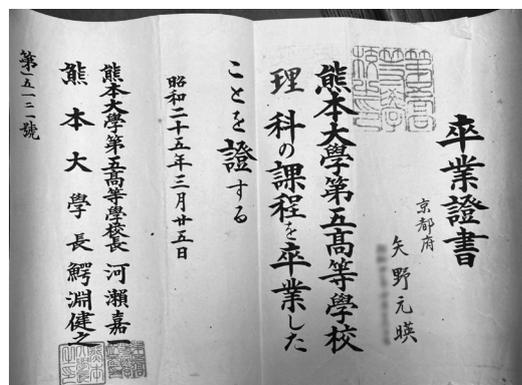
私の理科四組は三年間幸運にも担任の教授「小貫章先生」に恵まれました。小貫先生は優秀な学者であり、多方面に万能な人格者です。私たち生徒に厳しく教えられると共に、ご夫妻で暖かく接して戴きました。

入学して最初の講義の冒頭、小貫先生の訓示に驚きました。「諸君は本日より五高の学生として、すべて一人前の大人として遇する。但し学問に関しては豚の兎以下である。その積りで精進されたい。」頭の中の程度もまだまだ未熟だということをおっしゃりたかったのだと思います。この言葉を受けて、私も理科四組の生徒は「豚兎」となり、先生の人生訓に導かれてきました。先生の書かれたものに、「かわいい豚の子が四〇匹揃っている。」という文章があったらしいです。卒業してから、豚の子の親「豚父（トンプ）」と書いた手紙

をもらった人もいると聞きました。小貫先生は元外国人教師館に住んでいらつしゃいましたが、そこへ四組の連中がしょっちゅう出入りして、奥さんにも大変迷惑かけていました。私たちが卒業してからも、先生が退官されてからも、毎年のように先生のところへ押しかけましたし、東京で会合をしたら、そこへお出でになったりしていました。亡くなるまでずっと四組の連中と交流がありました。

授業で特に印象に残っているのは、エロタツさん、田中辰二先生です。川柳と、俳句もつくられました。それで、俳句つくつたら、「こんなものは俳句じゃない」と言って笑われたりしました。それは非常に印象に残っています。

私はとにかく遊びほうけてたものですから、ドイツ語の作文なんかも、松尾精一先生だったと思いますが、黒丸をたくさんいただきました。非常に不勉強だったんです。それで、昭和二五年になりました。もう学校がなくなるといときに、単位が取れていないわけです。それで追試験を何回も受けました。二月、三月は追試験ばかり受けていました。それで、みんなが心配して先生のところへ「何とか卒業させてくれ。」とかけずり回ってくれたんです。そのことで一番印象に残っているのは、物理の藤田繁一先生です。追試験のまた追試験で、追々試験までしてくれました。小貫さんの数学も悪かったですね。奥さんに加勢してもらいました。「そんなこと言わないで卒業させてやったら。」って言うてくださったそうです。だから、先生が亡くなってからも、奥さんとはずっと手紙のやり取りが続きました。大変迷惑をかけました。



卒業証書（昭和25年）

五高に入ると、クラスの中で本当に頭のいい人がいて、それから見たら、とても私は太刀打ちできないなと思いました。だから、少々は留年したって楽しく暮らせばいいやなんていうぐらゐの感じだったんです。だから、卒業するときは、同級生の皆さんに大変迷惑をかけて、みんなで点数をもらいをお願いに行ってもらったり、最後はばたばたしました。極端に言うと、六年間は五高にいられるなんていって、酒を飲んじゃ騒いで、結局浮かれてたんです。

本当に頭がいい人がクラスで上位何人か。上半分は、頭はそこそこだけど、非常に勉強する、努力する。努力するのが上の条件。で、真ん中はそこそこしてるわけです。私みたいに下の方は、頭も悪けりゃ勉強もしないというグループでした。

そんなことで、何とか卒業はできたんですけど、大学入試は結局、受験できなかったんです。ただ、卒業できるかどうかも分からない。大学の入試の時期に追試ばかりやりますから。卒業するのに手いっぱいでした。

これが私の卒業証書です。本籍は京都府になっています。卒業式はなかったんですが、証書はもらいました。いつもらったのか、覚えてないです

が。私は遅れて最後に出たからそのときもらったのかもしれませんが。日付が三月二五日ですから。第五高等学校長と熊本大学長が併記になっています。これはなかなか卒業証書だと思います。

大学

五高を卒業した後、祖母がいた東京に行きました。そこで、品川にあった米軍極東補給本部の仕事を紹介されました。「でも五高の卒業生といったら駄目だよ。」というので、長崎経専の中途で、英語も堪能じゃないということにして、米軍に入ったんです。旧制高校は毛嫌いされていて、五高卒業としていたら採用されないということだったようです。

朝鮮戦争の真つ最中で、米軍がIBMの電算機を日本へ持ってきていたんですが、米軍の兵士に扱わせるとミスが多くて、結局日本人が主力になっていたんです。ここでは、兵器と油は軍事機密だから日本人にはいじらせないけど、他のものは全部タッチしてもいいということ、補給本部の部署の中を回りました。それで全部知っているからということで、出し入れの帳簿の保管場所、ライブラリーに回されたんです。そこで一年働きました。

そうしてうちに、文部省が、私たちのような白線浪人、要するに高校を出たけど大学に行っていない人ということです。帽子に白線があるから付いた名前ですが、そういう人が全国にいます。白線浪人救済試験というのをやってくれたんです。

それで、私も試験を受けようと思っていました時、米軍の診療所に台

湾人のチンさんという医者がいまして、事情を話したら、「よし分かった。ひげを剃ってくるな。そうしたら、私が神経衰弱という診断書を書いてやるから、それで休んで勉強しろ。」と言ってくれて、そういう妙なところで助けられました。試験は昭和二六年二月頃東京の市ヶ谷でありました。

昭和二六年四月に九州大学工学部土木科に入学したんです。新制大学の第一回生と一緒に講義を受けられることになりました。同じ講義を受けて単位は全部取ったんですが、卒業するときにあって、卒業できないというんです。というのは、新制大学の単位からいうと、一般教養の体育理論、国文が欠けているそうでした。それで、「今から教養学部へ行き直して、卒業するか。」と聞かれましたが、「ばからしい。そんなものやれるわけない。」と断ったら、「それじゃあ、実験室の手伝をして、肉体労働を一年してくれ。そうしたら、そつと送り出してやる。」ということになったわけです。各大学にも同じような人たちがいたそうです。新制の大学院なら、第一回の大学院生にしてやるとも言われましたが、私は学者になるわけじゃないし、断りました。そんなことで、一年遅れの昭和二九年三月に新制の第二回生と一緒に卒業させてくれました。私のような人が各大学各学科にいたようです。そんな入り組んだことで、私の経歴は複雑で説明が非常に難しいんです。

旧制と新制、二つの制度がごっちゃになってる時代で、私の同級生ですんなり旧制大学に入学したのが旧制大学の最後でした。それと並行して新制の一回生がいて講義を受けている、そんな状況でした。

就職

大学卒業後、昭和二九年四月に就職したのは大林組でした。私は、山仕事というか、ダムとかトンネルの部門にいました。国内では北海道以外は沖縄まで、行かなかったところはあります。

面白いのは、社会に出たら、やっぱり他の大学から私のような経歴の人が入社していきまして、五高を卒業しているということで、新制大学出身の人よりは幾らか給料が高かった。何か妙な具合でした。要するに旧制高校だからということで、会社もそういうことにしたんでしょうね。

旧制の九州大学の土木では、水田宗昭君と萩原惟昭君がいました。大林組には萩原君が一年早く入社していました。理科四組で、私と同級生でしたが、彼は海軍兵学校に行っていたので、ちょっと年が上でした。足立力さん（昭和一一年入学、一四年卒業理科甲類一組）が、五高、京大で、土木の副社長をしまして、後に萩原君も土木の副社長になりました。萩原君は、都市土木で、地下鉄とか、都市の関係の仕事をやっていました。

同窓会

卒業後も理科四組の結束は堅く、昭和五一年には、先生を囲んで信州の山荘にて十数名が集まりました。また、理科は一組・二組と、三組・四組と、五組・六組と、合同講座がありましたから、特に三組・四組はお互いに顔見知りで、東京でも三組・四組を主体にした同窓会を何回もやりました。それにたまたま稲葉君とか、文科の人

が参加したこともあります。東京にいる人は多かったですね。五高会を始めとして、寮歌祭などの集りでも「豚尻」の面々に必ず会う事が出来ました。

五高について

一年間でも寮に入ったことで、文科・理科の区別なく多くの友人との交流があり、復員組を含めて年長者とも接することになりました。色々な人生観や考え方を学ぶことが出来ました。又優秀な人、努力家、豊かな天分の人々と交わる事が出来て、自分の能力の限界を認識。自覚することになりました。

五高のときにはすっかり遊ばせてもらったし、それはやっぱり確かに後の役に立ってるんじゃないでしょうか。特に、文科の連中とも付き合いが非常に多かったから、あちこち転動したとき、文科の友達の方も割合ひよんなとこで会ったりしていました。

違う考えの者、いろんな人を見ることが出来る。非常にそれがよかったんじゃないですかね。それから、私は特に小貫先生のクラスだったから、非常に先生と生徒の距離が近かったですね。

私が五高生活で得たものは、良き先生と友人です。

田坂 耕一

昭和二年理科四組入学 昭和二五年卒業
二〇二三年七月一二日 聞き取り

五高入学前 海軍兵学校

生まれは山口県下関市で、中学校は下関中学校です。昭和一八年頃から農家の手伝いなどの勤労働員がありました。関門トンネルにも行きました。その頃は下り線しか開通していなかったから、上り線の線路のところで物を運ぶ作業をやりました。私は中学校二年でした。三年生になる昭和一九年には、本格的に下関の港湾施設の土木作業、工場の作業、鉄道輸送などに分かれて動員されました。貨車の車掌や東洋高圧に行く人もいましたが、私は下関で土木作業をやりました。そのときは、もう授業もありませんでした。

昭和二〇年に開校した海軍兵学校予科は、中学校三年修了から受験できました。海軍兵学校は、それまで中学校四年修了からの受験でしたが、受験資格が一年下がったということです。それでも中には、二年修了で受けた人もいました。そのころ中学校では、勤労働員で勉強ができなくなっていました。体力や学力が落ちている中、できるだけ成績優秀な人を陸軍にとられないよう、早くから入学させようということだったらしいです。陸軍のほうは、中学校一年と中学校二年から受けられた陸軍幼年学校があつて、幼年学校から陸軍予科士官学校、そして本科へという形でした。

海軍兵学校予科には七万人ぐらい応募があつたそうです。まず学校からの成績によって振り分けられて一万人余りになりました。それを昭和一九年一二月の初めから、七班に分けて、それぞれ三日ずつ江田島で、二泊三日で試験がありました。私は、一二月三、四日に受けに行きました。江田島の大講堂で試験があつて、そのあと身体検査がありました。私に、「カイヘイゴウカクイインテウ（海兵合格委員長）」という電報が来たのが二月。この時の合格者は約四、〇〇〇人でした。私の中学校からは七人が入学しました。それが、今はハウステンボスになっている長崎県針尾島の海軍兵学校針尾分校です。江田島本校には上級生がいましたが、針尾分校は我々の学年だけでした。

昭和二〇年の四月三日に入校式がありました。入学した四、〇〇〇人は七つの部に分けられて、各部に第一分隊から第一二分隊、一二個の分隊があつて、全体では八四分隊です。一つの分隊は四八人前後でした。第一部の一分隊は「一〇一（ひとまるひと）」分隊という言い方をしていました。私は五部の八分隊で、「五〇八（ごまるはち）」分隊でした。一分隊に一人伍長がいて、級長に相当しました。そして伍長補が副級長に相当しました。それは成績順に振り分けられていました。海軍にはハンモックナンバーというのがありました。五高での同級生にも伍長だった人がいました。終戦になって、五高に入ってから知ることですけどね。

各分隊には分隊付教官がいて、そういう人たちは大学卒業や高等学校卒業の予備学生や技術士官で、いわゆる学徒で動員された人た

ちでした。中には、歴史学者の直木孝次郎とか、後で有名になる人もいました。その人たちが、それぞれの専門によって、数学や物理、英語などを教えたりするわけです。世間一般では、もう敵性語の英語を使わないようになっていましたが、海軍では英語の授業もありました。海外に行くのが海軍なわけで、言葉はやっぱり大事なんです。

本校だったら最上級生、いわゆる一号生徒の伍長が新入生の面倒を見るわけですが、そういう教官が代わりをしていました。我々は本校と違って、そういうふうな教育されたわけです。分隊付教官の上には、部全体を見る部監事がありました。それを助けるのが、海軍兵学校でも優秀な部付監事別名分隊監事で、皆海軍大尉、実戦の経験のある人たちでした。

針尾島にいるときは、朝六時起床で、午前中は講義があつて、午後から訓練でした。ここでは体育が重要でした。体操は、第一部の部監事で、堀内豊秋大佐が指導されました。デンマーク体操を導入した海軍体操を発明した人です。熊本の濟々巒出身で、メナドの落下傘部隊の部隊長でした。天皇陛下に謁見もされています。我々は、その方にじきじきに教えられたんです。海軍体操や空中転回を指導されました。海軍体操の号令はホップ、スキップ・アンド・スモールホップなどとか、そういうふうな英語です。今でもよく覚えていきます。

水泳は、オリンピック選手が先生でした。自由形（クロール）の遊佐正憲さんと平泳ぎの鶴田義行さんがいました。そういう人たち

を戦地に出さないで、特殊技能を生かす工夫だったんだと思います。そういうようなことで、優秀な教官に恵まれていました。教練も、手旗とかモールス信号とか、そういうのはありましたが、柔剣道はあまりやらなかったですね。教育が主でした。

海軍兵学校の生徒は、下士官の上、准士官の下の身分になります。鶴田さん達は下士官でした。学校内では教官ですが、まだ一五歳そこそこの私たちが身分は上なんです。私は針尾島での外出が一回あつたんですが、そのときも、年上の兵隊さんは我々を見ると避けるんです。敬礼するのが嫌だからだと思えます。私らは、別に敬礼してもらいたくなかったですけどね。本当は恥ずかしいんだけど、食事の時など炊事係の兵隊さんを「烹炊手」などと呼び捨てにしたりもしていました。軍隊では身分をそれではつきりしなくちゃいけないかつたんですね。

あの頃、中学校では動員で勉強ができないのに、海軍兵学校では勉強させてもらつて、三食困ることもありませんでした。一日三合ぐらい食べられたんです。初めは「多いな」と思っていました。そのうちに足りなくなりました。海軍兵学校予科を設置した目的は、優秀な人材を早めに入隊させて、体力と学力をつけることだったんです。

七月の半ばには、アメリカ軍が九州に上陸するかもしれないという状況になって、山口県防府市の海軍通信学校の半分を借りてそこに移りました。針尾島の大村寄りの方に南風崎という駅がありましたが、そこから毎晩第七部から逆順に一つずつ部が発して、七日

間にわたって、全部防府に移りました。そこでの教頭は、キスカ撤退のときの司令官木村昌福少将、いい方でした。防府でも上の学年はいませんでした。我々だけは別だったんです。だから江田島本校にいた七七期の人は、「おまえらは海軍兵学校の生徒じゃない。」というらしいです。上級生がいらないから殴られない。よく世間一般で見られているような海軍兵学校とは、ちよつと違う経験でした。やっぱり人材を守ろうとしたというのがあったのかもしれませんが。

防府では、隣接の飛行場と防府分校が標的になって空襲を受けました。学期試験が終わった八月には生徒館が焼失し、防空壕に逃げることもありました。そのあたりから赤痢が流行って何人か亡くなりました。私は罹らなかつたんですけど、衛生状態は悪くなっていました。

終戦と同時に海軍兵学校は解散になって、みんな帰郷していきました。防府から西の方と九州は、普通の客車で帰ったんですが、東側の人は、貨物の無蓋車で帰ったと聞いています。

一般的には、軍の学校から戻ると、それぞれ自分が前にいた中学校に復学しました。ところが、熊本中学校から陸軍幼年学校に入った人の中には、熊中はいっぱいだから濟々鬢に入ったという人が何人かいました。私の下関中学校の友達も、家が空襲で焼かれて山口市に疎開したんですが、山口中学校はいっぱいだからと、一年落とされて入った人もいます。

私は下関中学校四年に復学しました。中学校四年の一学期までは、海軍にいて、九月に修了し、一〇月に復学した形になるわけです。

二年修了組は三年に復学しましたが、中学校での授業は聞いちゃおれない。そう言っただけでいる人がいました。

入試

下関中学校からは山口高校や福岡高校が近かったんですが、学校の中で優秀な人は一高と三高、その次ぐらいが五高を受けました。あの頃は、旺文社や英語通信社が通信教育をやっていて、テストがありました。答案を送ると、雑誌に個人の名前と成績と希望校が載るんです。お互いにそれを見ながら、励まし合って勉強したようなものです。雑誌に載った名前を覚えていて、五高入学後、知った名前があると、「やっぱり彼も入ったか」と思ったりしました。

私は、中学四年修了で五高を受けたんですが、その時は不合格でした。五年を卒業してからまた受けました。入学試験は、身体検査までは覚えていますが、試験科目はどの教室でどう受けたかはつきり覚えていません。ただ、合格発表を見に行っただけです、あの時は、旧制高校と工業専門学校を二校、合計三校受けられたんです。私は、まず五高を受けて、明治工業専門学校（明専）、今の九州工業大学を受けて、あとは熊本工業専門学校（熊本工専）、今の熊本大学工学部に願書を出しました。最初の明治工業専門学校は合格しましたが、五高の通知が全然来ないんです。熊本工専の試験が迫っていて、とうとう五高まで見に行っただけです。そうしたら、掲示にちゃんと出ていた。だから、明専は辞退して、熊本工専も試験は受けませんでした。

五高入學

私は理科四組でした。同級生は、大正一五年早生まれから昭和六年早生まれまで、五歳の年齢差がありました。一番多かったのは昭和四年～五年生まれでした。

海軍関係の出身者は一三人いました。海軍兵学校予科七八期が九人、七五期が二人、七六期が一人、海軍経理学校予科で奈良にいた人が一人です。陸軍関係は、陸軍幼年学校の広島が三人、熊本が一人、名古屋が一人、合計五人で、陸軍予科士官学校が一人。士官学校の本科の方が二人の合計八人でした。海軍一三人、陸軍八人で二人が四組にいたんです。他のクラスにもいましたが四組が一番多かったです。それと、旅順高等学校から引き揚げてきた人が二人いました。海軍兵学校予科で、私と同じ分隊にいたのは、理科三組の宮嶋晃君、一年下に入ってきた文科の白井淳三郎君でした。

私の中学校からは、中学四年のときに一緒に受けて、合格した中学・海兵で一年先輩の田鍋浩義さんが一年上において、理科三組の島谷昌宏君は中学校では一学年上。同じく理科三組の長谷川公彦君は、下関中学校から昭和二〇年に英才教育のため推薦されて広島高師の付属中学に行つて、五高でまた一緒にになりました。五高ではいろいろな思わぬ人に会いました。

あのころは、いろいろな経歴の人が来ていました。私のクラスでは、旧制中学校だけに在籍していた人は少なかったです。それについて、みんなあんまり気にはしてなかったと思います。中村君は一番長老で大正一五年早生まれで旅順高校からの引き揚げ。津島君

も大正一五年遅生まれで熊本工専を辞めて来ていました。大河原（旧姓宮川）経暢君が六年早生まれだから、五つぐらい年が違います。初めは気にして、年上の人に「さん」をつけていましたが、後で呼び捨てになりました。ずっと旧制中学校だった人との違いを感じたことはないですね。私は軍隊の学校に行った目で見てるから、そこに行かないで入った人がどう見てるかは分かりませんが、そんなに気にしていませんね。

小貫章先生

昭和二二年入學、理科四組の担任が小貫章先生です。三年間続けて担任をして下さいました。担任のほかは微分積分学の講義も担当されました。

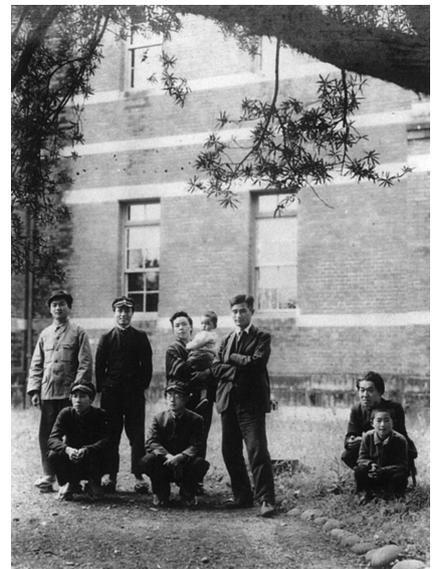
東京府立一中を四年修了で一高理科に進み、東京帝国大学理学部天文学科を卒業された秀才でした。その後、松隈健彦教授（明治四三年理科卒）が東北帝国大学に天文学科を開設する際に助手として仙台へ赴任されました。昭和一六年秋、上海方面での日食観測に従事されている時に辞令が発令され、五高教授として熊本へ赴任されることになりました。そのことは日食観測時に弁当の包み紙の新聞で知ったそうです。その赴任途中に召集令状を受けたため、熊本で赴任の挨拶をされてすぐトンボ返しし、砲兵士官として千葉の砲兵連隊へ入隊されました。その後、すぐマレー・ビルマ（現ミャンマー）戦線へ派遣され、終戦までインパール作戦など激戦地で軍務につかれています。まだ勝ち戦のとき、英軍が逃げた跡の陣地に、

名著である E.T. Whittaker and G.N. Watson 著『A Course Of Modern Analysis』が残されていたので、それを頂戴して陣中携帯し読み漁ったものだと仰っていました。内地への復員は昭和二年のことで、その秋正式に五高教授として着任されました。その翌昭和二年四月に私達のクラスの担任になりました。ビルマでは左腕を負傷され、腕も細くなり、左手指が開かず動かなくなっていました。

小貫先生の授業の微積分学は、旧制中学とは違い格段に高度で、苦労しました。テキストは稲葉三男教授との共著で作成されていたが、刷り版刷りのもので、内容が充実していました。演習問題の解答は、前に出て黒板に書かせると同時に、黒板が足りない時などには机の上や床の上に書かせて指導して下さるほどでした。

また、先生は毒舌家で、「クラスの皆さんは豚の児である。」と言っておられました。「これでも皆さんを尊敬して言っているのだが、……」と笑っておられたのを記憶しています。それ以来、理科四組の者は「我等は、豚児」で、小貫先生は「豚父」だ。豚父を呼んで豚児会をやろう。」と言うほどになりました。

昭和二年の夏休みに山口市で、五高・七高・佐賀高・福岡高・山口高によるインターハイ予選が行われました。下関市に帰省していた私は宇部市に帰省していた同じクラスの藤田嘉和君と二人で野球とバスケットボールの応援に駆け付けました。小貫先生は野球部長兼監督として来られていました。その帰りに、小郡駅（現在の新山口駅）のホームで先生と一緒にになり、いろいろ話をしていたら、



昭和24年3月、小貫先生一家と豚児5名の本館の前で

と答えたら、「それは大変失礼した。」と謝られ、それ以来時々先生はこのときのことを思い出されて「あの時は失礼したな。」と気にしておられました。私の顔を忘れてもらっては困るということ、同じクラスの明石郁生君に連れられて、校内の教授長屋（習学寮の第四寮の東側にあった）の二階に住んでおられた先生のお宅に顔を出すようになりました。

二年生になってからは、下立田近辺に下宿していた同じクラスの中村幹雄君、明石郁生君、桃井斉君、池永達雄君と私の五人で、夜、先生のお宅にお邪魔するようになりました。先生宅では、天文の話、物理や数学の話は勿論のこと、文学・美術・スポーツ・古寺や仏像の話などいろいろな分野にわたってお話をして頂きました。ある夜、奈良興福寺の阿修羅像と東大寺三月堂の日光・月光両菩薩の写真を取り出されて、いろいろ解説して下さいました。私にとっては初めて受けた強烈な文化的ショックで、それ以来古き仏像に憧れをもつ

先生から「ところで君は誰のクラスかね。」と聞かれたんです。驚いて「私は先生のクラスですよ。」

ようになりました。後に、理科四組の者を主体とした同期の仲間数名と一緒に、古寺巡礼の旅をすることになります。

先生のお宅には、貞夫人、二人のお子さんがおられました。度重なる私達の訪問にも嫌な顔をされることはなく、心温かく応対をして下さいました。食糧不足の時代で、先生宅は大変だったと思いますが、いろいろ遣り繰りして食べさせて頂いたり、飲ませて頂きました。入れ替り立ち替り、いろいろなグループが押し掛けたので、先生ご一家は大変だったことと申し訳なく、今でも皆で感謝しています。

こういう中で、先生は昭和二三年六月に東西出版社から、現代物理学大系第八巻として『相対性理論』を出版されました。当時は図書の奥付のところの印税紙に著者の印鑑を捺すことになっていて、その捺印を私達が手伝ったりしました。印税が入ったらご馳走するからとの先生のお言葉で皆楽しみにしていました。一年経たないうちに東西出版社が潰れてしまい、先生も残念だったことと思います。先生が上京されたとき、夜店の古本の中に自著のこの図書が出たので、「こんな本を書くから出版社が潰れるのだ」とけなしながら買ったとき、何冊か購入した。」と笑いながら仰っていたのを覚えています。

先生はスポーツにも優れておられ、五高野球部部长、熊本大学準硬式野球部部长をされ、ご自身はサッカーの熊本県国体代表選手でした。また、囲碁・将棋・麻雀にも強く、絵画はチャータールの会員でした。五高閉校後は、熊本大学理学部教授になられ、昭和四九

年に定年退官されました。その後、岡山理科大学大学院教授になられました。在任中に七六才で急逝されました。

小貫先生は、私達にとっては偉大な先生でした。先生のお人柄とご指導のお蔭で、理科四組の結束力は衰えることなくずっと続きました。

習学寮



島一郎校長の本館食堂の習学寮22年入寮生歓迎会

一年生のときは、

第一寮から第三寮まで一部屋に三名が割り当てられました。

私は一寮に入りました。そのときの一寮物代が是川正顕さんです。同じ部屋になったのは、理科三

組の明善中学校から来た喜多村精一君、理科二組の大分中学校から来た平井俊作君でした。入寮のときに持ってきたのは、布団と自分の筆記具くらいで、あとは現地の古道具屋で買いました。古道具屋は、五高から藤崎宮まで行く裏道にあった記憶があります。マント姿には憧れもありましたので、それだけは、揃えたいとマントと帽子は古着を買いました。服装はみんなバラバラで、私は海軍の略服を着ていました。

習学寮は一年生の一年間が原則ですが、二年生は委員にならないと寮に残ることはできません。実家は経済的に苦しかったので、急遽ホール部員に立候補しました。寮生の選挙の結果、一票差で当選し委員になれて、幸いにも残ることができました。この時のホール部長は田鍋浩義さん（下関中学・海兵で私の一年先輩、元・国立天文台教授）で、仕事は新聞や雑誌類の管理でした。ただ、田鍋さんに任せっきりでした。昭和二三年の『習学寮報』は私が二年のときに出たもので、当時の委員になったメンバーに私が載っています。今でも持っています。



昭和23年習学寮食堂
新入寮生歓迎会
立って向うは惣代
寺井達郎君

生のときは鍛える方で、寮歌をたくさん憶えました。

ストームは、もうしょっちゅうです。昭和二三年の『習学寮報』に寮内弁論大会の記事があるんですが、白井淳三郎君が「ストーム

二年生のときは第二寮に入りました。惣代は寺井達郎さんでした。委員になると一部屋二名になり、昭和二三年に入学した一年生一名と住むことになりました。この時の同室は米田豊君でした。

寮歌演習は夕食後行われました。一年生のときは鍛えられる方でしたが、二年



昭和23年習学寮の委員

に就いて」という題で論じているんです。白井君は海軍で私と同じ分隊で、大分中学校に復学して、昭和二三年に五高に入学しています。ストームをやめるという主旨です。そうしたら、これに対してまた物申すというのが、どこからか出てくるんですね。ストームでは、いろいろ好き勝手していたんで、好きや嫌いはやっぱりあったと思うんですよ。その頃は、習学寮四寮の東側に教授も入っていて、我々は教授長屋と呼んでいました。小貫先生とか、田崎先生とか、いろいろな先生方が住んでいました。そこに、寮生がストームに行ったとき、小貫先生の奥さんから水をかけられたという話もあります。小貫先生は一高で、奥さんもそういうのを若いときから知っていたんですね。寮にいたるとなかなか勉強しないというところで、一二月に下宿に移りました。最初は、同じクラスの小野達一君（小倉中学校、海軍兵学校）の宇留毛の下宿に、その後、同じクラスの明石郁生君と二人で下立田に下宿しました。大家は出田芳さんという、品のいいおばあさんで、台湾から引き揚げた人でした。新制熊本大学ができた

き、工学部の人が一入って、三人で最後まで過ごしました。

電力事情は悪かったですね。度々停電や電圧降下による光度の低下などがあって、試験のときなどは困るので、ローソクを購入してきて、その灯の下で勉強したものです。それで、ローソク送電という言葉ができました。

とにかく食糧事情が悪い時代で、食事はお粗末でした。昼食はテーブルの上に蒸かした唐芋が二つか三つドカッと置かれ、夕食には粟や稗の入ったご飯やお粥状のようなものが多かったような記憶があります。育ち盛りの若者には足りず、腹が減ってしようがないので、メリケン粉を使って雑炊を作ったりしました。歓迎会のときは、まだご馳走があったと思います。下関中学校で一年上だった島谷君が炊事部にいました。実家が寿司屋だったんですが、その料理人を連れてきていました。

ある晩、^レ稲荷ずし^レだと外から寮へ売りにきたことがあり、勇んで買って食べたところ、油揚げの中に入っていたのは^レオカラ^レで、がっかりしたことを覚えています。

五高から子飼橋の横を通って、藤崎宮に出る途中に、エッセンクラブがありました。品のいい老夫婦がやっていました。普通の家の座敷でした。ふかし芋なんかを出していて、そこでお茶が飲めました。もちろんお金は払っていました。みんなで寄っては食べたたり、囲碁や将棋の好きな人は、そこでくつろいだりしていました。他にも侘助という店を覚えています。二年の頃か、三年の頃だったか忘れましたが、お寿司が食べたいと、一度だけ行きました。映画は

しょっちゅう見に行きました。でも、町中ではあまり買いませんでした。お金もあんまりないからね。

当時の交通事情は非常に悪く列車の本数も少なくて、切符の発売枚数も少なかったので、帰省のために、上熊本駅で徹夜して並んで切符を購入していました。

夏休みに帰省したらすっかり勉強しようと、教科書などを柳行李に詰めて、リヤカーを借りて上熊本駅まで運んで、チッキ（鉄道小荷物）にして、帰省先の最寄駅まで送っていましたが、その苦勞の甲斐もなく、あまり勉強したとは言えませんでしたね。

当時の諸費用について、五高入学時から二年生の一二月までに私が付けていた収支表のノートが、実家の机の奥に残っていました、それを分類整理し、平成一二年二月に纏め同級生に披露したことがあります。（文末に掲載）

学校生活

私たちが入学した昭和二二（一九四七）年は、五高の開校六〇周年で、記念行事がありました。記念講演をされたのが、小貫先生のところで話した松隈健彦先生です。小貫先生が講演を松隈先生に依頼されたと思います。

それから、音楽会もありました。国立音楽学校、今の国立音楽大学から木原節子さんが来て、コンサートがありました。後で聞いたら、同じクラスの小野達一君のいとこだそうです。彼もテノールで、よく歌っていました。



仮装行列
個人(故人)主義と全体(膳鯛)主義

記念運動会もありました。私は出るつもりがなかったから、寮に残っていたんですが、牧田耕一君が寮に探しに来て、「仮装行列をやるからおまえ来いよ。」

と引っ張っていかれたんです。仮装行列での、我々のクラスの題は「個人主義と全体主義」でした。「個人主義」の「個人」は亡き人の「故人」。「全体主義」の「全体」はお膳の上に鯛を載せて「膳鯛(ぜんたい)」ともじって仮装しました。私はお坊さんの格好をさせられて、一番前を歩きました。後ろに日高健二君と、荒巻幸治君が亡者に扮して、練り歩きました。

昭和二年だったか、二三年だったか、記憶が曖昧ですが、習字寮の中を一般公開しました。それぞれの部屋でいろいろ趣向を凝らして、飾りつけをしました。女学生も来たことを覚えています。

二年生のときには、野球の五高七高対抗戦が水前寺球場でありました。その日の午前中ですが、私が寮にいたら、七高の連中が赤ふんどし姿でストームをかけてきたんです。その先頭が、私と海軍で同じ分隊だった人で、戦後になって初めて会いました。彼は鹿児島から応援に来ていましてね、偶然でした。その人とはまた、後日談



五高・七高対抗野球戦



街頭ストーム

があるんですよ。東北大の構内を歩いていたら、ばったり会ったんです。七高から東北大の鉱山学科に入学したということでした。そのあとに研究室で松島に行ったとき、松島の五大堂のそばで座って海を眺めていた彼がいて、「ポータ部に入った。」と言っていました。いろいろなつながりがありました。五高七高戦は、それが最後の試合でした。紫谷哲朗さん(昭和二〇年文乙入学、昭和二四年卒業)の犠牲フライで一点入って、一対〇で五高が勝ちました。キャッチャーは、門司中学から来た一年下の木下昭二君でした。町の中に太鼓を持って練り出しました。これは上通の入り口ですね。太鼓の上に立っているのは応援団長の兼川晋君です。

ポータ部では、江津湖にみんなで行って応援しました。

部活動は自動車部でした。自動車部には木炭自動車があって、それに乗せてもらうまで入っていました。武夫原も走りましたよ。一



昭和22年の武夫原

回運転できたところ
で辞めました。
部活動費は収支表
にも書いています。

昭和二四年一月
二十八日に身体検
査が体育館であっ
ていて、午後は授

業がないから、みんな集まって武夫原でソフトボールをしていました。その日は暖かくて、私は半袖でやっていました。三塁側で外野を見ていて、「あいつ、大丈夫かな」と人のことを考えてたんです。そしたら、野球部の男が振ったバットが飛んできて、鼻と左眉のところにぶつかりました。血が噴き出して、人の声はつきりしなくなつて、そのまま昏倒したんです。私は運動部の部室の戸板の上へ乗せられて、五高から子飼橋行く途中にあった外科に担ぎ込まれて、左眉のところを四針縫いました。今も痕が残っています。その晩は、お岩さんのように腫れました。「あの辺（三塁側）に立つちやいけ
ないよ。」と、体育の古川先生から注意されていたのをいいかげんに聞いたからそうなったんです。そのとき一緒に下宿していた明石君がほとんど寝ないで看病してくれました。小貫先生がトンビマン
トを着て、お見舞いに来てくれたことは、ちゃんと覚えています。
一月になると、そのときのことを思い出します。

その二週間あとの二月一〇日ぐらいから期末試験だったんです。

試験は、とにかく一夜漬けでやりました。それがまたおかしいんですが、全科目の平均点が一〇点上がったんです。何か回路がつか
がったような感じで、びっくりしました。そのまま大学を受けたら
大丈夫だろうと思っていたら、その後、熱が毎晩出て、結局大学受
験では東大は不合格でした。

東北大学

昭和二五年卒業時の旧制最後の大学入試に失敗して、その後、藤
沢市の伯母宅に居候して東京でアルバイトをしながら受験勉強をす
るといふ白線浪人生活を送っていました。解答が手に負えなくなつ
た数学の問題が出てくると、小貫先生に手紙を出して教えを乞い、
その度にその解き方をハガキに丁寧に書いて送って下さいました。
昭和二六年にも東京大学を受けたんですが、不合格でした。それ
で、学校の先生になろうと五高から成績証明書をとり寄せたりして
いたんですが、東北大学の物理学科で、白線浪人救済の二次募集が
あったので、願書を出しました。すると、試験の案内が来ないまま
合格通知が来ました。

そこで、慌てて下宿を探したら、私が海軍で同じ分隊だった人が
山形高校から入学していて、しばらくそこにいたんです。それから
大学の学徒援護会の寮に申し込みました。その選考のときに、理学
部長加藤愛雄先生の面接があったんですが、そのとき「君は東大に
は落ちたけど、その成績がよかったからとつたんだ。」と言われま
した。東北大学は、書類選考で合格したんです。そのときは、私と、

浦和高校からと、山形高校から、三人が物理学科に入りました。その二人は、高校の学年が私より上の人たちでした。

小貫先生に報告したら、早速先生から手紙が届いて、仙台には小島融三さん（後記…昭和一九年入学、二三年理乙卒業）が同じ物理学科を出て研究所にいるから、仙台に着いたらすぐ彼に会いに行けとご指示を頂きました。先生は東京で小島さんの子供時代をご存じだったそうです。ビルマから復員されて昭和二二年に五高に復職された時、五高生の小島さんが「先生!!」と行って訪ねてこられたと言っておられました。先生は、五高赴任前に東北大学理学部において、当時の物理学科の教授・助教授の先生方と親しくされていたお蔭で、私も教授・助教授の先生方に「君は小貫先生の教え子か。」と声を掛けられ、温かく指導して頂くことができました。

そうして、物理学科の新制一回生に編入し、高等学校で一年下だった新制一回生と一緒に二年間授業を受けました。一回生が卒業したとき、白線浪人からの編入生は今のところ旧制扱いの予定なので三年間在学せよということで、結局、卒業は二回生と同じ昭和二九年になりました。大学の三年目は単位をほとんど取っていましたから、大学院の講義を聴きに行ったりしていました。

私が仙台に行った昭和二六年秋に、宮城・福島両県で国体が開かれました。熊本大学準硬式野球部が白河市の球場で試合に出るので、野球部長をしておられた小貫先生も来られるということで、仙台からは小島さんと私が、東京からは同じクラスの池永達雄君（後記…当時東大医学部学生）が駆けつけ、先生と一日ご一緒したこともありました。

りました。

昭和二六年四月から昭和三四年三月までの八年間、私は東北大学理学部物理学科学生、東北大学高速力学研究所（現・流体科学研究所）助手として仙台にいました。その時東北大学に五高の若手の先輩がいらっしやっつて、お世話になりました。折々に五高会を開いたものです。

・坂元昌隆さん……昭和一七～一九年理乙、京都大学理学部化学科卒業、東北大学金属材料研究所助手、助教授から日本原子力研究所へ。

・竹下恭爾さん……昭和一九～二二年文甲、東北大学経済学部卒業
ヂーゼル機器（現ボッシュ）（株）へ。

・小島融三さん……昭和一九～二三年理乙、昭和二六年東北大学理学部物理学科卒業。（詳細は後記）

・古川和男さん……昭和一九～二三年理乙、昭和二六年京都大学理学部化学科卒業。（詳細は後記）

・富来哲彦さん……昭和一九～二二年理甲、昭和二五年京都大学理学部物理学科卒業、東北大学理学部物理学科講師、助教授、琉球大学理学部物理学科教授へ。

東北大学高速力学研究所の助手を五年勤めた後、この研究所に引つ張ってくれた物理の同級生がいたカヤバ工業に就職しました。コンクリートミキサの後ろのKYBって書いてあるでしょう、あれがカヤバです。そこで定年まで勤めました。その後、いくつかの専門学校の非常勤講師を務めた後、池永君が侍医長を辞めた後に沼

南リハビリテーション学院の学院長になっていまして、彼から頼まれて、そこで物理と統計学の非常勤講師を一〇年あまり務めました。今は、千葉・柏リハビリテーション学院になっています。

五高卒業生

小島融三先輩 東北大学物理学科を卒業されてすぐ、東北大学科学計測研究所の助手として、フエライトの磁気共鳴吸収^①について研究されていました。その頃特許料が入ると、「飲みに行こう」と市内のおでん屋やバーなどによく私を連れて行って下さったものです。

その後、理学部物理学科に、次いで筑波の高エネルギー物理学研究所（現、高エネルギー加速器研究機構）に移られ、教授として、電子リニアック（Electron Linear Accelerator）^②の開発に従事し、完成させました。後年喉頭がんになり、リニアックによる放射線治療を受けておられましたが、「自分らが開発したリニアックにお世話になるなんて」と苦笑されていたのが印象に残っています。

古川和男先輩 物理学教室に近い金属材料研究所におられたので、時々研究室に伺ったりしました。原子力研究所に移られてから、高速増殖炉のナトリウム冷却の分野を担当されていましたが、私が仙台を離れ、東京の会社に移って間もない頃、古川さんに原子力研究所に移って手伝ってくれないかと強く勧誘され、一度研究所を案内して頂きました。結局私の能力では及ばないとお断りしたことがあります。その後、東海大学開発技術研究所教授を経て、トリウム溶解塩炉の研究に取り組みられました。

特記したい同級生

理科四組の同級生は、小貫先生が三年間続けて担任をして下さったお蔭で結束力が非常に強く、入学以来お互いに励まし合いながら友情を深めています。在学中たびたび一緒に小貫先生のお宅にお邪魔し、特に友情が深かった仲間は以下の四名です。

中村幹雄君 旅順高校出身、五高二学年修了後旅順高校の卒業資格で九大理学部数学科へ進学。熊本大学名誉教授。熊本大学では医学部で統計学などを担当。満洲からの引揚者で、理科四組の最長老。在学中はアルバイトで苦勞していました。お父上の中村英城氏は五高大正四年工科卒業で、親子二代の五高生です。

明石郁生君

小倉中学出身、昭和二六年八月東大在学中に死去。

桃井 斉君

唐津中学出身、九大理学部地質学科へ進学。愛媛大学名誉教授。海兵七八期生。

池永達雄君

東京都立四中出身、東大医学部医学科へ進学。虎の門病院副院長兼消化器外科部長を経て東宮侍医、平成の天皇即位のときから平成一一年三月まで一〇年間侍医長兼皇室医務主管兼宮内庁

病院長。私が浪人して藤沢市の伯母宅に居候しているときに、お父上の職場でのアルバイトの世話をしてくれ、ご両親をはじめご一家の皆さんで、私を家族の一員のように温かく遇して下さいました。私が仙台にいるとき、上京すると必ず自宅に泊めて頂きました。退職してから一〇年間余は、彼が侍医長退官後学院長をしていたリハビリテーション学院の非常勤講師（物理学と基礎統計学の二科目）として私を採用してくれ、私の七〇歳台を充実したものにしてくれ、老化防止に力を貸してくれた本当に有難い友です。医者としても、

親身になってクラスの者たちの相談に乗ってくれ、必要に応じて名医を紹介してくれたりして皆に感謝されていました。小貫先生も、昔テレビで放映されていたベン・ケーシーのような名外科医になるのではないかと期待されていました。

津島敬一君 熊本中学を昭和一九年三月に卒業し、熊本工専に進学。昭和二〇年二年生の夏、学徒動員で長崎の三菱電機の工場にいたとき原爆に遭いました。地下工場にいたお蔭で直接の被曝は免れましたが、その後救助活動で地上に出たため二次被曝し、暫く死線をさまざめたが、幸い何とか快復したとのことです。原爆手帳を持っていました。その後熊本工専を退学し、五高で私達と同じクラスになりました。お父上の津島正敏氏は五高大正八年理科卒業で、中村君と同じく父子二代の五高生で、五高生になれて本当に嬉しかったと言っていました。二年生になるとき文科に転科し、その後昭和二四年修了で九大経済学部経済学科に進学しました。昭和二八年三月卒業とともに住友石炭(株)に就職しましたが、その後石炭産業が斜陽化したため、住友グループの事情で住友商事(株)に移籍し、そこで定年まで勤めました。

津島君が理科から文科に転科するとき、古代の歴史や古寺・仏像などの知識を博く持たなければならぬと、小貫先生が自分の蔵書や美術全集などを持ち出して特訓して下さい、さらに一層勉強するようにと励まされたそうです。後に、津島君が先達となって、古寺巡礼に一年に一回行くようになりました。この巡礼を通じて教えて頂いた知識は何物にも代えがたい貴重な財産となっています。寮歌

を愛し、私が五高担当の実行委員をしていた埼玉寮歌祭には必ず参加して、毎年自作の巻頭言を発声していました。その巻頭言には他高校の出席者も惚れ惚れして聴いていたほどでした。

風発会 理科四組の数名を主体として、理科の他のクラスの者や文科の者若干名が加わり、月一回、いろいろな分野のことを話題にした談論風発会を開催していました。発起人は川崎浩司君(昭和二八年三月東工大建築学科卒業、元・神奈川大学教授)で、自発的に申し出た講師が、予め準備した資料を基にその内容を紹介し、談論風発させていました。メンバーの中に、五高時代からの俳句のオーソリティである久恒 匡君(昭和二八年三月京大工学部化学機械科卒業、元・新日鉄化学社長)がいて、句会で発表している俳句や随筆などを毎月紹介してくれていました。

映画『同窓会』

『同窓会』という映画がありました。主演は俳優の加藤剛さん、七高野球部出身という設定の映画です。愛川欽也さん、宍戸錠さんや和田勉さんが出演しました。演出助手の人から私に電話が来て、撮影に五高の幟を借りたいと言うことでした。それで、東京五高会の樋口俊二さん(昭和一八年〜二〇年文甲)に相談に行つて幟を貸すことになりました。幟を使ったのは五高七高の野球試合のシーンで、立川の市営球場で撮影があつたんです。このときは私が窓口になって、仲間を集めて五高の応援団として出演しました。そのときは、元野球部ピッチャーの稲田俊夫さん(昭和二三年〜一六年文甲)

がピッチャーをやって、紫谷さんがベンチにいて、あとは野球同好会の人々がメンバーで出ました。我々は応援団で、太鼓を借りてきて、稲葉聰君（昭和二二〜二五年文乙）が太鼓をたたいて、津島敬一君が巻頭言をやって、みんなで「武夫原頭に」を歌ったんです。普通の観客のエキストラで来た人は、五高の「武夫原頭に」を「よくそろってますね」なんて言っていました。本物だからですね。そんなこともありました。

五高で得たもの

五高生活は充実した三年間でした。小貫章先生をはじめ素晴らしい先生方のご講義、ご指導を直接戴くことができたこと、また池永達雄君をはじめ、よき生涯の友を得ることができたことは、何物にも代え難い私の貴重な財産となっております。

卒業後、初めてお会いしたのに親身になっていろいろ面倒をみて下さった小島融三先輩ら先輩方に対してと共に、心より厚く感謝している次第です。



本館の武夫原側にあった図書室の前で
中央は小貫先生

五 高 在 学 時 の 諸 費 用

昭和25年 理 卒

田 阪 耕 一

以下は、実家に保管してあった金銭出納帳（記載期間：昭和22年 4月～24年 9月）に基づいて、小生が消費した諸費用を主な費目について分類整理したものである。（作成完了日：平成12年 2月12日）

1. 寮費・食費・下宿代など

年・月・日	費 目	金額 (円)	年・月・日	費 目	金額 (円)
S.22. 4.21	食費及び学寮会費	210. __	S.23. 9.16	食費及び学寮会費	800. __
24	寄宿料及び電灯料	90. __	10. 9	" "	920. __
5. 2	食費及び学寮会費	240. __	10.18	寮費及び電灯料	170. __
6. 3	" "	250. __	11.10	食費及び学寮会費	1,000. __
9.12	" "	420. __	"	寄宿費及び電灯料	195. __
10. 7	" "	520. __	12. 7	食費	860. __
11. 8	" "	500. __		(12月課題のためお返し)	△ 100. __
12. 5	" "	350. __	S.24. 1.19	下宿代	2,000. __
S.23. 1.15	" "	500. __	4.19	"	1,800. __
2. 5	" "	450. __	5.10	"	2,700. __
2. 9	電灯料超過料金	15. __	6.14	"	2,700. __
4.13	食費	600. __	7.11	"	1,100. __
5. 7	"	600. __	9.23	"	2,000. __
6. 5	"	600. __			

2. 授業料・会費など

年・月・日	費 目	金額 (円)	年・月・日	費 目	金額 (円)
S.22. 4.24	授業料 等	325. __	S.23. 2. 4	総務費	10. __
10. 2	授業料・寮費 等	342. __	5.13	総務事務費	15. __
S.23.10.18	第1期授業料及び同窓会費	625. __	5.28	ポートレース費	10. __
11.10	後期分授業料	600. __	"	九高連費	15. __
S.24. 4.26	授業料その他	725. __	6.29	龍南会費	100. __
			10. 7	応援団費	10. __
S.22. 6.10	龍南会費	30. __	10. 9	龍南会費及び記念祭費	130. __
9.22	自動車部費	30. __	10.21	応援団費追加	5. __
9.27	運動会費用	5. __	S.24. 5.25	自治会費	30. __

(注) 昭和23年10月25日、大日本育英会奨学生に採用された。
奨学金は、11月分まで 1,000円/月、12月分より 1,800円/月 が貸与された。

3. 教科書など

年・月・日	費 目	金額 (円)	年・月・日	費 目	金額 (円)
S.22. 4.22	物理学 (上巻)	60. __	S.23. 5.13	Kalkstein	40. __
"	ドイツ語 (読本)	7. __	5.21	Land und Leute	20. __
"	ドイツ語 (文法)	11. __	5.30	Die Drei Gerechten Kammacher	33. __
4.23	微分学	10. __	6. 1	化学実験法	49. <u>50</u>
"	国語プリント代	10. __	6.10	The Origin of Species	15. __
4.25	製図綱要	40. __	6.29	ドイツ語教科書	23. __
4.28	仏語講習料	50. __	"	英語教科書	40. __
5. 1	英語プリント代	30. __	9.14	積分学	55. __
5.10	代数 (選修)	26. __	9.20	仏語講習料	100. __
6. 5	英語教科書	33. __	S.24. 4.11	Die Fermate	40. __
9.25	微分学 (II)	33. __	"	Religion und Naturwissenschaft	35. __
9.29	有機化学	45. __	5.11	微分方程式論 プリント代	60. __
10.14	化学通論	100. __	5.29	Nature and Life	85. __
11.17	倫理学教科書	50. __	5.30	力学問題集 プリント代	35. __
S.23. 1.16	物理学 (下巻)	55. __	9.12	解析幾何学	20. __
"	倫理学の根本問題	40. __	9.28	Naturgenuss und Naturforschung	70. __
3. 3	Gulliver's Travels	38. <u>50</u>			
4.14	Der Runenberg	25. __			
5. 4	平面・球面三角法	275. __			

4. 米・さつまい芋・卵などの価格

年・月・日	費 目	金額 (円)	年・月・日	費 目	金額 (円)
S.22.10.20	米 (1升)	130. __	S.23.11.16	米 (2升)	230. __
S.23. 1.18	" (2升)	280. __	12. 7	" (1升)	130. __
2. 7	" (2升)	280. __	12.15	" (3升)	360. __
4.12	" (1升)	160. __	S.24. 2. 3	" (1升)	100. __
4.22	" (1升)	130. __	S.22. 9.27	さつまい芋 (1貫目)	35. __
5. 3	" (3升)	510. __	10.30	" (6貫目)	150. __
5.20	" (1升)	150. __	S.23. 6.下旬	卵 (1個)	13. ~14. __
6.10	" (1升)	170. __	S.24. 6. -	" (1個)	15. ~16. __

(注) 大部分は、帰省時にリュックに隠して、実家に持ち帰ったもの。(食料不足・統制嚴重の時代)

5. 服装・文房具・その他生活用品など

年・月・日	費 目	金額 (円)	年・月・日	費 目	金額 (円)
S.22. 4.20	帽章 (1個)	5. __	S.22. 4.27	鉛筆 (1ダース)	24. __
"	襟章 (1個)	.50	7.22	ノート (3冊)	51. __
5. 8	下駄 (1足)	22. __	"	単語帳 (2冊)	20. __
5. 9	スリッパ (1足)	17. __	9.24	" (1冊)	7. __
"	側章 (1個)	2.50	10. 5	" (1冊)	8. __
6. 5	麦藁帽 (1個)	60. __	10.28	鉛筆 (1ダース)	36. __
6.30	帽章 (1個)	5. __	11. 9	単語帳 (1冊)	8. __
9.14	バッジ (1個)	11. __	S.23. 1.19	ノート (1冊)	15. __
9.17	バックル (1個)	60. __	6.22	" (1冊)	11. __
S.23. 2. 7	マント (中古1着)	900. __	9.23	" (2冊)	28. __
4.14	襟章 (?個)	7. __	S.22. 5. 9	ローソク (?本)	35. __
6.28	足袋 (1足)	55.50	6. 5	" (?本)	28. __
7. 8	下駄 (1足)	80. __	6.11	電池 (4本)	14. __
10.10	カラー	35. __	7. 6	電池 (2本)	7. __
"	襟章 (2個)	5. __	9.14	炭 (0.8 俵)	95. __
S.24. 6.10	下駄の歯換え	30. __	10.26	ローソク (?本)	35. __
9.10	襟章 (?個)	25. __	S.23. 5. 9	電球 (?個)	35. __
			S.24. 5.21	" (?個)	10. __
			7. 4	ローソク (?本)	40. __

(注) ローソクは、当時の電力事情の悪さのため、電灯の代用として必需品。

6. 汽車賃など

年・月・日	費 目	金額 (円)	年・月・日	費 目	金額 (円)
S. 22. 5. 2	熊本一下関 (片道)	18. __	S. 22.10.19	下関一熊本 (片道)	65. __
5.23	" "	19. __	12.18	熊本一下関 (片道)	* 53. __
6.30	" "	* 15.20	S. 23. 1.10	下関一熊本 (片道)	* 52. __
"	(急行料金)	12. __	"	(チッキ料)	20. __
7. 1	(チッキ料)	6. __	4. 7	下関一熊本 (片道)	* 52. __
9. 8	下関一熊本 (片道)	* 52. __	4. 8	(チッキ料)	20. __
9. 9	(チッキ料)	20. __	4.28	熊本一下関 (往復)	* 108.50
10.13	熊本一下関 (片道)	65. __	5.15	熊本一下関 (片道)	65. __

二、聞き取り 田阪耕一

年・月・日	費用	金額(円)	年・月・日	費用	金額(円)
S. 23. 5.17	下関一熊本(片道)	65. __	S. 24. 1. 6	下関一熊本(片道)	80. __
6.29	熊本一下関(片道)	65. __	"	(チッキ料)	70. __
"	(チッキ料)	20. __	2. 7	熊本一下関(片道)	80. __
9. 9	下関一熊本(片道)	80. __	"	(チッキ料)	70. __
"	(チッキ・配達料)	90. __	4. 6	下関一熊本(片道)	80. __
10.12	熊本一幡生(往復)	160. __	"	(チッキ料)	70. __
11. 3	竜田口一坊中(往復)	70. __	7.10	熊本一下関(片道)	140. __
12.16	熊本一下関(片道)	80. __	"	(チッキ料)	100. __
"	(チッキ料)	70. __			

(注) * は 学割 2割引料金。
S. 23. 9. 9 以降の料金は学割かどうかは、その旨記帳していないので、はっきりしない。

7. 映画、散髪、銭湯、外食などの概略の費用

年・月・日	費目	金額(円)	年・月・日	費目	金額(円)
S. 22. 5.上 ~ 11.下	映画(割引の有無の 両方とロードショ ウを含む)	10. __, 20. __, 35. __	S. 24. 4.28	散髪(整髪)	20. __
S. 22.12.上 ~ 23. 6.下	"	15. __, 20. __, 25. __	6.10	" "	20. __
S. 23. 7.上 ~ 12.下	"	30. __, 40. __, 60. __	7. 4	" "	20. __
S. 24. 1.上 ~ 9.下	"	40. __, 50. __, 100. __	S. 22. 5.上 ~ 6.下	銭湯	1.50 ~ 2. __
S. 23.11. 5	演劇 杉村春子:女の一生	50. __	S. 22. 9.上 ~ 12.中	"	7. __ ~ 8. __
S. 22.12.18	散髪(整髪?)	10. __	S. 23. 1.中 ~ 6.下	"	4. __ ~ 5. __
S. 23. 2.16	" "	9.50	S. 23. 9.中 ~ 24. 9.下	"	6. __ ~ 8. __
4.23	" (整髪)	15. __	S. 22. 9.中 ~ 23.10.上	ふかし芋 (エッセンクラブ が大部分)	10. __ 20. __ 30. __
6.25	" "	15. __	S. 22. 5.上 ~ 23.12.中	うどん	10. __ ~ 20. __
8.22	" " (下関)	30. __	S. 22.10.上 ~ 23. 6.下	団子汁	10. __
12.16	" "	15. __		味噌汁	10. __
S. 24. 2. 4	" "	20. __			
3.21	" " (下関)	50. __			

(注) 映画料金は映画館、作品にも依る。散髪、銭湯などの料金は場所にも依る。外食費は量にも依る。

8. 書籍 (前記3. 教科書などを除く)

年・月・日	費目	金額 (円)	年・月・日	費目	金額 (円)
S. 22. 4.22	権田：独和辞典	40. __	S. 23. 3.24	ゲーテとニーチエを結ぶもの	55. __
"	自修者の独逸語	38. 50	3.25	孤独な散歩者の夢想	77. __
5.11	竹内：函数概論	55. __	4. 3	パスカル幾何学的精神	38. 50
"	：微分方程式論	33. __	"	パスカル瞑想録(下)	110. __
"	：確率論	33. __	4.13	平安物語篇	53. __
5.24	高木：整数論講義	60. __	5. 2	コンサイス佛和辞典	275. __
5.25	：ロシヤ語	30. __	"	積分方程式論	77. __
"	：数と図形	* 50. __	5. 7	高等微分学	120. __
6.18	：ハーフの童話	12. __	5.13	物理学序説	165. __
"	：Heiderdorf	3. 50	6. 1	藤原：微分積分学 第二巻	* 385. __
6.19	有機化学問題集	* 5. __	"	化学実験法	49. 50
7.23	私の人生探求	35. __	6. 8	微分学演習	230. __
8. 2	ショウベンハウエル 論文集	75. __	6.10	立体解析幾何学	41. __
8. 9	パスカル瞑想録(上)	55. __	6.18	物理学演習・上巻	330. __
8.29	相良：独和辞典	125. __	"	楢岡函数論	44. __
12.21	エンゼル心理学	50. __	6.29	物理学演習・下巻	330. __
12.23	樗牛全集	* 70. __	"	力学演習	275. __
S. 23. 1. 2	The current of the world	27. 50	7.11	現代物理学	100. __
"	現代の知的危機	11. __	"	科学と人間性	60. __
1. 3	ゲーテとの対話	104. 50	"	群論	50. __
"	読書論	17. 60	7.13	ホグベン市民の科学 (二)	143. __
"	思想の科学	22. __	7.15	科学朝日	33. __
1.10	行列及び行列式	60. 50	7.16	小貫：相対性理論	187. __
1.16	新無機化学	200. __	7.17	ホグベン市民の科学 (一)	143. __
2.23	弘津：若き哲学徒の 手記	80. __	"	初歩のラヂオ	27. 50
"	佛蘭西語四週間	100. __	7.20	辻：集合論	88. __
3.16	世界大思想全集： ニュートンのプリン シピア	* 80. __	7.29	科学圏	33. __

二、聞き取り 田阪耕一

年・月・日	費 目	金額 (円)	年・月・日	費 目	金額 (円)
S. 23. 8. 1	積分学演習	297. __	S. 24. 1. 24	解析幾何学演習(下)	198. __
8. 27	ホグベン市民の科学 (三)	100. __	1. 31	大学入試案内及び問題集	220. __
"	幾何学の基礎	80. __	2. 18	近世数学史談	* 75. __
8. 28	宇宙	65. __	"	代数学の概念	* 25. __
8. 29	ホグベン市民の科学 (四)	180. __	2. 22	本多：物理学通論	275. __
9. 14	函数論	77. __	3. 23	二十歳のエチュード	100. __
9. 15	高等積分学	100. __	3. 24	物理実験法	90. __
9. 16	微分学	70. __	4. 12	藤原：微分積分学 第一巻	* 500. __
9. 26	哲学概論	143. __	4. 16	：物理学本論	290. __
"	重力	121. __	"	演習解析幾何学	187. __
11. 4	佛蘭西語文典	40. __	5. 1	物理実験30題	* 30. __
11. 20	寮史	250. __	5. 2	理科年表	275. __
11. 22	寺沢：数学概論	385. __	"	ファラデー： 電気学実験研究	* 80. __
11. 26	驢馬電子	* 60. __	6. 17	大学英単語類撰	165. __
12. 1	射影幾何学入門	30. __	7. 11	ドイツ語教科書	80. __
12. 19	近世幾何学	143. __	7. 14	初等微分幾何学	100. __
12. 24	高木：解析概論	550. __	9. 12	解析幾何学	90. __
12. 28	デカルト方法序説	130. __	9. 23	坂井：初等力学	198. __
12. 29	高級英文解釈法	200. __			
S. 24. 1. 2	キェルケゴール： 死に至る病	154. __			

(注) “新本”と“古本”が入り交じっているが、その厳密な区別は現時点では不可能である。
“古本”と断定できるもの、もしくはそうみられるものには、金額の前に[*]印を付した。

毛利 邦郎

昭和二二年理科一組入学 昭和二四年一学年修了
二〇二三年一月七日 聞き取り

五高入学前

私の両親は、父母両方とも熊本出身です。父が東京高等商船学校（現、東京海洋大学）の卒業で、船に乗っていたものですから、港町の神戸に住居を構えていました。それで私は神戸で生まれました。中学校は神戸三中（現、長田高校）です。この地域の小学校で程々の成績の者は、大体、神戸三中に進学したんです。近くには、第三高等学校や姫路高等学校があるんですが、毎年五高への進学者がいるという学校でした。

神戸三中二年のときですが、海軍の宣伝に送り出されて、神戸から広島県呉市の大竹海兵団に行ったことがあります。係留してある軍艦に、一週間ぐらい寝泊まりしました。そのとき、マスト登りがありました。縄ばしごでマストに登っていくんですが、一番上に行く綱が切れるんです。マストに握り手があつて、それにつかまっで見張り台に登る。順々に全員登らなければいけなかった。随分高いんですよ。怖かったです。他にも海軍の一〇mカッターを漕ぎました。いろんな体験をしました。海兵団には特年兵の制度があつて、中学三年生ぐらいの人たちが志願で入っていました。その人たちはもう随分こなされてるわけです。軍隊の中は厳しかったんですね。

私の中学校の時は、軍国主義が華やかかなりし頃で、海軍兵学校に憧れる気持ちがありました。しかし、私は近眼で目が悪かったので、海兵には行けませんでした。陸軍士官学校はまだ受けられたのですが、受けようとは思いませんでした。その頃は、予科練（海軍飛行予科練習生）を受ける人もいました。神戸は港町だから、案外、自由な雰囲気があつたんです。軍の学校を受けることを強制はされませんでした。勤労働員では三菱電機に行きました。

父が軍に徴用された船に乗っていて、昭和一九年九月に船を沈められて亡くなりました。その上、昭和二〇年三月に神戸で大空襲があつたんです。そのときに私の家は全焼しました。父は亡くなる、家は焼けてしまふでね、母は苦労したと思います。たまたま私のすぐ上の兄叔彦が五高に合格していて、熊本に行くことになっていました。それで、「親戚もいるから、何とかなるだろう。」ということで、熊本に行きました。その時、私は神戸三中の三年生で、熊本中学校（現、熊本高校）に転校することになりました。兄が五高に行くというので、やっぱり熊本との縁があつたんでしょう。熊中には、四、五年の二年間いました。

熊本に来てからは、健軍三菱の飛行機工場、一〇一一工場に動員されていきました。授業はほとんどないに等しかったです。住んでいたのは、大江小学校の正門の前あたりです。大江には練兵場があつて、軍隊がたくさんいました。あそこに歩兵や砲兵、通信隊だとか、兵種が全部そろっていたようです。熊本空襲のときは、練兵場に逃げました。そのとき家は焼けませんが、熊中が焼け、戦後は

兵舎で授業を受けることになりました。

神戸から来た私は、関西弁だったので、ごく最初だけですが、ちょっといじめられました。呼び出されてけんかを売られるわけです。だいぶ殴られました。私は両親ともに熊本出身ですから、幾分よかったのかなと思いますけど。

五高入学

四年生の八月で終戦になり、それから授業が再開しました。四年修了で五高を受けたんですが不合格でした。五年卒業で受けて合格しました。入学試験は、競争率が激しかったのは覚えています。戦中に軍の学校、海軍兵学校とか、陸軍士官学校にいた人もいました。その人たちを「ゾル」と言っていました。ドイツ語の「ゾルダートン」で、それを略した言葉です。でもそれによる違いはそんなになかったと思います。

五高に入学したのは昭和二二年です。理科一組でした。ドッペつて、次の年は二組になりました。五高には二年間在学しました。

授業

五高の教育課程では、第一外国語による組み分けで理甲クラス、理乙クラスがありました。それは兄のとき、昭和二〇年までで、私のときには、甲乙はもうなかったんです。選択科目で、個人的には分かれていました。その当時、第一はドイツ語が多かったようです。私もドイツ語が第一外国語で、英語が第二外国語でした。

エロ辰さん、国語の田中先生の授業は楽しかったです。古川柳を研究されていました。あの人の講義だけは、もっと長くあれば面白いのと思っています。

ドイツ語の永松さんは厳しかったです。授業では、最初『Linnenseel』というドイツ語の小説を教科書に使いました。先生が指名して、順番に当たって訳していきます。授業中は、みんな戦々恐々としていました。予習していくのが大前提だったんで、あまり勉強してないときに当たると、ひどい目に遭います。永松さんには辛辣なこと言われました。

英語は山田先生でした。教材は、やっぱり小説で、H・G・ウェルズの『タイムマシン』でした。「皆さんは理科だからこれを選びました。」と言われていました。

成績発表は、校舎の裏に掲示されていました。赤煉瓦本館の北、習字寮との間に入り口があつて、その横に掲示板がありました。休講の通知や、赤丸・青丸・黒丸の成績も、そこに張り出してありました。一番悪いのが黒丸、その次が青丸、そして赤丸です。赤丸六つで留年。黒丸は一つで単科落第でした。青丸が三つだったかな。そういうルールがありました。

私はドッペつたんですが、物理の単科落第でした。物理の先生は藤田繁一さんでした。私は中学の頃から化学は得意でしたが、物理はあまり得意ではありませんでした。一年でドッペつた人は多かったです。私の兄は、卒業するまでの三年間に三分の一は消えたりうと言っていました。そのくらい、その当時の世相が反映してる面も

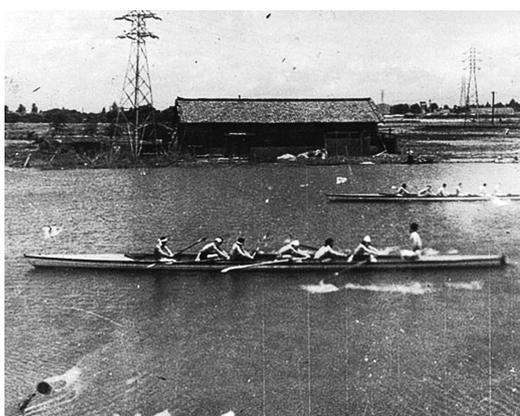
ありました。勉強が満足にできていない。電気も満足につかない。物は手に入らない時代でした。

学校行事

あの頃、運動会があつたんです。私は「出る、出る」と言われて長距離を走りました。武夫原から出発して、学校の外に出て、大甲橋ぐらゐまで行って、帰ってくるんです。非常にしんどかったのを覚えてます。十分食べてない状態でしたから。

仮装行列もやっています。私は行列には出ませんでした。友達は大いぶ出ていました。同じ理科一組の梅崎武徳君はキリストに仮装していました。一般の人たちも見に来ていましたね。

ボートレースもありました。文理科対抗と各運動部対抗があつて、



ボートレース（昭和21年頃）

私は水泳部で出て、初めてボートを漕ぎました。コックスが号令をかけるわけですが、全部英語なんです。今でも覚えてるけど、「オールメン、テイク・オール」からはじまるんです。「武夫原頭」はしょっちゅう歌っていました。私は寮歌を兄からだいぶ習いました。

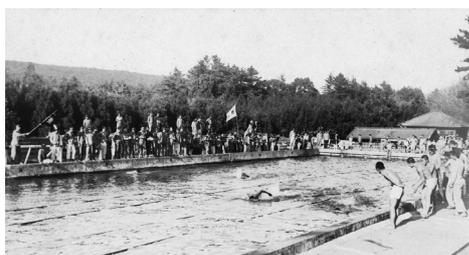
部活動

部活動は自動車部と水泳部に入っていました。自動車部は佐々木先生が部長でした。五高本館の前に、蘇鉄が植えてありますね。その先に中門がありますが、中門の内側に車庫がありました。自動車はたしか三四年型シボレー、外車が一台です。その当時だから木炭車です。炉が、車の後ろにランドセルみたいに付けてあつて、そこに木炭を入れるわけです。木炭を一旦入れたら、しばらく走れました。一酸化炭素を出して、それを燃やしてエンジンを動かすというふうになつていたようです。運転は、五高の敷地ではなくて、学校の外にも出ていました。五高の東側に小峯墓地に行く道がありますね、あの道は坂になっていますが、結構急でね、自動車が止まるんですよ。そうすると、みんなで押すんです。当時は車もあまり



自動車部（昭和22年頃）

多くなくて、取り締まりもやましくなかった。免許持つていない人は少なかったです。みんな運転がしたくて入部していたんですが、部員が結構多かったんでなかなか順番が回ってこないんです。一年生なんて、なかなか乗せてもらえない。二年、三年が優先で、押したり引いたりするばかりでした。国語の高森先生の息子さんとも一緒だっ



プール（昭和16年頃）

たですね。

水泳部は、赤門を入れてすぐ左にある五〇mプールで練習をしていました。競泳だけじゃなく、ウォーターポロというんですか、水球もやっていました。熊本市内には五〇mのプールは二つしかなかったんです、五高のプールと、熊中のプールです。プールの水替えも水泳部でやっていました。大変だったですよ。みんなデッキブラシで磨いていました。

村上さんという小使いさんがいました。水泳部のOBなら誰でも知っている人で、五高の水泳部という村上さんでした。「生徒さん、生徒さん」と、いろんな世話をしてくれました。プールに水を張るために、ポンプで水を出すときの世話だとかね。試合は、九州ブロックでやっていました。会場は九州大学でしたが二五mプールだったんですよ。私の記憶では、試合は一回だけしかなかったです。水泳部のOB会は、随分長く同窓会がありますね、福岡にもOBがたくさんいました。水泳部の団結は固くて、『龍泳会報』という機関紙も出ていました。五高記念館に寄贈しています。

生活

兄は、昭和二〇年に入学理甲で二三年に卒業していますが、その頃は全寮制だったので、しばらくは寮に入っていました。私が入学

した昭和二二年は、食糧難で、全員入寮ではなくなっていました。私は家から通っていました。

街には、よく上通辺りまで出掛けていました。あの頃、喫茶店も一つ二つ開いてたのかな。ただ、食べ物のない時代ですから、やっぱりみんな腹をすかせている。ところが、街に出てもなかなか食料はありませんでした。広町あたりに、大坂屋という店がありました。そこでは、芋ぜんざいとか、芋を主材にした食べ物を出していました。そこに、みんなで一緒に行ったりしていました。

戦後の混乱期は、共産党の細胞さいぼうが五高の中にできていました。新里恵二さん（昭和二一乙二四年）が盛んに共産党で活躍していました。オルグというか、よそから指導に人が来ていたりしました。個人攻撃みたいな格好で入党攻勢をしていました。狙い撃ちされると、寄つてたかつて議論を吹っかけて入党させるといふ、そういう空気もありました。私にもそれに近いことはありました。そういう活動をしていたのは、私知ってる範囲では彼ぐらいでした。あとのメンバーはちょっと分かりません。戦後の解放感からバツと出たんでしょうね。

いわゆる進駐軍が入ってきて、あちこちでいろんな騒動もありました。表向きにはあんまり出ないけど、いろいろなこざこざがあったようです。

アルバイト

戦争が終わったあとは、食糧難が続いてましたし、私のところは

父が早く亡くなったので、特に経済的にもきつかったです。父は亡くなりましたが、「退職金もこのくらいあるから、子供の学費はそんなに心配しないでいいだろう。」と言うことだったようですが、その当時、すごいインフレですよ。あの頃、円が封鎖されたんです。ある一定の金額しか下ろせない。母には随分心配かけたり、苦労をかけたりました。そういうこともあって、生活は非常に苦しかったです。それで、アルバイトに明け暮れていました。アルバイトは家庭教師をしていました。一日三組ぐらい。昼間と夜でね。大体、一回一時間とか二時間。新しい学制に変わる途中ですから、大受験のための家庭教師だったと思います。英語・数学・国語だけじゃなくて、他の教科も何でもやりました。私の中学のときの担任の先生がいろいろ紹介してくれました。

九州大学に進学してからもアルバイトをしないと生活できませんでした。中学のときの担任の先生は、夏休みで帰ってくると、「おい、毛利。アルバイトを考えてあるから、そこに行きなさい。」と声をかけてくれたんです。私と兄は、大学が一年ぐらい重なったので、アパートを借りて一緒に生活してたんですが、その時代に質屋通いを覚えました。授業料免除を取って、奨学資金をもらっていました。下宿代にも足りませんでした。大学に行ってるときは、他にも、チンドン屋のまねをして、商店の宣伝をしたりもしました。

進学 就職

私は、五高に入学したときは卒業できるつもりでした。それが、

ドツペって、学制が変わったものだから、昭和二四年修了で五高を出ることになって、また試験を受けなければならなくなりました。それで、九州大学教養部理科を受けて、合格しました。新制の第一回生になります。二年後農学部に進学しましたが、農学部の中でもちょっと毛色が変わっていてね、私は水産学科なんです。その当時、水産学科があるのは東大と京大と九大でした。何か海に絡んだことがしたかったんです。父の影響かもしれないですね。

大学を卒業した時は、旧制の帝大の最後の卒業生と一緒にあって、相当な就職難の年でした。私は熊本県庁を受けたんですが、幸か不幸か、荒瀬ダムの計画があって、ちょうど漁業補償のはじまりのころでした。たまたま水産関係の人間が欲しかったようで、そのときに巡り合わせたんです。私は面接だけで入りました。それからしばらく水産関係の部署にいました。その後、企画部に移ったんです。企画部にいるうちに公害問題がやかましくなりましたね、公害問題に関わりました。その後、別の部署に行って、随分苦労が多いところで仕事をしました。当時、五高を卒業して、大学に行かなかった人が随分県庁にいたんです。私が知ってる範囲でも相当います。そういう時代でした。大体みんな、いいポストに就いていました。

五高で得たもの

単に知識の切り売りの場でなく、長い間に育まれた伝統に裏打ちされた寮を主体とする自治の制度、文科理科を問わず必読の書籍、剛毅木訥の精神等、多くを学ばせてもらいました。

間宮 勇雄（文科一組）
米田 豊（理科三組）

昭和二十三年入学 昭和二十四年一学年修了

二〇二三年七月一日 聞き取り

五高を志望した理由

間宮 私は生まれも育ちも小倉で、中学校は小倉中学校です。時代からすると、当時は親元を離れるとコストがかかるということで、なるべく地元の高校に行くという傾向がありました。小倉中学校からは、大部分の人が福高（福岡高校）を受けました。成績がよければ五高や七高。一高まではなかなか行きませんでしたね。できたら五高に行きたいという人は多かったんじゃないのかな。ナンバースクールというネームバリューは、やっぱりあったと思います。

米田 私の中学校は、山口県の豊浦中学校で、長府毛利家の藩校の流れをくむ学校でした。成績優秀者には毛利賞が出ていました。小学校の友達のお兄さんが五高だったんですよ。高宮大典さん（昭和二〇年四月理科入学、昭和二三年文科へ転科、昭和二十四年卒業）とあって、子供の時からよく遊びに行っていました。高宮さんの家は、「冬の旅」のレコードが流れていて、聞かせてもらっていました。「五高に行くつもりか。決して悪い学校じゃないから来いよ。」と言われていました。高宮さんは四才年上だったんですが、私が五高に入ったときには三年生でした。五高の演劇部で文化祭のときに「マ

ルセル」の主演をした人です。理科で入学して文転（文科に転科すること）して、演劇ばかりやってたんで、一年どっぺった（落第）という、後には東大に行ったんですけどね。

間宮 昔は、そういう人が結構いたんだよね。

米田 いたね。高宮さんから「来いよ」と言われたから、結局、思い切ったというか、そういう感じですよ。山口県には山口高校がありました。私が、私は受けるのは嫌だと頑として受けなかった。そしたら、担任から「五高に行け。ただ、うちの学校は、四年の一番が五高を受けて何年か続けて落ちている。そういうジレンマがあるから、注意しろよ。山口なら保証してやるが。」と言われました。そのときに「私は一番ではないから、五高を受けても大丈夫だ。」なんて言って受けました。

五高入学試験

間宮 私は、四学年修了で五高を受けました。落ちてもまた五年卒業で受けられると思っていたから、もう一回チャンスはあるし、いわば楽な気持ちで受けたと思います。次が本番だと、予行演習がうまくいけば越したことはないぐらいの感覚がどこかあったと思います。四修の連中は、そんな気持ちでどこかにあったんじゃないかな。

米田 私も四年修了時に受けました。旧制高校が学制改革でなくなると聞かされても、慌てることもなく、修学旅行のつもりで五高を受験したと思います。落ちても新制高校（註：四修の受験生が不合格だったら出身中学が衣替りした新制高校に高校二年生として戻る



昭和23年頃の本館

事ができた。)に行けばいい位の気楽な受験でした。この時、倍率は、四〜五倍だったと思います。試験を受けたのは、本館の裏の校舎です。習学寮のすぐ前のところに、二クラスぐらいで共通講義を受けるような、ちょっと広い部屋がありましたね。そこで受けました。

私の中学校では、校内で模擬試験があつて、四年生と五年生が同じ問題で受けることになっていました。その成績が、一位から二、三〇位ぐらいまで、点数と順位が掲示されていました。その年は、四年生が上位にいて、五年生で高校の受験を一回経験している連中が後になるぐらいレベルの違いがあつたんだそうです。そのときの模擬試験の問題には、入学試験と同じような問題が出ていました。

受験の前日の宿泊は、中学校の先輩が五高の裏門近くの下宿屋を世話してくれました。試験の前の晩、ちよつと気になったことがあつたんで化学の参考書を開いたら、一緒に受けに来ていた同級生から、「米田、こんな土壇場まで勉強するのか。」と冷やかされました。私は勉強しないことで有名だったんです。三〇分主義といって、普

通の学期末の試験でも三〇分しか教科書を読まない。それで、ぱつと書いて出していたから、試験の前日に参考書を見たというのは、なんとなく気になったからだと思います。そしたら、その問題が出て「やった。」という感じだった。問題は簡単なんですよ。炭酸ソーダ水溶液に炭酸ガスを吹き込むと、重炭酸ソーダになって溶けるとか、溶けないとかという化学方程式を書いて、その現象を説明するという問題でした。化学はそれ一問でした。一緒に受けた人が驚いて、私の方を見るわけ。どんぴしゃりだと。入学試験で山が当たったのはそれだけです。恐らくその問題は、パーフェクトな答えが書いています。化学の問題はそれだけでした。数学は繁分数が出ました。きちんと順番立てて解いていけば答えが出る問題です。試験問題ですから、変な答えになるはずがないんです。まさにそういう簡単な答えが出た。「これは正解だ。」と思いました。難しく考えなきゃいけないような問題じゃなかったような気がします。あとは、極大・極小という、微分の初歩のような問題がありました。これもそう難しくはなかったと思います。私たちは中学校四年修了の時点で受けたわけですね。だから、微分・積分を習っていなかったんです。

間宮 私は、微積と積分は中学四年で習いました。

米田 やっぱり小倉中学は、それだけ進歩しているんだ。私は、微分・積分はこれっぽっちも習ったことなかったんです。自分で参考書を見て独学です。それでもちゃんと解けるような問題でした。

間宮 中学四年までしかやってないんで、三角関数なんかも全然

やってなかったですね。

米田 私たちの中学では、三角関数はやっていただけ、微分・積分はなかったんです。それと、作文がありました。題が「今」だったんです。黒板に大きな字で「今」と書かれて、これで作文書けという、そういうのが出たね。

間宮 そうそう。それを鮮明に覚えています。何を書いたかも覚えてますよ。「『今』」といったときは、もう既に今でない。」というようなことを最初に書いた。そこから先はもう書けない、書くことがないんだね。抽象的に考えたから書けなかったんだろうと思います。状況描写を書いた人がいたかもしれません。試験の最中はどうとかね。いろんな取り方があるから幅は広い。文筆の才のある人であれば、それだけで十分書けたんでしょうけども、その才能がないものだから。

米田 ほんとうに、何を書いていいか分からなかった。あとは筆記試験、英語、国語、数学、物理・化学で一科目、あと地理・歴史は「何々について述べよ」という問題だったと思います。

間宮 たしか、問題は一行くらいでね。ヨーロッパの大航海時代のこと。そんな問題だったと思う。

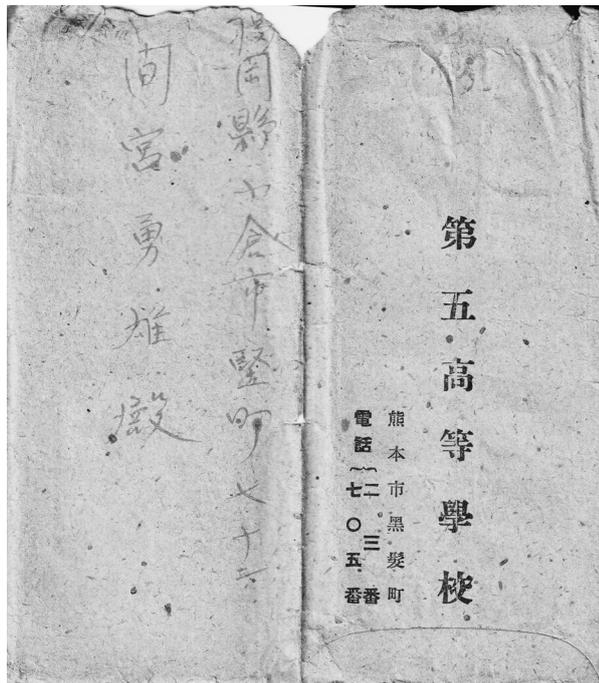
米田 もう一つ、元寇のこと。それに対して記述する、作文の試験のような感じだった。

間宮 そのころ、それまでの皇国史観がひっくり返って、日本史の教科書は、昭和二二年か二三年頃に新しいのがやっとなって、そのとき初めて、縄文時代とか、そういう言葉を知ったんですよ。皇国史

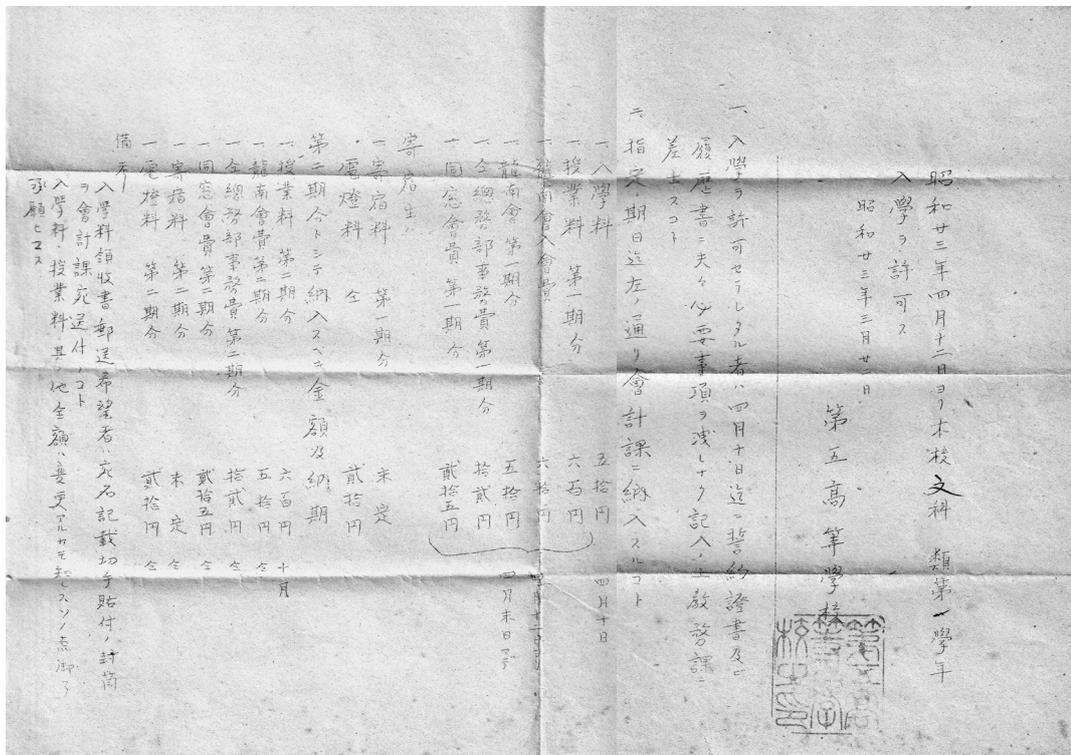
観に代わるべき歴史観が確立してないものだから、日本史の扱いは、非常に難しかった。

米田 試験はできたつもりだけれども、どこにどんな落とし穴があるか分からない。だから、私は、中学校に試験の報告をするときに、「落ちたと思う。」という言い方をしたんです。かなりシビアな採点をしたわけです。結果の電報を、みんな終わった時に頼んでいきましたが、私はそのまま帰ったんで頼んだ覚えがないんです。そしたら、「ミゴトパス ミ」という電報が来たんです。私はもうだめだと思っていましたから、発表の日に、北九州社会人リーグの野球試合を見に行っていたんです。門鉄、製鉄、西鉄、大洋漁業とかの社会人野球のリーグ戦です。そしたら、呼び出しがかかって、電報を見せられた。「ミ」って何だろうって思うわけです。最初、誰かがいたらををしたんじゃないかと思った。よく考えてみたら、先輩が紹介してくれた下宿屋さんが、ミタライさんという家だったんです。そのとき同じ豊浦中学校に、一緒に五高を受けて、他にも熊本工業専門学校を受けた一年上の人がいたんです。熊本工専は五年からしか受けられないんですね。その人が、「俺は五高は落っこちた。おまえは通ってたよ。」と、私の家まで知らせに来てくれた。その翌日に五高から正式の合格通知が来ました。そんなエピソードがあります。

間宮 私は、一緒に受けた友人が、「もうそろそろ通知が来てもいいころだ、明日でも見に行ったらどうか。」と言っている時に、親父が五高から来た通知を持ってきました。そのときの封筒と中の書類が、取ってあるんです。ガリ刷りでね。でも、その書類の中に私の



入学許可通知が入った封筒



入学許可通知



文科1組

四年修了は六人。文科・理科でいくと、五卒は理科が一人で、文科が五人。それから、四修は理科が五人で、文科は一人で私だけ。内訳がクロスしていますけど、人数は同じ六人。一浪して入った人もいるんじゃないのかな。私は文科一組です。高等学校がなくなるといいうわさは聞いていました。うわさ程度でした。

米田 私は理科三組でした。



理科3組

「二年間、遊びに行つてこい」って言われたのを覚えています。

授業

間宮 本館と習字寮の間の校舎は、入学してからも授業を受けた教室があつたと思います。

米田 エロ辰さんの講義なんか、そこであつたと思います。エロ辰さんは、田中辰二先生の愛称で、江戸川柳の専門家です。授業は『源氏物語』の講義でした。「普通は三角関係とか、四角関係言うけど、あれは放射状関係だ。」とか言われたことを覚えていています。

間宮 私の場合、国語は『万葉集』と『雨月物語』でした。エロ辰さんではなくて別の先生だつたと思うんだけど、名前はちよつと記憶ないですね。たしか文科の一組、二組の二クラス合同であつたと思います。

米田 文科と理科とは、ちよつと違うと思う。

間宮 万葉集の最初の冒頭の句から入つたんで、最初はびつくりしました。全然レベルが違うわけですから、戸惑つた記憶がある。

米田 中学校の講義や試験と全然レベルが違うんです

名前は書いてないんですよ。だから、それは合格通知に添付している書類かもしれない。

米田 試験が三月の初めで、二〇日前後に正式の合格通知が来います。通知は、便箋ぐらいの大きさに、「合格したことを証明する。」という文章だつたと思います。受かつたのはわかつたから、もう必要のないものと放りっぱなしにしていました。費用を何日まで納付とか、そういうある種の請求書のようなのが、一緒に入っていました。

五高入学

間宮 小倉中学校から現役で入学したのは、中学校五年卒業が六人、

よ。英語は、ガリ版刷りのW・ペーターの「ルネッサンス」で、かなり長文の翻訳でした。

間宮 英語は最初から原書です。デイケンスの『カップパーフィールド』、オースティンの『高慢と偏見』、『アイヴァンホー』、その三つは覚えている。

米田 ドイツ語は、ほとんど全員が初めての授業でしたが、真面目に予習復習さえすれば、何とかなりました。しかし大難物は数学です。さっきも言ったように、戦後の混乱期に中学生だった訳だし、その上四年修了とくれば、微分・積分など全く教えられたことが無いわけです。鶴丸孝司教授の最初の授業では何も理解できない。なにしろ、「デデキントの切断」なんて聞いたことも無い。すっかり自信喪失を通り越して、これからどうすればよいのかと、途方に暮れた第一日でした。やっと足し算が出来る程度の子供が、二次方程式の解を講義されたくらいのギャップでしたね。

成績発表は、本館中央の階段下の壁に張り出されます。合格点には何もマークが付いていませんが、五〇点台は赤丸、四〇点台は青丸、そして三九点以下は黒丸で表示されます。青丸一個は赤丸二個に換算、赤丸七個で落第、黒丸は一個でもあれば単科落第（他の科目が如何に優れた成績でも）というルールであると教えられています。落第の条件はもう一つあって、平均点が五九点以下は落第、二年連続落第すると放校という決まりもあつたようです。

成績発表の日、掲示を見ると、鶴丸教授の欄だけは、死屍累々。一人を除いて、クラス全員見事に色とりどりのマークが付いていま

した。その一人は、筑豊の田川中学校から来た刀根薫君。成績発表以前から、彼の凄さは級友全員の認めるところでしたが、世の中にこんな秀才がいるのかと改めて目を丸くしました。悪いことに、鶴丸教授は夏休みに転勤が発令され、色とりどりのマークを残されたまま、二高（第二高等学校）へと去っていかれました。この時は、クラスの仲間の多くが単科落第の恐怖に襲われたことは間違いないです。何とか学年末の試験は、後任教授のお情けで、そこそこの成績を貰って通年では落第することもなく一年を修了できました。

平均点六〇点でノーマークというのが理想像と聞いたことがあります。副寮歌の歌詞に「勉強する奴は頭が悪い、勉強せぬ奴はなお悪い。」という歌詞があり、勉強しないことを以って自慢するような風潮がありました（実は、皆一応は勉強してた）。このように勉強しない風を粹がっているのが、旧制高校生だったかもしれません。

習学寮

米田 習学寮は、本館側から一寮、二寮、三寮がありました。それと四寮、ここには寮の主のような人がいました。一〜三寮が三二室、四寮が一六室くらいだったと思います。一学期は一年生のみ三人部屋でした。部屋は一棟が三二ぐらいあって、それが大体三人部屋でした。ただ、班長の部屋とか、そういうのは二人部屋です。その他に、寮史部とか、炊事部とか、そういう委員をやっていると二人部屋なんです。

間宮 一寮で一〇〇人くらいいたんでしょうね。だから、寮全体で



昭和23年習学寮生

たような気がします。入寮手続きをした時に部屋が割り当てられたと思います。誰と一緒にとかいう希望は何にもなしです。どういう基準で決められたかはわかりません。

私が入った一寮一室は、田川中学校から来た理科四組の清水晃君と、嘉穂中学校から来た理科六組の新開日吉君と理科三組の私でした。清水君は大学で転科して文科になって、九州大学の経済に行きました。その後、西日本新聞社に入って、最後は社長になったと聞いています。そして、もう一人の新開日吉君はどっぺったんです。修了できなかったということ。中学校から新制高校に行っていれば、優等生だったと思うんですよ。五高に入るぐらいだから。そ

は、大ざっぱに三〇〇人近く。四寮の横くらいには食堂がありましたね。
米田 四寮は、また別格だからね。

間宮 多分、最初の時に、入寮希望を出してるんだろうと思うんです。一年生全員が入寮したわけではないと思います。

米田 入寮を希望する者は、習学寮の玄関のところで、入寮希望の文書を書かされた

して卒業すれば、当然大学の受験資格があったはずなのに、五高に入ったばかりに大学受験資格がもらえなくなりました。

間宮 多分、制度では対応する準備はできていなかったんでしょう。そういう事態を想定してない。

米田 新制大学になった時は、まだそんな細かいことまで決まっていなかったんですよ。五高の場合は一年修了で新制大学の受験資格を与えるという、それだけがありました。

他にも、どっぺった人はいますよ。私の隣の部屋だった大河内成介君。人吉中学出身で浪人したかなにかで当時二一才でした。一緒にの部屋は、杉野直道君、徳本正彦君。どちらも文科一組、徳本君は九州大学の教授になりました。

間宮 私も最初は三人部屋でした。大西康允君と岩本光雄君。大西君は同じ文科一組でした。岩本君は理科二組で、戸畑中学校と言っていた。

米田 大西君と私は中学校が一緒の豊浦中学校で、中学校五年卒業で入っていました。後で同和火災の常務でリタイアしたと思います。私が十條製紙の本社にいたとき、大西君が来て、「損保会社だから、総務部にちよつと用事があつて来たんだ。」と、私の席のそばに来て、しばらくだべっていったことがあります。

食事

間宮 習学寮では、飯の時間だけは決まっています。

米田 炊事部が入り口で見てて、「ツバイ（二度飯、二回ご飯を食

べに行くこと)がいるんじゃないか」と監視していた。ツバイは結構いましたね。炊事部は、それを監視してしていました。泉昌一君や水町隆君が炊事部でした。

間宮 炊事当番は権力があって、志願者が多かったですね。ボスの存在だったのが鳥谷昌宏君。

米田 下関中学校で我々より一年上だったんだけど、どっぺって同じ学年になっていました。理科一組です。鳥谷君の実家は、下関の駅近くの旅館なんです。その旅館で板前をやっていた人を連れてきていた。炊事部は、寮生の数だけ食料を集めなきゃいけないんです。米の配給はありますが、それだけじゃとても足りないんで、あっちこっちに行つて集めてくるわけですよ。

間宮 その意味では、よく集めた方だろうと思うんです。後で一高なんかの話を聞くと、もつと食べ物も少なかったらしいね。

米田 夜の食事は、粟と米が一对一のご飯なんです。粟は黄色いんで、ぱつと見たら、卵ご飯に見える。それに、ちよつとしたいわしが一匹ついていた。朝になると、前の晩の残飯を使った雑炊を作るんです。昼は、「護国」というさつま芋でした。飛行機の燃料に使うアルコールをつくるための芋で、多収穫性でおいしくない。それが、お皿の上の一つ、どんと置いてあるんです。多収穫性だから、ちよつと赤ん坊の頭ぐらいの大きさです。それに魚かなんかがおかずであります。そういうのを集めてくるのは、やつぱり炊事部なんです。炊事部の連中は苦勞して集めたと思います。だけど、炊事部になれば、食堂でなくても食べられますからね。みんなお腹がすくか

ら、「炊事部のやつだけ食いやがって。」とかいうことを言っていました。

間宮 そういう不満はあったけど、今から考えれば、随分苦勞したと思いますね。

米田 食料は全然十分じゃないです。一般の寮生はさつま芋なんかを買ってきて、飯盒に入れて蒸かしたりしていました。その時に、サインカーブのところ杉林があるでしょう。寝間着のひもに石を結んでぽんと投げて、木に引っかけて枝を落とします。つまり枝打ちするわけです。それを持ってきて燃料にしていました。寮と寮の間に、炊事するための赤レンガの小屋があったんですよ。

間宮 そのうちに、それで足りなくなつて、廊下の木の窓枠もとってきていましたね。窓には当然ガラスも入ってなかった。

米田 天井板もないんですよ。空襲に備えて、焼夷弾が途中で止まって火事になつたらいけないっていうんで、全部外してあったわけです。だから、私たちが入学した時には寮の建物の天井はもうなかったんです。そして、押し入れの戸が板戸なんです。それを外して、その板をばらして燃料にしていました。だから、寮の部屋の押し入れの戸はない。建物の部材が燃料になっていました。そういうもので、飯盒に入れた芋なんかを調理していました。

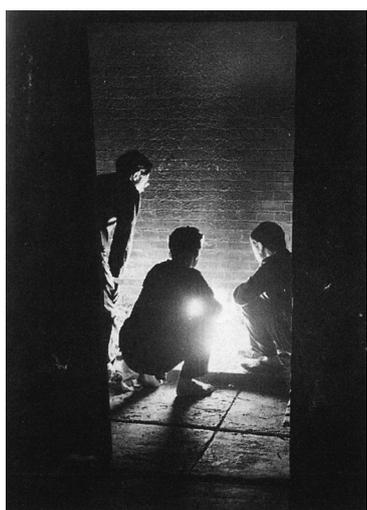
間宮 たまに親からもらつてきてね。

米田 家に帰つて親からもらつてきた食糧を、「エッセンあるぞ。」と誰かが怒鳴ると、うわつと来て部屋で食べるわけです。「エッセン」は、ドイツ語です。自分たちだけで食べるなんていう、そうい

う感覚はないんです。みんな同じことやるから、ここの部屋に行ったら、次、こっちの部屋に行くとか。それもみんな程々で来るわけですけどね。

間宮 やっぱり旧制高校っていうと、ドイツ語使った方がカッコいい。同じ部屋で一緒に食べていましたね。とにかく一人で食うってことは、してなかったよね。

米田 調理することを「ボイリング」と称して、飯盒で炊いてたりしたわけです。たばこも配給でした。寮に配給があるわけです。も



ちろん成人だけ。だから、間宮君も私もありませんでした。別にたばこは吸っていなかったから、不便には思いませんでした。たばこは「ラウヘン」と言っていました。たばこを

吸うというドイツ語ね。「ラウヘンあるぞ。」と言ったら、みんな来て一緒に吸うわけです。腹が減るのも一緒、たばこが欲しいのも一緒。共有なんですよ。

間宮 私はたばこは吸いませんでしたが、二〇才以下でも吸っている人はいました。一般的には、旧制高校だと社会的には大人扱いだった。熊本市民からは、大人扱いされていつもお世話になっていました。

行事

米田 学校の中に売店があったんです。知命堂といって、二寮と三寮の間だったと思います。そこに新入生を集めて、怪談をやるわけです。先祖の霊がそこに祭ってあるということで、位牌のようなのを置いて、もっともらしくお経みたいなのを読んで。古参の寮生だったか、班長が話をしたと思います。怪談の内容は、五高の七不思議がいろいろあるでしょう。サインカーブの猫橋とか、赤レンガの正門に看板がないとか。本館の玄関は開かずの扉で、流行病があったときに入らないように扉を閉めているとか。そういう話で脅かしておいて、肝試しということ、一人ずつ立田山に登りに行くわけです。途中、裏門のところでこんにやくがふっと出てきたり、細川家のお墓がありますが、その周りに変なもの作ったり、白い着物を着てぬうつと出てきたり。お化け屋敷の遊びですよ。立田山の頂上まで行ったら合格で帰ってくるわけです。そういう伝統がありましたね。

間宮 登りに行くときは提灯もなくて暗かったよね。月明かりだけでした。

米田 帰ってくると、何事もなかったような顔して部屋に帰るわけです。そういう寮の行事もありました。寮の中でストームもやりました。試験なんかの頃に、遅くまで勉強してるでしょう。それのじゃまをするのが目的だったんじゃないでしょうか。

間宮 そうかもしれないね。大体あれは、寝静まった頃ね。

米田 廊下の床をドンドンと叩きながら、中には竹を持ってドンド

ンとやって、部屋が閉まってたらドンドンと開けたり、寮歌や副寮歌を歌いながらやったりね。ある意味で愉快なはずなのに、まだ子供ですよ、そういう意味では。

間宮 寮ごとにやっていたのかもしれないね。

街

薄田 街に出掛けるということはありませんか。

米田 あります。上通の途中、ちよつと横に路地を入っていくところに、五高クラブというのがありますね、おばあさんが一人でやっています。さつま芋のふかしたのとか、うどんとか、そういうのが当時五円。いよいよおなかが減ってきたら、そこへ行ってうどんやさつま芋を食べていました。五高クラブは、公式の名称じゃないと思うけどね。行くのは五高生だけ。長テールがあるだけで、食堂という感じじゃなかった。あなたも行ったことあるでしょう。

間宮 何回か記憶にはあるけどね。

米田 映画も好きでしたから、よく行きましたね。映画見に行くつもりで行ったら、五高の先輩だと称する人に「おまえ、五高生か。」と聞かれるから、「はい。」と答えたら、「ちよつと一緒に来い。」とつかまって、藤崎宮の角のところにあった飲み屋に連れられて行ったことがあります。そこで焼酎をコップに一杯飲まされました。私はお酒なんて飲んだことがなかったし、焼酎は味がわからないから水を飲むみたいな感じでした。帰りは宙を浮いてるようで、部屋へ帰って布団を押し入れから出してはたつと寝ました。二寮で田阪さんと同

室だったころだと思います。ぐうぐう寝ていたら、「おい、珍しい。米田が酔っ払ってるぞ。」という声が聞こえてくる。こうやって酔っ払って帰ったことがあります。

間宮 まだ未成年だったけど、五高の時代は、みんなある程度、大人扱いされてたから、どこかで飲んでいたかもしれない。

米田 街には出かけましたけど、お金がなかったからね。経済的には、みんなかなり厳しかったと思います。

間宮 金はないし、あんまり物もないし。

寮歌

米田 中学校の頃に、いろんな高校の寮歌を歌っていました。例えば七高を受けようっていうやつがいると「北辰斜め」を歌うとかね。ノートとか教科書なんかの後ろの方に、「向陵突破」なんて書くわけですよ。向陵というのは一高のことなんですけど、「俺は一高受けるぞ。」という意味なんです。三高受けるやつは「神陵」と、五高を受けるやつは「武夫原頭」とノートの裏に書いたり、私の中学校では、そういう習慣がありました。五高に入学した後は、習学寮で寮歌練習というのがあつたんです。「武夫原頭」から始まって寮歌集を順番に口伝えます。楽譜を見ながらやるんじゃないかった。

間宮 楽譜も歌詞カードもなかったと思うね。

米田 先輩が「武夫原頭に、はい。」って言ったら、続けて「武夫原頭に」と歌うわけです。

間宮 みんなで耳だけで覚えながら歌っていました。



習学寮の記念祭「武夫原」を歌いながら踊り続ける。(昭和23年)

米田 楽譜がなくて、そのときの班長とか副班長が歌うから、だんだん、だんだん変わっていくわけです。そのときの言いぐさとして、「寮歌に楽譜はないんだ。そのときに歌ってるメロディーが、正しい寮歌なんだ。」ということでした。だから、楽譜どおりに歌ったら、「おかしなメロディーになってる。」とか、「それ、違う。」とか言われました。

薄田 何曲ぐらい教わったんですか。
米田 そのとき教わったのは、「武夫原頭」は当然ですよ。それから、「椿花咲く」、「嗚呼金鏡の影うけて」、「憧憬湛ふ」とか。あと、部歌が幾つかありました。漕艇部の歌で「不知火燃ゆる」、「燃える紅炎」は野球部かな。「易水流れ」もありますね。あれは、「武夫原頭」を歌ったあとに息を整えるために歌います。メロディーが、ほんとうの楽譜どおりだったかどうか私は知りませんが、そういうのは一応教わった。それから、「行けやいざ」という応援歌もありました。「行けやいざ われらが戦士 武夫原に炎と燃えて」と。

間宮 あなたは野球部にいたから、応援歌を歌ったんだね。私が知ってるのは、せいぜい四、五曲くらいしかないですね。

米田 私も、もちろん全部は知らないですけど、そういう寮歌演習は、毎晩のようにあるわけです。だから、そのときの班長が、おそらく得意な歌を歌ったんだと思います。一班だけ集めてやるとか、そんな感じだったから、寮によってメロディーが違ってたかもしれない。

薄田 伝える人によって違う可能性はありますね。

米田 絶対あります。

間宮 やっぱ「武夫原頭」と「椿花咲く」と「易水」。これが代表的なものでしょうね。一番よく歌われたと思います。代表的な寮歌としては、五高では「武夫原頭」だろうね。

米田 「椿花咲く」は、それこそ映画でも見た帰りに寮まで帰ってくる間に、みんな延々と歌うわけです。逍遙歌だからね。後で「椿花咲く」の作詞者が見つかって、広島大学の先生だったとかいう話は聞いたことがあります。中井正文さんね。開校記念日には、行事が終わったあとにファイアーストームをやるわけです。武夫原の真ん中で火をぼんぼん燃やしてね。

間宮 それだけは覚えてます。武夫原で歌った記憶があります。

米田 それこそ、ふんどしだけで。「武夫原頭」を歌ったりしてました。息が上がりますよ。だから、そのあとで「易水流れ」なんてゆっくり、お経みたいな歌を歌わなきゃ治まらないわけです。

薄田 歌にも役割のようなものがあるんですね。

最後の寮歌

米田 最後の寮歌を発掘したのは私がきっかけなんです。というのは、兼川晋君、小倉中学校から昭和二二年に入学したけど、どっぺって我々と同学年になった。兼川君が、五高の昔のことをいろいろ調べていたんです。五高の記念式典で熊本に行ったとき、五高の近くの喫茶店でお茶を飲んでいたら、「おまえ、何か知らんか。」と聞かれたので、「杉野が寮歌を作って、それが当選したというのは知ってるけど。」と言ったら、「杉野はそんなことやってたのか。」というので、杉野直道君に確認したらいいです。そうしたら、間違いなく昭和二三年に寮歌を作っている。それが「黎明（しなのめ）の鐘」なんです。原稿も見つかって、全文が発掘されたわけです。杉野君は日経新聞の専務や、テレビ東京の社長もやりました。それで、作曲をどうしようということになって。

間宮 作曲を同期から募集して、理科五組の塩地薫君がうまく世話をしてくれました。

米田 最初プロに作曲させた候補曲が四曲ぐらいあったんですが、ちよつとしゃれた曲で寮歌風じゃなかったんです。それを聞いて、理科四組の甲斐昭良君が作曲をしたら、それが一番寮歌的なメロディーだった。われわれの同期が作った最後の高等学校の寮歌のピソードです。

間宮 同期会ときには、やっぱり歌ってましたね。

米田 あれを歌えるのは、われわれの学年しかないはず。

間宮 他の学年は、あんまり知らないから。しかも、数十年たって

からできた歌だから。完全に認知されるかどうかは別として、寮歌としてあるんです。

米田 杉野君のしのぶ会るとき、故人の作詞した寮歌だというんで、メロディーがBGM的に流れていました。私が言わなかったら出てこなかったなとか思いながら聴いていました。

五高について

米田 しかし、残念なことに我々の学年は、学制改革のあたりをうけて、一年修了で五高から放出され、新制大学の受験を余儀なくされました。僅か一年の生活でしたが、初めて親元を離れた寮生活、天下の秀才揃いの中で受けた多大の刺激、十六歳の「井の中の蛙」にとっては何物にも変えられない素晴らしい経験でした。この年齢になっても、三年又四年の龍南生活が送れなかったことが悔やまれてなりません。もつともつと充実した人生が送れたのではなからうかと思っています。

間宮 米田君と同感です。

異能多才などもがらの、そして自由闊達な雰囲気の高高で、青春時代の始まりを、迎えたことは貴重な財産です。

三、戦後の第五高等学校関係資料

本項では、戦後の第五高等学校に関する資料の中で、『習学寮報』、「私の『習学寮報』補遺」を掲載する。

『習学寮報』の発行人は習学寮惣代、発行所は習学寮であり、昭和一二年に創刊された。戦前の刊行が確認できるのは、二二号（昭和一七年二月二〇日）までである。その後については、校友会誌『龍南』二五三号（昭和一八年七月二〇日）に、『龍南』への合併と廃刊についての記述があるが、何号まで刊行されたかは不明である。戦後は復刊一号（昭和二年一月一〇日）、復刊二号（昭和二三年一〇月）が刊行されている。ここには最終号の復刊二号から抜粋した。

「私の『習学寮史』補遺」は、兼川晋（昭和二三年入学、昭和二四年一学年修了）によるものである。『続習学寮史』（昭和二三年）の続編として、五高閉校までの出来事を同書の形式に倣って編纂されている。五高開校一〇周年記念祭の折（一九九七年）に、昭和二三年習学寮惣代高尾寿郎から、龍尾会（昭和二二年入学生同窓会）、末子会（昭和二三年入学生同窓会）に向け、情報収集が呼びかけられた。そこで得た情報と『続習学寮史』『熊本大学習学寮史』（昭和三四年）、前記『習学寮報』を参考資料として編纂され、『末子会記念文集』（平成一一年）に掲載された。五高記念館にも原稿が寄贈されている。本項には、昭和二三年を掲載した。昭和二四年については、三月に編纂者の兼川が一学年修了しており、不在であること、

昭和二四年に関してはおおむね『熊本大学習学寮史』によるためである。

凡例

- 一、漢字は原則として新字体を用いた。
- 二、繰り返し記号は使用せず、元の文字を用いた。
- 二、句読点については原文を尊重したが、読みやすくするため付したところがある。
- 三、明らかな誤字は訂正した。
- 四、印刷の不具合等で解読できない文字は□で示した。

1 『習学寮報』

寮報内容

- 一頁 巻頭言 惣代 高尾寿郎
理想保持か、理想の抛棄か。 校長 竹内良三郎
- 二頁 私は斯く信じ斯く願ひます。 生徒課長 小山直之
近代以前の文化意識 教授 森修二
浪漫的物理学 教授 小貫章
- 三頁 浪漫的物理学 教授 小貫章
その後の寮生活 教授 河原畑正行
- 四頁 記念祭諸行事
- 四頁 対七高野球戦。弁論大会。ボート・レース。演劇。
- 五頁 座談会。寮史展。市民に聞く。
- 六頁 九室の窓から。短歌。

七頁 先輩便り。

八頁 記念祭によせて。

九頁 文芸。評論詩俳句。

巻頭の辞 惣代 高尾寿郎

武夫原に秋風が吹いて龍田山の夕暮には、若きデンケルの姿が影絵の様に浮ぶこの頃来年の秋、この龍南にいてふの落葉をたく者はそも誰、と思ふ時、忘れられていた感傷が三年の思ひ出にからんで心にうづく

喜びも悲しみもうれひもそしてなげきも、大きく純粹の二文字にくるんで、習学寮はよかったと…狂暴が一切の自我の目覚めを双葉のうちにおしくつぶしてしまった戦争、いとけない精神的生命に聖戦の二字をかぶせられて、唯祈りつづけた我々が、総てをそれにかけていた、一切の夢と希望と生活は一個の原子爆弾に儂なく崩れ去って、何物かを求めつつここ、習学寮に辿りついた時、復員の軍服に包んで来たものは…唯、虚脱

不安の吐息をはいてうごめく実存、何かしら求めている者に、これだーと突きつけてくれる唯物そんなものの目まぐるしく飛び交ふ中に浅薄な実利の眼をキョトンと見はって居るうちに驀進するインフレの波はともすれば足をすくはうとする。

戦争と敗戦のもたらした精神的物質的もろもろの恐の槍ぶすまの中に彷徨した高等学校の生活の場としての習学寮、配給が一合七勺から二合八勺に増えたその三年の間に得たものはこれですと握った

掌を開いた時に、何もなかったわびしさは残っても、そこには歌って泣いて笑ったあけくれに生き方を若さと伝統の色に染めあげた、暮したもの喜びがある。

一本の煙草も持たず一銭の金もなくともいつ迄も暮して行けるのが習学寮だと云はれば本当にさうだと同感して、布団も洋服も、一晚の歌声に飲んでしまつては、秋の夜風の冷たさに、蚊帳にくるまつて駄弁に夜を明かしても、おこるのは国の父親だけ

たよらない心に、異性を神まで高めれば、失恋は甘い生活にワサビを一寸きかしてくれる。

アルバイトの石鹸売りが利益の二倍の借金をかついで帰っても驚かないから、二分で行ける教室に出ようとしなくなつて誰も不思議に思はない

したい事をすきな様にやれるから…一生の中で寮生活だけは一度繰り返したいと云ひ出す先生も居られやうと云ふもの朝鮮を、南洋を、ついでに道義も失つてしまった日本から高等学校迄なくなる、高等学校は当然なくなるべき内部的必然性があったといふ事は我々にとつて慰めにならないのは仮令、自分の総の揺籃を失ふといふ感傷をぬきにしても…

千代に八千代には続かなかつたが立派に一生にもたとへられる六十年の歴史に立派に苔むした赤壁城の前に立つてこの五高習学寮を失ふ事はあらゆるものを抜きにして唯素直に、淋しいと云ひ度いのである。

怒号絶叫 寮内弁論大会

土曜会として生まれ、或は法科懇話会となり、更に発展して龍南怒号会とも称へられた弁論大会は、往昔は実に屢々且盛大に催されていたらしい、寮報部員は誠に張り切つて毎学期廻りは開催する予定であった。が残念乍ら未だ壱回しか行っていない。この責は独り部員のみを負ふべきものであらうか。この唯壱回の弁論大会に於て、出場者は四名、聴者四十名余り、主催者側としては実に悲嘆慷慨もし落胆させられたのである。弁論大会に対する寮生一般の非協力的態度にも一応の責は存在するのではあるまいか、龍南衰へたりの声が強く叫ばれ、将亦今の生徒に気魄少しとさるるのも宣なるかなと思はざるを得ない。

次に弁論大会を回顧してみよう。

一、ストームに就いて 一寮 白井淳三郎

ストームは情熱の発露としては美しい事を肯定するが、自分は功利主義的的人生観を持つて居り、勉強する為にのみ五高に入ったのである。故に自分の理性としては、他人のする事には干渉せぬ、が自分自身としては行はない

二、伝統の継承に就いて 一寮 中川雄一郎

自己と全体の関係に覚醒して、徒に伝統を墨守盲従する事なく、自分の道を行かん事を主張す。

三、我がユートピヤ 二寮 城本洋一郎

極めてロマンチックな彼の夢を物語る。

四、余が円を乱す勿れ 四寮 薦田茂正

汝自身を知れと前提して、自称牧師の貪欲自己陶醉自己礼賛を否定し、自己の理想を絶対とする、独善主義の哲学者を法華経の妄信者に等しいと論破する。

五、飛び入り、白井への反駁 二寮 岩崎

白井のストーム反対に対して、ストームは情欲のはけ口としても肉体的にも必要である事を力説。

六、飛び入り 一寮 福田

バーバリズムは五高生の変態的性慾の現れであると述べる。

最後に飯尾惣代より、全体としてその語る事の中に鋭い自己批判を持つて何も言ふ事はない、勇気と謙虚とをもつて行く事が我々には必要だとの講評を頂いて幕を閉じた。

寮生活アレコレ 寮報部主催 座談会

最後の寮報を発刊するに当り、寮報部は左の諸兄に集つて頂き習学寮及び寮生活一般に関し、座談会を開いて貰った。スペースの都合とか時間不足の為、充分に論議を尽さなかったことを主催側としてお詫びすると同時に、広く寮生全体の公平な意見を聞くことが出来なかつたことを遺憾と書いています。

出席者 松尾旧一寮惣代、江本新惣代、薦田（四寮）

三木、小谷（一寮）、大河内、吉田（二寮）、島本（三寮）

開会 午後八時、於知命堂階下

司会 今年を以つて六十一年の伝統を有つ五高と一緒に吾々の習学

寮も自然失くなるであらうと思ひますが、最後の寮生活を送るもの

として、現在までの習学寮の運営上の機構に就いてお気付きの点があったら、先づ松尾さんからどうぞ

松尾 所謂惣代、委員一般寮生の制度は、開寮以来のものではあるし、妥当な寮制度であると思ふ。ただ現在寮生活がうまく行かぬと云ふのは寮生全体にあるのであって、例へば委員となつて残寮するのも経済的な理由によるものが多く、前ほど純粋な理由で委員の務めが出来ないのが大い原因ではないかと思ふ。

江本 確かにそう云ふ所はありますね。

司会 大体意見がない様ですから、今度は現在の四寮ですね、皆さんどう考へていますか。

薦田 四寮生にして大部分のものが、四寮と一、二、三と寮の制度の差異に就いては一種の反感を拘っているのではないでせうか。所謂、高校生活への憧れと云ひますか、そう云つたものがこう云ふ反感を感じさせるのですね。

三木 僕たちは殆んど四寮に対して余り知りもしないし、概して無関心です。

島本 そう云ふ無関心が却つてますます四寮の孤立化を増すと思ふんですが

司会 残された半年の生活への期待とか、そんなものを。

大河内 僕は自分一人の自身の生活を送りたいですね。

松尾 僕はですね、寮生活の意義、良さとか云ふものは、どうしても班制度、即ち共同生活の中にあるんじゃないかと思ふんだ。自分独りで、自己の中に沈んで行くのもいいけど他と接触しつつ自己の

発展を努めるのが、本来の寮生活と思ふのだがね。それから惣代としても、班制度によって寮生との間も緊密になると思ふ。

大河内 一学期には、それも必要だし又有効でせうが、二学期にもなると、寮生も落着いて来て、却つて班制度などをうるさく感ずるのが一般的な傾向だと思ふんですが、また班活動も、読書会などもつと活発にやつて、各自が互ひに切磋たく磨してゆく契機を作れば、現在の不満も或程度解決されるかも知れませんが、実際そう動いている班なら全然と云つていい位ではないですか。

松尾 現状は確かにそうです。事実、寮を出た人などに聞いて見ると、矢張りよく思い出されるのは班活動だそうです。

司会 四寮の方は『班』と云ふものを如何考へますか。

薦田 二年になって四寮へ入り、隣室とも殆んど没交渉ですが、高校的雰囲気と云ふか、親密に毎日の生活をやつて行きたいですね。然し固定した班制度と云ふものに依つて、個人の主体性を制約されるのは嫌です。

司会 今までの寮生活に於て感じたことなど

吉田 寮にいと、外的にもこれが一番辛いのですが精神的にも他から束縛をうけるのが辛いですね。

小谷 僕は一年間寮に寝起きし再び二学期から入寮したのですが、下宿と比べても寮のよさがしみみ分ります。僕は三年間寮生活しなけりゃほんとうに分らないのではないかと思います。

島本 そうですね、勉強は出来んと云つてもやらうと思へばいくらでもやれるんだから。

松尾 寮は自我の拡張と云ふ意味でも多くの友達にも接することが出来るし、そして便利もいいのだから気持の持方次第ですね。

島本 下宿するのは食物と自分自身の生活を求めて寮を出るのが多いのではないですか。

小谷 自己嫌悪もありますね。

薦田 先き誰かが気兼ねと云ひましたが、表面的には下宿の方が多いでせうが、寮は自己偽瞞即ち二重生活の気兼ねが相当多いですよ。それこそ高校的と云ふものにも束縛されますね。

松尾 併し、それも一つの貴重な人生体験だと思つたら。

司会 新制大学の入試と寮生活との問題で、一年の方はどうですか。

三木 あの発表で宙ぶらりんの状態にあるわけですが、やっぱり高校生活への憧れと云ふか一学期の惰性か、引っぱられて、今のところそう考へもしません。

島本 私には、その高校的なものが、漠然としてよく分らないですが、二学期から勉強したいです。

司会 お忙しい所予定の時間も来ましたから、最後に松尾さんからしめくりをどうぞ。

松尾 寮生活の種々の批判と、とやかくとして、寮生活即高校生活として云へるんですから、最後の高校生活でもあるし、今後とも出来るだけ、寮のいい所を自分のものにして出て行きたいと思ひます。

司会 皆さんどうも有難う御座いました。

『学生らしい五高生』——市民に聴く——

本校も、創立以来六拾有余年となつた。その当時校庭に植えられた姫子松も、亭々として青空を摩するばかりの巨松となり、あの折敷かれた踏み石は、数多の先人に踏まれて身を薄くして、その間の歴史の長さを物語っている。併して、此の半世紀の間、伝統なる剛毅木訥の気風に養はれて来た龍南健児が時勢の転変にも屈せず西すの地に歩を進めて来た。がその歩みが遅しく、力強いものであればある程その残した足跡は美穢の如何に閑せず、偉大なものであつたに違ひない。書生さんと親しまれ、熊本の街狭しとばかり闊歩したものが果して如何なるものであつたらうか。此等を第三者なる市民に聞いてみよう。

此の記事に如何程のニュースバリューがあるかも疑問だし、結論も杖を引き軒に佇まずとも得られうるものかも知れぬが、脚を棒にして、次の様な事を聞き囁つて来た。

五高生といふ言葉と俱に連想されるバーバリズムを如何に感じ如何に見て来ているか。

アナウンサー曰く、五高生の所謂バーバリズムは、不潔でもあるし、近代性にもそぐはぬ。近代的人間であるなら当然外面にもそれらしく現はれて来る筈だ。

熊本インテリ女性の女専生は、五高生だから皆が許していますが、あまりひどいのは不潔で不快な感じを受けます。でも程度の問題ですし、寧ろあまり綺麗に身を構っているのも学生らしくない様に見えます。不潔不快の漢字を与へぬ程度ならバンカラの方がよいです

わ。

一 中年の紳士は、民主主義の時代になって今迄のままのほうかと思ひますね、少なくとも不快な感じは人に与へぬ程度のを望みます。

龍南衰へたりの声の高い時、往年の五高生と今の五高生は如何に違っているだらうか。

老婦人、今も昔も同様に可愛らしい存在ですね。でも気魄と言ふ点では昔の人が強かった様ですし、自覚もあつた様ですね。人が大きかったと言ふか線が太かったと言ふ感じですね。

一 労働者風の若い男、見た所今の人の人が感じがいいですね。

フロイントのマダムが茶房より眺めての感想は、何ちらかと言ふと、今の方が学生らしくない様です。昔の人が所謂高校型とでも言ふんですか、酒もよく飲んでいましたが勉強もしてましたよ。それに今の人の様にアベックで街を通る人もなかつたし、時勢なんですかね。店には近頃学生さんは殆ど来ません。

では、新制大学に対しては、

勿論師範教授とか専門学校の生徒は、綜合大学絶対支持であつた。奇異なのは、バーバリズムに憧れている中学生が教育の平等の為に

(成績の良いものの偏在を防ぐ為)綜合大学案に賛成していてをり、街の青年に五高の存置を希望する声のあつた事である。五高が無くなる事は惜しい、併しその立派な校風を新しい大学の中に生かし、よりよきものへの発展を希ふ声が大部分であつた。

では残り少くはあるが五高生に望むものは。

新しい時代を感じてもっと清潔になつて貰ひたい事が概ね一致した各層の意見である。

一人の学生の言分として、五高生は保守的な傾きがある。もっと進歩的になつて呉れ。

女専では、プライドは五高生としては飽く迄必要です、がそれに自惚れんで貰ひたい。五高生といふ言葉に甘えないで欲しい事と、学生でも社会の構成員だから、或る程度の社会的エチケットは必要なのではないでせうか。人の感情を無視した無作法にならぬ様に、少しは学んで貰ひたいが決して気障になつてもらひたくはありません。それとも少し熊本の文化活動に努力して貰ひたいもんです。

最後にアルバイトは、

熊日の社会部長談としては、それは結構です、が飽くまで学生らしくやるべきで、唯利潤のみに走つては面白くもないですし、学生を看板にしてする事も好ましくありません。結局アルバイトをやつても、プライドを忘れない事ですね。

又マダム・フロイントは言ふ。流行的で真に労働を理解してない。それに苦しいと言つても大都会程ではないので真剣味が足らぬ様に見えますよ。

結局一日中歩いて、五高生が熊本では、最も真面目な、感じのよい学生として目されている事を探知した。この様な感じのよさを与へて幕を閉ぢる事は、皆と俱に慶嘉するに足ると俱に、新しく発足する者へも譲り渡して行きたいものだ。(昭和二三・一〇・二五)

部報

炊事部

最も現実的なそれだけに最も重要な寮生の食生活を担ふ炊事部も、清新澆刺たる一年生委員を迎へ、足許をしっかりと見つけて第一歩を踏み出した。

我々部員の理想とする所は、最小の費用で最大の効果をあげる、即ち食費を出来るだけ安くして、しかも出来るだけエッセンの質を良くするといふ事である。しかしこの極値を求めるに微分すべき方程式が見出せないのである。そこで当然考へられる事は、何れかを一定にするといふ事である。即ち会費を一定にして最大効果をあげるか、エッセンの質量を一定にして最小費用にするかである。如何にも重大問題の如く見えたが、これを数学的に考へると、『x軸とy軸を変換しただけで、極値は同じ事である』といふ事に気付いた。而して後者は食費不足、エッセンの質量を一定にする事の困難より、我々部員は前者即ち食費一千円のもとに於て最大効果をあげるといふ事に邁進し始めたのである。

かかる概念的な呑気な事を言つて居られるのは、船が順風についているからである。即ち遅配欠配全くなく、燃料も石炭が必要量は配給があるのである。細かな点に就いては、種々問題もあるが部報として知らせる事でもなく、唯一つ場所違ひであるかも知れないが言つて置きたい事がある。それは順風について進む船に大きな摩擦抵抗を加へるものとして、食費の滞納といふ事である。炊夫の給料すら払えず、あちらこちらに借金といふ哀れな状態に対し、寮

生各人が責任を感じて載きたいと思ふ。(前田記)

生活部

寮は我々寮生にとつて暖かき家庭でありその柔かい空気の中に我々の人格は成長する。

この寮をより心地よき住みよき所にしたいのは人情である。その責任の一端を受持つて微力乍ら尽くして来たのが生活部である。一学期に前田部長以下七名人員にも不足せず、定例の煙草酒の配給其の他寮生の生活必需品等を斡旋し、微か乍ら活動を続けて来たが、前田氏の炊事部への移動を初めとし、部員の大半を失ひ現在僅かに三名を残している。従つて活動も意の如くならず、月毎の煙草の配給に追はれ勝ちな状態にある。段々と近づいて来る冬に備えて幾分なりとも寮生に木炭を配給したいとは思ふものの、最近になり寒期の寮内の木炭使用が許された為活動が遅れ、これ亦意の如き交渉ならず、迫り来る厳寒を思ひて部員一同頭を悩ましている次第である。鰻上りの物価騰貴の折から幾分なりとも安価な生活必需品を諸兄に与へたいとは思ひ乍ら、そこ迄行き届かぬ様な状態にあるが、出来る限り努める積りである。筆を置く前に一言苦言を呈す。配給期日の厳守、只これだけの事である。かかる容易になし得る諸兄の協力が無い限り、我々は不必要な事に貴重な時間を割かねばならない。(堀記)

ホール部

ともすれば単調に流れかさかさに乾き勝ちな寮生活に変化と潤ひを与へるために、過去数ヶ月間部員一同出来るだけの努力をして来

たつもりですが、省みて寮生諸兄の期待に充分沿ひ得なかつた事を遺憾に思っている次第です。新学期の初に当って、我々はその仕事の多様性に基き、各々事務を分担して能率の増進をはかりました。先づ新聞ですが、現在寮では、朝日、毎日、西日本、熊日の四新聞を取って居り、寮生諸兄も時には部数の不足を感じる程に閲覧室を利用して居る様です。一方、個人購読の方も割当部数が少く希望者に行き渡らせる事が不可能でしたが、担当委員の努力により部数も次第に増しつつあります。雑誌は世界、中央公論、人間、文芸春秋等の主要雑誌が毎月平均七冊位入っています。新学期から新しい試みとして貸出制を行っていますが、利用者は割合に少く、限られている様です。もつと一般に利用されん事を望みます。音楽関係の委員にも人を得て、毎月一回又はそれ以上のレコードコンサートを計画しました。何分寮に電蓄が無く、レコードが少いのが障碍となつて意の如くなりませんが、担当委員の奔走によつて毎月欠かさず行っています。次に大学の動向を知る為と、四月から東京、京都、東北、九州各大学の大新聞を取り、之を中央廊下に掲示しています。知命堂階下は、ピンポン室として盛んに利用されている様ですが、階上は近頃あまり使用されない様です。又、仰光館宿泊室は屢々先輩、寮生父兄や他校よりの来訪者が宿泊され、去る記念祭には大いにその役割を果しました。

残された後一年の生活を最後まで楽しく有意義に送る為に、委員諸兄の今一層の努力と寮生諸兄の盛上る熱と意気を去る者として切に希望しながら筆を止めます。(田鍋生)

衛生部

寮の衛生設備は薬品の小量、水枕、体暖計位のもので、三百人の大家庭をまかなつて居る習学寮としては甚だ不完全の物であり、又寮生諸兄のある者は余の部屋へ来て、豚小屋同様だ正に非衛生部だと罵るものも居るが、にも拘らず現在まで大した病人も出さなかつたのは、一に寮生諸兄の智性に基く衛生思想の普及徹底と、更に厚顔ながら我々衛生部員の目に見えざる汗に賜なる事を諸兄に銘記して貰ひ度い。

入浴の件に関しては、一週間ごとに沸かす予定であつたにも拘らず、記念祭の行事その他の混雑のため、実行出来なかつた点に就ては衛生部として諸兄に深くお詫びする次第である。今後出来得る限りの努力を致す積りである。

寮生諸兄も願はくは衛生部員の心意を解し一致協力以て寮衛生の徹底を期せられん事を。(本田記)

図書部

二学期は記念祭前迄、借出しをせず、これは或程度は部員の怠慢であつたから、寮生諸兄に対し済まなくも思っているが、寮生諸兄が図書室から借出した図書をなかなか返納されぬがその最大原因であるので、その為図書部員は『借出しは未だか?』と聞かれる度に、甚だ肩身の狭い思ひをして来たのである。それで、皆図書部員の苦衷を幾分なりとも諒とされて図書はなるべく早く、殊に休暇中借出の図書は休暇が済んだら、直ぐ返却をされる様に、貴重なスペースを部報に提出されたこの寮報を通じて皆にお願ひしたいと思ふ。一

学期中の図書利用の程度を見ると、昨年度より約一割減っている。が、これは寮生の体位がそれだけ向上したことを意味しているのだろうか？

利用者数を各寮別に見ると、一番多いのが三寮、あとは図書室への距離に反比例して少なくなっている。寮生は皆夕食を摂るのであらうし、四寮生を除けば、すべて図書室の横を通る筈であるのになにに少いのは何故だらうか？寮生がものぐさなのだらうか、寮の食事が悪くて図書室に足を運ぶのに失はれるエネルギーが惜しいのであらうか、若しこのいづれかであるならば、お寮生のものぐさ及び配給制度よ呪はれてあれ!!

読まれる本は、各寮共小説が圧倒的に多い。そして一、二、三寮は大体その傾向が似ている。何でも彼でも手当たり次第に読まうといふ意欲が見える四寮はいふと、同じ小説でも、纏ったものとか長編とか系統的(?)に、又悪く云へば為にする所があつて、善く云へば読む前によく選んでから読む人が多い様である。相当注目すべき現象である。又、一、二、三寮生に宮本武蔵がよく読まれ、四寮生には比較的Fの部分から借りてゆく人の多いのも面白い。四寮にはマルスが祀つてあるのかもしれない。

最後に寮の図書は一見旧い様に見えるが、巷に出ている新刊の大半は寮にある図書の□版である。これは今度一年生部員の協力により原簿を作製してみて分かったことである。諸兄の御利用を希望する。(井上記)

運動部

『健全なる精神は健全なる進退に宿る』とやら、運動によって大いに明朗潤達の気を養ひ□と□すれば沈鬱になりがちな習学寮に、清新の気を吹き込んで戴きたいものである。汗を拭きながら、金峰山の落陽を仰ぐ時の気分は、及格別なものだ。

運動部は終戦後一時活動を停止していたが、全寮制の希望により、昨年一月復活し、既に一年に垂んとしている。顧ればその足跡は遅々たるものであるが、運動部として全力を尽して、やって来た積りである。現在、遊動器具は庭球・卓球・籠球・砲丸・円盤等、野球具と二、三のボールを除いて、殆ど揃っているから、寮生諸兄大いに御利用を希望する。

五月二日、水清き画津湖でボートレースを行った。二寮三寮が夫々一寮四寮を破つて凱歌を挙げた。

四月二五日、野球対寮マッチで三寮優勝。一寮2-9二寮、四寮2-10三寮、優勝戦三寮5-2二寮

九月二十二日の水泳の対寮マッチは、穴井主将以下の陣容よろしく、二寮が堂々優勝した。

九月二十三日、武夫原で野球対寮マッチ、優勝戦で二、三寮熱戦の末、四対四で暗くなり引分。

十月十日、五高最後の運動会では、対寮マッチとして、人生航路、ヒトチュフタチュ、ダンケウントシモチを行ひ、一段と光彩を放つた。

今までの主なる行事は大体右の如くである。今後も寮生諸兄の御

協力で習学寮生の有終の美を飾りたい。(江本記)

寮史編纂部

『記念祭迄に寮史を完成する』との昨年度委員長の言明にも不拘、御約束の日から早や一年は過ぎ去つたのに、未だ諸兄の机上に『続習学寮史』を送ることが出来ないのは何と言つても残念である。

昨年十一月、本文始め各部史とも脱稿し、早速藤井紙工店に印刷を頼んだのだが、当時の印刷屋の見解によれば、来年(二十三年)三月頃迄には出版出来るとの事であつた。而るに、年明け、春休みが終つて、四月、五月と月日の流れる中に、未だ校正刷りの一枚さへ廻つて来なかつた。これも資本、資材不測の為で如何とも成し難かつた。

次第に業を煮やして来た部員は、池永君を始めとして、毎日のやうに熊本駅の彼方にある印刷所まで交渉と、監督に出かけ、帰つて来るのは殆んど六時頃。文字通り、総てを放擲しての活動であつた。しかるに校正刷りの入つた袋を持った印刷屋の自転車が寮の前に初めて止つたのは、やつと一学期、学期試験の直前、それも思ふやうには進捗せず、一度に十枚程度、而も、三日に一度くらいの緩慢さ、最後の校正が届いたのは、長い夏休みも既に終つた二学期の初頭、その夏休み中の校正は福山君が只一人残寮して、印刷所の交渉と共に、尽力して呉れたのである。

二学期から三人の一年生、新委員を迎へた当部は、同時に福山君の退寮。ひき続いて、十月初めには、池永君も後を追ひ、只でさへ多忙な寮史部の事務は、益々繁雑を極めたので、寺井達郎総代に委

員長の席について戴いた。兎に角、五高最後の寮史発刊の事業、而も多額の費用をかけての大仕事であるだけに責任は大きい。先輩からの購入申込も既に多数に上つているし、多額の御寄附をも頂戴しているのである。涙の出るような激励の言葉もかけられる。愈々旬日後に迫つた寮史完成の日を夢見つつ、我々寮史部員は幾年かの努力の實の稔るまで、最後の努力を続けるのである。(富岡記)

農耕部

いざ食糧増産といつても我々は本職の百姓ではない。寮生殆んどに経験が無ければ、之の指導に当るべき委員もすぶの素人とさいて。更に道具といつても高等学校に農学校みたいに立派な物のある筈がない。あるのは唯申訳けのやうな鋤ばかりである。それで、まあ我々の手に負へさうなのは甘藷である。これならば余り手も要らないし比較的簡単である。我々の下手な仕事でも、作らぬより作つた方がよい事は明かである。去年に例をとつても、夏休にまでかかつて、植えたことは植えたのかと云つた具合だったので、自然の恵は大きい、自然は巧みである、秋には全寮生の十何日かの甘藷が収穫出来た。去年のこともあるし、今年は早目にと大分早くから生徒課との交渉を始め、東光原に若干の土地を借り、道具の借用、苗の入手に委員が非常に尽力したにもかかわらず、苗があつたかと思へば日照りが続き、雨が降つた時には苗が入らぬで、どうにかかうにかやつと試験前に植付けを完了した。

毎年さうであるが、かういふ仕事には寮生の出席が非常に悪い。寮生の義務と定めても出席するやうに口を酸くして叫んでも、無関

心な態度をとる者が多いのは甚だ遺憾である。他人の労した後で甘い汁を吸はうといふ考へは、最も卑劣な吐棄すべきものである。昔のやうに強制する事がむづかしい時代だけに、委員の心労は大きかった。

幸ひに今年は昨年より食糧事情もよし、一方炊事部の活動もあり、我々の作った甘藷も左程通説に必要を感じないのは、聊か拍子抜けの感なきにしも非ずであるが、喜ばしい現象である。(今村記)

2 「私の『続習学寮史』補遺」

昭和二十三年

総説

昭和二十二年に自動的に新制高等学校に昇格した全国の旧制中学校では、この年の春、中学五年生がそのまま新生高等学校の三年生になった。中には旧制高等学校を受験して進学する者もいたが、旧制に進んでも、そこは一年限りの修了で、新制大学には再度受験しなければならぬことはもう分かっていた。六三三制の学制改革が決定したとき、それと連動して旧制の五高は昭和二十三年度をもって終わり、特別措置として三年生だけが二十四年度も残ることになっていたのである。では五高はどうなるか。新制大学になる他はなかった。熊本県は、県内にある各官立学校を併合して熊本総合大学をつくる、そのための期成会を昭和二十二年以来結成し、総合大学誘致県民大会を開催して各方面に働きかけた。これに対して旧制

のままであるべきだとする反対運動は学生の間で活発に行われ、授業料値上げ反対ストにつづき、新制大学法案は学問の自治を奪うものであるとして無期限ストを敢行したりした。

片山内閣の総辞職、芦田内閣の退陣、吉田内閣の再登場と解散、という不安定な政情のもとに、帝銀事件、太宰治の自殺。「湯の町エレジー」や「異国の丘」が流行った。

寮では旧制高校最後の一年として伝統の行事が華々しく執り行われ、十一月には『続習学寮史』も完成した。

各説

新年歌留多会

(略)

運動部の復活

戦時中の球技廃止、運動用具不足などの事情により、その活動が著しく衰退したため、学寮会の運動部は廃止されたばかりであったが、寮としてはやはり運動行事を行う際不便なことが多く、一部の委員による熱心な提唱もあって、一月の定例委員会で復活した。委員には、気鋭の一年生五名が選出された。

五高自治会の発足と龍南会の解散

一学期、停電事情に絡む試験延期問題は『続習学寮史』に詳しいが、寮生大会まで開いた大問題だったにも拘わらず結果は竜頭蛇尾に終わった。これは試験延期と自治問題を別個に考えるという本島校長の裁定で決着し、期末試験は予定通りに行われた。残された自

治問題は、三学期早々、第五高等学校生徒自治会が結成されることで片が付いた。これは、当時、寮にいた古波倉さんに聞いた話である。あのころ、何かゴタゴタがあると直ぐ習学寮の食堂で集会があったが、そういうことで記憶に残っている何かございませんか、という質問に対する返事としてである。新里さんにも確かめた上での返事であった。古波倉さんは一学期の寮史部員、新里さんは同じく風紀委員だった。

五高には教授と生徒で構成する龍南会があった。二月に生徒大会を開いて龍南会を解散し、生徒自治会を結成したとき、龍南会総務委員だった小山教授が、「龍南会は教授も構成員なのに生徒だけで解散するのはけしからん」と苦情を言われた。生徒側の言い分は「五高の主権者は生徒であって、教授は人的設備にすぎない」とするものであった。小山教授は慥然とした表情で「なるほど、そういう考えもあるのか」と、それだけだった。これは、その後、寄せられた新里恵二氏の補筆原稿による。

新里氏の補筆では、龍南会は、このとき解散・消滅したように考えられるが、土橋稔氏などは実際、最後まで龍南会総務だったというから、龍南会は組織替えをして存続したと思われる。土橋に聞いてみる必要がある。

卒業生送別大晚餐会

(略)

新学期行事

四月十一日、最後の五高生が入寮し、入寮式に竹原東一生徒課長

出席。この日、NHKで寮歌全国放送、夜は武夫原でファイア・ストームが行われた。

これは『熊大寮史』の記事であるから日付に間違いはないだろう。単に思い出として寄せられる情報には日付のないものが多い。それだけに、資料をもって書かれた『熊大寮史』の記事は貴重である。しかし、入寮式の日の夜、武夫原のファイア・ストームがあったとすると、新入生はいつ武夫原頭を覚えたのだろうか。新入寮生には寮歌演習と称して、夕食後、廊下に並んで総代及び班長が寮歌を覚えてくれた。昭和二十二年の時は、寮歌演習で寮歌を覚えた後、ファイア・ストームがあったように記憶しているが、その辺は曖昧である。ただ、武夫原でのファイア・ストームはよく覚えている。何回目かの武夫原を歌って終わりがけかけるとき、本島校長が現れて、もう終わるのか、六十周年だぞ、と声をかけられた。それで、また何回か武夫原を繰り返し、あまり声を張り上げたので一週間ほど喉をつぶした。ということとは、このファイア・ストームは二学期の六十周年記念祭のときの記憶か？この経験があったので、この年は、少し手加減して歌ったような気がする。NHKには一寮の飯尾憲士総代が有志を引率して歩いていった。二寮の総代は寺井達郎、三寮後藤昭、四寮高尾寿郎の各氏。ともあれ、二十三年の四月にも寮歌演習が行われたとすれば、これは特筆すべき項目である。なぜならば、五高生による五高生のための五高生の寮歌演習は、これが最後の寮歌演習だったからである。*永田紘一氏の日記によると、この年の寮歌演習は四月十二日(月)から二十三日(金)まで。

同好会誕生

四月二十一日、新学期第一回委員会。同好会規定をつくる。例えば竹島紀元氏らの鉄道同好会、島谷昌宏氏らの俳句同好会などができた。その他、寮内に於いては原則として和服の際は袴着用のごと、日曜・祝祭日・土曜を除く平日の放課後夕食時まで以外の楽器・ラジオの使用禁止、寮内での流行歌禁止などを再確認した。

袴着用のごとについては、飯尾総代から、次のような思い出を手紙でいただいている。「会議室から高尾が俺を呼びだしてきた。大抵の会議にはさぼっていた。〈大問題が提出されている。直ぐ来て何かしゃべってくれ〉という。廊下をハカマなしで歩いてよいようにして欲しい、と一・二年生の要望が出ているようであった。出かけて行った。ハカマを持たぬ者は、きちんとズボンをはいて部屋からであればよい。着流しで廊下を歩いてはならぬ。廊下は公道である。私室の延長ではない。廊下でキンタマを出し、ヘコだけで飛び跳ねてよいのはストームのときだけである。以上」と終わった。やはり、ハカマ着用は崩せなかった。」

さらに手紙は、酒の話として聞き流せ、といいながら、寮雨のことにも言及している。「一年のとき、寮雨禁止問題が会議室で討議された。禁止の方向に向かいかけていた。当然であろう。階下の者は、チョロチョロ階上から滴ってくる音に耐えられまい。しかし、俺は立ち上がって言った。ハカマには、大事な入学の目的を持ってやってきた。将来、百万の敵があるうと、どのような反対者がおろうと、是と信じたところを貫くための姿勢を培いたいものである。」

寮雨をやるには、相当の勇気がある。しかし、心を鬼にしてやるのである。反対者の階下の者は、それぞれに話し合うべし。禁止と決めてしまうことに反対である。そして俺の意見がなぜか通過した。」このへんが、五高習学寮の面白さである。

新入寮生歓迎大晩餐会と対寮マッチ

四月二十四日、新入寮生歓迎大晩餐会。二十五日、野球対寮マッチで三寮優勝。各寮総代は、少なくとも攻守ワン・イニングは出場しかもピッチャーとしてというのが慣例であった。ピッチャーゴロで、ボールはすでに一塁手のミットの中にあるのに、果敢に滑り込みを試みなければおさまらない者もあり、上級生の中には一旦出塁するとベースを持って走り、常にセーフだったという猛者もいたという。

弁論大会

(略)

対七高戦

大正十五年の不祥事件以後断絶していた野球対七高戦が復活した。これが戦後になって初めて最後の対七高戦である。体育会には応援部がなく、習学寮全体が応援団のようなものであった。団長は一寮総代ということになっていたが、いろいろあって、この年の五高の応援団長は落第生の兼川晋ということになった。場所は水前寺球場。この項目を『熊大寮史』からひろくと「五月二十一日、熊本駅頭に七高選手及応援団を迎え、五高七高応援団長の布告文のやり合いは黒山の観衆で埋まる。五高七高戦は試合もさることながら応援に力

を注ぐのが常で、今回も応援団長、副団長を始めリーダーとして二十名を選出し、毎夜知命堂にて応援の練習を行った。五高は白軍、七高は赤軍というのが伝統で、白旗を小学校に借りに行ったり、太鼓を神社に借りに行ったりして万全を期したのである。つづいて歓迎街頭ストームに移る。ストームは激烈を極め、特に辛島町では車という車をストップせしめて道路せましと踊り狂う。はじめのうち電車の乗客も珍しげに見ていたが、三十分、四十分とたつと腹を立て始め警官の出勤を見るほどであった」とある。最後の試合では五高が三対二で負けていたので、挑戦状は五高が読む番だった。七高の応援団長は空白の巻紙を宙にとばして、喝！と一声応じた。敵ながら味なことをする天晴れな応援団長であった。しかし、試合は一対零で五高が勝った。手元に遺る挑戦状の日付は五月二十三日になっている。*この記事を読まれた先輩から二、三、新しい情報が届いた。一つは龍南会の緒方道彦氏（二十二年卒）のご指導で、「対七高戦は昭和二十一年にもあった、それが正式な対七高戦かどうかは知らないが、でも確かNHKが武夫原から実況放送した」というものである。『続習学寮史』に記録がないので、私は昭和二十三年の対七高戦を戦後復活の第一戦だとばかり信じて疑わなかったが、訂正の必要を感じて当時の資料を捜していると、選手の壮行会を武夫原でしたときの「激励の辞」が出てきた。私が巻紙に筆で書いた仰々しいもので、その冒頭は次の通りである。

激励の辞

春萌え初めし土の香はいつか緑の野に移りて、甦りたる武夫原に

初夏の風薫るとき、繰り返すてふおだまきに早やひとせは巡り来たり。去ぬる日、錦江湾をくれないに染めし夕燦に柏の旗は低迷して色なく、悲憤の涙に咽びしより一星霜！憂恨の日は再び訪れり。耳朶を打つ陣太鼓、狂乱の血は滾る雄叫びに、想起せよ、兄等敗残の苦杯に噎びし宵の記憶を。このとき、誰か能く断腸の痛みを覚えざらむや。……

これを見ると、あの対七高戦を、回想するときの微妙な心理が、次第にそれを誇大なものに育て、単に最後の対七高戦を、戦後最初にして最後の対七高戦とまで思いこむようになったものと考えられる。戦後復活の第一戦は五高の武夫原で昭和二十一年、第二戦が七高グラウンドで昭和二十二年、最後が熊本の水前寺球場ということである。もう一つは永田耕一氏の日記で、それによると、五月十九日、武夫原で選手推戴式並に応援団結成式。二十一日、街頭ストーム、熊本駅頭に七高応援団を迎える。試合は二十三日、五高は後攻、五回の裏に一点入れ、そのまま逃げ切つて〇対一Aで勝利した。最後の一つは同じく先輩の新里恵二氏の情報である。

「私は龍田山三四郎というペン・ネームで、五高応援団を揶揄する文章を『熊本日日新聞』に投稿して掲載された。十年ほど前にコピーを貰ったが、なくしてしまった。五高が勝ったとき、自然発生的にストームが始まったのを記憶している」というものである。新聞の投稿原稿も是非、入手したいものである。

文理科対抗ポートルース

この年、文理科対抗ポートルースはなかったと憶えていた私の記

憶違いを正してくれたのは中野栄治氏である。『熊大寮史』によると、別項に「対七高戦、文科対理科のボートレースも無事終わった習学寮に一波乱が生じた……」と飯尾総代の辞任を記録している。日付はないが、これから見ると、対七高戦の方が先に行われたようである。ボートレースについて中野栄治氏は次のように書いている。「私はボートレースに参加しました。〈不知火燃ゆる〉を高唱しながら、何度も江津湖まで歩いて行って、仁礼修君などからカッターの漕法を教わりました。当日、試合終了後、直ちにボートを棄てて、何人かが水の中に飛び込み、羽織袴に赤襷をかけた応援団の乗っているボートをひっくり返そうと泳ぎ始めました。オールで追っ払われて沈めることは出来ませんでした。ふと、岸の方に目をやると土手いっぱい観衆が腰を下ろして見物していました。そのとき目の前に白いものがゆらゆら漂っていました。禪です。誰だ、こんなものを流した奴は……と思いつつも、何か妙なので、腰の回りを触ってみると自分の禪がありません。慌てて追いかけて、水の中で身につけました。気づかずに陸に上がれば大変な恥をさらすところでした。あれだけの観衆の前ですから、思い出しても顔が赤くなりません。」理科が赤、文科が白の紅白対抗戦であったが、どちらが勝ったかについて中野氏は触れていない。しかし、氏は文科だから、すくなくとも一年の文科は負けたのだろう。それで赤の応援団のボートを転覆させようとしたのだろう。*熊本の名物としても市民に親しまれた江津湖のボートレースは五月三十日。文理科各学年A B チームで六試合、三対三で勝敗は所要タイムの総計ということにな

り、文科白龍一一分二秒〇、理科紅龍一〇分五五秒九で理科の優勝となる。他に、対寮レースや余興として地元青年団のレースもあった。本島校長去る

(略)

飯尾総代辞任退寮

(略)

小山新生徒課長

(略)

各寮日誌の自然消滅

(略)

授業料値上げスト

それまで高等学校の授業料は年間六百円だったのを三倍に値上げするとの発表があり、六月二十三日から全国の大学高専で同盟休校がはじまった。古波倉さん経由の新里さんの話によると、二月に発足した五高自治会は全国高専連絡協議会(全学連の母胎組織)に加盟してこのストに参加した。ストは関東から始まり、逐次南下して、五高は二十六日、七日だった(『熊大寮史』によると「六月二十五日、二十六日(スト)は考查中にも拘わらず決行された」とある)。*この記事に対して、新里氏から、以下の訂正稿が届けられた。「正確に言えば、当時の組織は全国高等学校生徒連絡協議会(全高連)の下に九州地方高等学校生徒連絡協議会(九高連)があり、それに、五高、七高、佐高、福高が加盟して、議長は私(新里恵二氏)だった(九高連は十月から九州地方高等学校生徒自治会連合と改称した)。ス

トは六月二十三日が関東以北、二十四日が中部・近畿、二十五日が中国・四国、二十六日が九州、二十七日が全国で、五高は二十六日、二十七日であった。」ということは、『熊大寮史』の日程が不正確だということである。

また、次のようなことも書かれている。「松尾総代を訪ねて、明日、ストを提案するから賛成演説をしてくれるように頼みに行ったことがある。松尾は、学生がストをすることが良いか悪いか未だよく判らないので、悪いけど引き受けられないと断った。ところが、翌日、生徒会で、提案理由説明が終わると、松尾は発言を求め、実は昨日、新里君から賛成演説をしてくれないかと言われて断ったが、今日の討論を聞いてよく判った。私も賛成だと発言してくれた。それで大会の雰囲気 garaり と変わった。闘争指導にかまけて、松尾にちゃんと礼を言わなかった事を未だに反省している。」

帰省証明書の発行停止

(略)

全学連の結成

九月十八日に大学・高専を含む全学連の結成大会が開かれている。五高がそのような上部組織に加盟するか、しないか、そんなことを討議するのには、寮の食堂はもってこいの場所だが、こういうことに関して記憶している人はいないのだろうか。高尾さんに聞くと、寮は組織的に龍南会とも自治会とも違うのだから、そう簡単に場所は提供しないよ、ということだった。*全学連が結成されたとき、五高はすでに全高連に加盟していたので特に生徒大会は開かず、そ

のまま全学連に移行した。東京の結成大会に参加したのは大江志乃夫氏(二十五年卒)である(新里氏の補足原稿)

『続習学寮史』完成

『続習学寮史』の奥付によると発行年月日は九月二十日になっている。しかし、『熊大寮史』は「印刷の方が遅れ、昭和二十三年十一月になって始めて先輩、寮生の手に移ったものである」と書いている。そういえば、坪井の角の味噌屋の前で、出来立ての『続習学寮史』を積んだりヤカーを引いて帰る寮史部の連中と入れ違った記憶があるようだ。彼らはマントをかけていた。少なくとも九月の陽気ではなかった。田阪耕一氏の金銭出納帳には、十一月二十日、寮史二五〇円とある、とのこと

六十一周年記念祭

恒例の十月十日から三日間。その前夜祭で読まれた三寮総代後藤昭氏の式辞は次の通りである。

「原頭 月見草散り早や幾とせ 六十路にあまる齢いま此処にきわまり ふたたび新たなる生命に還らんとする最後の記念祭を迎へそこはかとなく湧き出づる一抹の思情無きを得ざるも亦宜なるかな思ひ馳する古城創業の昔 国土三十学寮の基を開き 木訥の風 既に此処に芽生ゆ爾来星霜六十年 自治の流れかかげ来たりしも 今また最後のメタルフォーゼにあたり宇内の動き安からず 前途に苦難多からん

時勢は流れ移りゆく 白川の瀬のそれなれや 『三百の生徒各々燈に依り 沈思緘黙静かなること僧の如し 此の中に自ら飛騰の勢

ひ有り 他日幾多の鯤鵬と化らん』（五高が龍南の地に移った当時の習学寮生がつくったと云われている漢詩の引用） 宜なるかな 国士濟々習学寮 見るべし此の氣 思ふべし其の質 余りて文足れるを 建学の風斯くの如し

牧笛のどかに群羊を追ふ龍峰の南 蛮風一たび道にもとりては 木訥或ひは其の実を失ふ 腐朽よ朽ちよ滅び行け 若きみどりよ萌えよかし 若しそれ純朴剛毅にして 人の子のところに通ふものあらば 斯の氣を生める山河と共に 永久に流れ尽くることならん

さはれ今宵一夜の宴 六十年の歴史を秘めて 静かに更けゆく習学寮を 友よ 心ゆくまで語らうではありませんか

初日は五高創立六十一周年記念祭式典が講堂で行われた。竹内校長の祝辞、職員総代・小貫教授の挨拶、生徒総代・土橋総務の祝詞、次いで祝電披露のあと、記念祭歌「阿蘇の峰より」の斉唱で終わる。この日、文化講演は矢内原伊作だったという者がいる。

記念祭の行事は、音楽会、演劇会、映画会、美術展、運動会、習学寮の公開など。

音楽会は、九日、本校講堂で五高文化協会主催、田崎教授指揮のフライエクソストは国立音楽学校の応援を得て第九交響曲を合唱、皇帝を演奏した。十一日は九州学院講堂で一般公開演奏、十二日はNHKからラジオで県内に放送された。

大運動会は十日、武夫原で、玄・紅・白、三龍の対抗戦。玄龍は理科一・二・三組、紅龍は理科四・五・六組、白龍は文化一・二・三組。終日、熱戦して総得点では三軍、差はなかったが、一位競技

の多少で玄龍の優勝が決定、樋口教授から優勝杯は吉武玄龍応援団長に授与された。

演劇発表会は十日、昼夜二回、マルセル・パニョルの「マリウス」。辛島町の歌舞伎座をかりて、熊本女専の演劇部も共演。見終わって、秋冷の夜道を歩いて帰ったのを思い出す。熊本女専は、この日、講堂前で開かれた炊事部主催のバザーにも協力参加した。

映画会は、十一日、電気館で松竹映画『吾が生涯の輝ける日』、十二日、銀映でソ連映画『愛への誓い』を映研の主催で開いた。美術展は、どこで開かれたのだろうか。瑞邦館か。「寮報」に吉岡豊道氏の原稿があるが、日時、場所の記載はない。見出しに、「美展ヲ終ヘテ」とあるだけである。弁論大会だったか、討論会だったか、テーマは「ダンス是か非か」というのがあったと記憶していたが、「寮報」にはない。とすると、これは六十周年記念祭のときのことかも知れない。

十一日夜は、五高創立六十一周年記念大晩餐会。この時の炊夫長は、炊事部の島谷昌宏氏が自宅の割烹旅館から連れてきた花板の竹井さんだったから、習学寮には勿体ないくらいの料理だったことだろう（ただし、食糧難の時代だったから材料は自慢できない。メニューは学寮会部史の炊事部の項を参考されたい―略）。

習学寮では、運動会と同時進行で全寮を一般に開放、一寮廊下には漫画展、各室それぞれに住人が趣向を凝らしたデコレーションで飾り付けた寮史展が公開された。男女共学になってからも、習学寮の中に入ってきた女生徒はいなかったのに、この日、理科二名（紫

藤文字・安成和子両氏)、文科二名(岡村栄子・安永道子両氏)の女生徒が一般開放ということで恐る恐る習学寮を覗きに来た。彼女らを狙って考えられたものでもないだろうが、覗きのような窓口があつて、覗くと顔が墨だらけになるといふ仕掛けを施した部屋もあつた。全寮の一般開放に関して『熊大寮史』は次のようなエピソードを記録している。「この日、デコレーションでもって寮を公開、寮生は夫々色々の考想の下に数日かかって自己の部屋を飾るのだが、一寮二十三室は公開前日となつても何もしていない。総代以下ペンペン怒っている内にその日は暮れたが、夜半その部屋の清水(敏雄)氏は同室の者有志(西岡鐵夫氏ほか)を伴つて市内の看板のめぼしいものを集めて来て、当日皆をアツと云わせた。即ち、北署、自由党県支部、尚綱校、ホテイ書林など数十の看板を一夜にして集めたのである。而し後になつて北署から呼び出しがあり、責任者清水氏は始末書を取られたが別に説教されるという事もなく、署長にお菓子の馳走になり世間話をして帰寮したという事である。集めた看板をそれぞれの所に返しに行く時はホータイを巻いていったという。」

このエピソードは、平成十年十一月十四日、東京メルパルクで開かれた五高入学五十周年記念同窓会の席で、本人たちの口によつて若干修正された。二人は秋山邦博氏のインタビュに依つて、主犯は西岡氏の方であつたこと、北署の看板は、立ち小便で監視の目を引きつけ、その際に二人掛かりではずしたこと、それを習学寮玄関の習学寮の看板と差し替えたこと、そのため小使さんの通報で北署にバレたこと、始末書は夕方までねばつて書かなかつたが、署長が

親子井をご馳走してくれたので情にほだされて書いたことなどを披露した。

寮歌募集と当選者発表

昭和二十三年度寮歌は文科一年の杉野直道氏が当選した。寮史編纂部の依頼で選に当たつたのは上田英夫教授である。杉野氏は日経に入社、その後、テレビ東京に移つたが、五高修了五十周年記念同窓会を記念して出版された末子会文集によると、歌詞は次の通りである。

- 一、黎明の鐘 野に響き 紅染むる武夫原に
仰ぎて集ふ若人の 胸に溢るる白金の
高き理想を君知るや
- 二、阿蘇の噴煙やすみなく 六十路の色の移り来て
平和の歌 満つる時 饗宴の空の遙けきに
懐旧しほし息みがたし
- 三、真理を探る若き日の 憂愁かくさぬ双眸に
さみどり萌ゆる銀杏城 自由の学に憧憬れつ
青春の氣に咽ぶなり
- 四、秋水冴ゆる白川に 相呼ぶ友と逍遙へば
情熱に酔へる四棟寮 自治の烽火も赫々と
龍田の山に映ゆるかな
- 五、ああ龍南の夢深く 剛毅木訥はぐくみし
健児の意気や留むべし 久遠の幸を讃ふるは
歴史も光栄の習学寮

この歌詞に作曲を募集したところ、八曲の応募があり、そのうち甲斐昭良氏（理科四組）が当選、平成十一年十一月十四日の五高修了五十周年記念末子会全国大会（熊本メルパルク）の席上、発表された。五高最後の寮歌である。

総代選挙

（略）

規約改正

『熊大寮史』によると十一月三十日、定例委員会で大幅の規約改正。

一、食券制の導入。食費滞納防止と配膳業務の合理化のため炊事部提案。

二、社会部設置。寮生の社会知識向上のため民学同の要請。しかし、年末からの大学法案反対スト、翌年度は三年生のみという寮の実状から遂に陽の目は見なかった。

三、寮図書室の貸出しで紛失した図書は利用者が賠償すること。

音楽部ストーム

（略）

大学法案反対無期限スト

新年度から学制改革による新制大学が発足することは既定の事実で、それを覆すことは不可能であったが、その新制大学の学校行政が教授会でなく理事会によって運営されるという法案が今国会に上程されることになった。十二月七日のこの下条文相の発表が引き金となり、十二月八日、これは大学の自治を犯すものであるとして、自治会は生徒大会に無期限ストを提案し、スト権確立のための投票

が行われ五高は翌九日から全国のトップを切つて無期限ストに突入した。この時の生徒大会における決議文を『熊大寮史』は次のように記録しているが、これを起案したのは新里議長である。「日本民主化出発以来僅かに三年半、現政府たる支配階級は再び日本のファッショ化を企図し、金融独占資本の魔手は、生産・文化・教育その他の面に於いて反人民的買弁的な政策の下に、民主主義に対する公然たる抑圧を施行しようとしている。先に公務員法を制定し、労働者の基本的人権を奪い去った政府は、今また大学法の制定により吾々の学園から学問の自由を奪い、教育を植民地的に再編成しようとし、吾々五高生徒会は之に対して全面的に反対闘争を開始、民族文化の擁護と教育の民主化のために戦ってきた。然るに政府は何の反省の色も示さぬのみならず、昨日七日、国会に於いて強硬に大学法案を上程する意志を明らかにした。此に於て、吾々は過去半歳以上に亘る闘争の最後の段階に達せる事を認め、さきに自治会で決定した方針に基づき実力行使を以て、斯かる政府への抗議を行う事を決議し、且つ即日無期限ストに入る事を決議した。斯くの如き情勢は、現政府の階級性と無能によって生じた学園始まって以来最大の危機であり、且つ日本文化興亡の岐点であると断ぜざるを得ない。依つて吾々は五高自治会の名に於いて、全学園が非常事態に直面せることを確認し、此に非常事態を宣言する。依つて自治会の組織機能を非常事態に即応し敏活且つ機に応じた闘争を行う為に、自治会の規定を一時的に拡大し闘争委員会を組織し、自治会は闘争委員会の指令によって行動する事を決議する。」さらに「ストに入るや、生徒の

意のある所を容れて貰おうと教授会に働きかけ、更に街頭に進出する等活発を極めた。十二日、校長は軍政府に呼ばれ、学生がストをやるのは大学法案に対する無理解にあるとし、十三日に教授会及び全生徒にピーターズン教育部長の説明会が行われ、その後質疑応答が行われたが学生側はあくまで譲らず、遂に物別れとなった。この間、他校も続々と歩調を合わせて来た。十八日には労働者決起大会で労働者のデモがあり、学生も之と歩調を合わせた。ストの中心になったのは云う迄もなく寮生であったが闘争が長引くにつれ疲労の色も濃くなり、また年末とて漸次帰省者も現れ出し、十九日を以てストを中止し闘争を明年に持ち越したのである」と書いている。*スト突入のとき、新里闘争委員長と幹部一名はピーターズン教育部長から司ホテルに呼び出され、これは授業料値上げ反対ストとはわけが違う。教育制度の改革は占領政策の一環であり、これに反対するのは占領政策に対する反対である。したがって学生は自重して貰いたいと懇望された。食事をしながら、おだやかな話し方であったが、もちろん、民主的な投票で決定した闘争を中止することはできない、とことわった。帰りに、ピーターズンは二人にラッキーストライクを二箱ずつおみやげだと言って手渡した。新里委員長は、司ホテルに向かうとき、帰りにピーターズンが何かくれるかも知れないが、何を貰っても決して受け取ってはならないと党の幹部からいわれていた。それで、タバコは廊下の屑箱に棄てて玄関に出た。すると玄関でMPが所持品検査をはじめた。来たときに、そんな検査はなかった。ははあ、こういうことかと、党の幹部に言われたこと

に思い当たった。ポケットからラッキーストライクが出れば、くれた、くれないは水掛け論で、あわや留置されるどころだったという。二期の期末試験が一月に延期されたとは古波倉さんの証言である。木枯らしの中を街頭に立ってピラを配ったことを覚えているという寮生もいた。年の瀬も迫った十二月二十三日、第二次吉田内閣不信任案が可決され衆議院は解散した。*日本共産党五高細胞が一番多かったのは昭和二十四年一月、九十八名いた。民主主義学生同盟は四〇〇名近くいた。五高の定員が一〇八〇名で、常時学校に出ているのが八〇〇名程度だから、かなり無理なストも打てたのだと思う。ストについては、事前に出身中学別の世論調査にもとづいて判断した。大学法案反対無期限ストの時は、ほとんど不眠不休で、いつ、そういう形で打ち切るか、思案していた。そのとき、四人の女子生徒が栄養剤を差し入れてくれたことがある。有り難かった。

(新里氏の補足原稿)

ダンスパーティー

(略)

むすびにかえて

薄田千穂

戦後の五高について、「激変の時代で、一年次ごとに、経験・受け取り方が違っていた記憶があります。」と間宮勇雄氏が語られている。一八八七年に開校後、一八九四年の制度変更、戦時教育体制への対応など大きな変化はあったが、教育制度のみならず、入学する生徒の経歴、進路まで一年次ごとに変化した時代はなかった。まさに「激変」である。ここでは、公式の資料の中にほぼ出てくることはない「アルバイト」について、少し言及する。個々人の事情が大きく影響することであるが、社会状況、五高と地域の関わりの変化の視点からみてみたい。

「アルバイト」という語は、ドイツ語の *Arbeits* に由来し、旧制の学校で使われていたが、一般には戦後に浸透したものであるといわれている。五高でも、一九三八年の菊池郡花房村で行われた陸軍飛行場予定地の整地作業を行う際に、生徒たちが「Arbeitsdienst」という言葉を使っていたという証言がある。五高の生徒がどのようなアルバイトをしていたかについては、二〇〇九年に行った「戦中・戦後の第五高等学校に関する調査」で、生活の中に項目を立てて調査した。一九三八年から一九四八年入学生九八八人から回答を得ている。この中で、一九四五年入学以降の回答が七五%を占め、特に回答数が多いのは一九四七年二九人（返信五〇人に対して五八%）、

四八年一八人（返信四一人に対して四四%）である。

回答の内容は、熊本大学五高記念館叢書第五集「昭和期の第五高等学校 調査報告(三)」に掲載した。これによると、一九四三年までの入学生は、ほぼ家庭教師である。勤労働員で内職などできる状況になかったという記述もあった。一九四四年入学生は、敗戦まで断続的に勤労働員に出ており、通常の五高での生活は戦後という学年である。半数が家庭教師、中には「新円取得のため、中学校数学学年別問題集（ガリ版刷り）の出版頒布」をしたという記述もあった。一九四五年も半数が家庭教師であるが、熊本大空襲で瓦レキと化した中心部の跡片付、土木測量、物品販売、人夫作業、レストラン下働き等と、前年とは様相が異なってきた。一九四六年以降は、家庭教師のほか、物品販売、土木作業等の肉体労働など、アルバイトの内容は多様になっていった。本館裏の掲示板に、アルバイト募集の掲示が出ていたという証言もあった。

物品販売で売っていたのは、石鹸、アイスクャンデー、宝くじ、細工物、ポン菓子、サッカロリン、ズルチン等で、訪問販売もしくは街頭売りをしていた。また、石鹸売りの訪問販売については、訪問先の人々が結構買ってくれたという、熊本市民への感謝の言葉もあった。肉体労働は、ドブ掃除、トロッコ押し、道路のアスファルト舗装工事、専売公社移築工事の現場作業。帰省先での炭坑で坑外作業、造船所や鉄道工場での作業も挙げられている。また、進駐軍施設の土木作業（砂利運び、木材運び）もあった。

他には、ガリ版原稿書き、立田山の杉皮むき、郵便局の行囊整理、

電力会社の送電線鉄塔地籍調査、保険契約の増額切換えのための契約更新のセールス、市長リコール運動の署名集めなど、いろいろな仕事があり、一人が多くのアルバイトをしていることもあった。また、以前から五高生が参加していた藤崎宮祭礼の随兵の記載もあった。なお、事情は分からないが、アルバイトしたくてもなかったという記述も三件あった。

敗戦後、戦争により生計維持者を失い、財産があったとしても、インフレにより価値が下がり、経済的に困窮した人が多くいた。どうにかして学費・生活費を賄わなければならなくなる。思うように勉強が出来なくなり、進学も断念せざるを得なくなった方々がおられたことも、あらためて認識した。街の側からすると、以前、五高生は、飲食・購買する消費者としての存在であったが、五高生が売りに来る物品を購入したり、食糧を安価に提供し、経済的に支える側面も出てきていた。掲載した資料の中に、上通の喫茶店「フロイント」の「マダム」の言葉がある。「流行的で真に労働を理解していない。それに苦しいと言っても大都会程ではないので真剣味が足らぬ様に見えますよ。」ということであるが、店に五高生が行かなく（あるいは、行けなく）なったことで、本格的な労働に従事せざるを得ない五高生がいたということは、知る由もなかったことである。これも戦争の影響であったことには間違いない。

聞き取りの際は、五高・大学卒業後、社会に出られてからの話も聞いてきた。五高の卒業生が戦後日本において、どのような仕事に従事され、学校時代に培った人的交流がどのように行われたかについ

ても記録しておきたかったためである。卒業後のことで、五高とは関係ないと、業績を掲載することを遠慮された方もおられたが、社会に出られてからの活躍に、目の覚めるような思いをさせていただいた。旧制高等学校を卒業された方々が、社会の中心を担っておられた時代も遠くなくなってきた。近年は、大局を見通して行動するより、目の利益や責任の回避のみ気にするリーダーが多くなっている。人との交流によって切磋琢磨し、分野を越えた交流・視野を持ち、自主自由の精神を育むなど、人材をつくってきた旧制高等学校の教育をきちんと評価していくことが必要だと思う。

五高記念館叢書第五集をお届けしたあと、一九四七年入学の方の聞き取りが掲載されていないというご指摘をいただいていた。これまでお届けできていなかったことを伏してお詫びしたい。

二〇〇七年の五高一二〇周年記念事業で、多くの五高卒業の方々と交流させていただいてから二〇年近くになる。懇親会で、旧友と肩をたたき合う、さわやかな空気はまだ忘れられない。その後にも多くの方々からお話を聞かせていただいた。社会で地位を築いて来られた方がばかりであったが、決して偉ぶることなく、どの方にも懇切に対応していただいた。誇りをもって戦後を生きてこられた、まさに「剛毅木訥」な方々であった。

多くの同窓会にも参加させていただいた。「渡鹿会（昭和一六年卒業）」「一八年会（昭和一八年卒業）」「龍尾会（昭和二五年卒業）」「熊本五高会」「関西五高会」「東京龍南会」、五高卒業の方々との交流は、私にとって人生の宝である。心から感謝している。

昭和期の第五高等学校 調査報告(五)
熊本大学五高記念館叢書 第七集

発行日 二〇二四年三月二五日

編集・発行 熊本大学五高記念館

〒八六〇―八五五五

熊本市中央区黒髪二―四〇―一

TEL 〇九六一―三四二―二〇五〇

FAX 〇九六一―三四二―二〇五一

URL www.goko.kumamoto-u.ac.jp

mail goko@kumamoto-u.ac.jp

印刷 株式会社

本書掲載の写真については許可なく複製・転載を禁じます。